

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1955年2月	江口清	若き日の安吾	紙誌	時事新報(17日)	アテネ・フランセで知り合った頃の回想。安吾が高等科1年の折、フランス語で「賞(エロージュ)」をもたらした話、長島萃と安吾と3人でデュアメル「深夜の告白」の読書会をした話など、他の同人からは聞かれない話題が多い。「木枯の酒倉から」を「牧野信一が激賞」、「黒谷村」を宇野浩二が推挙した」と書いている(作品名と人名についての江口の記憶は曖昧でのちに二転三転する)。安吾は「文学は金魚の糞のようなものではない」とよく語っていたという	
1955年2月	尾崎士郎	坂口安吾の死	紙誌	朝日新聞(18日)	前年末、安吾と新潟講演を共にした時、「彼の相貌はあかるく、仕事の上にもあたらしい方向に動く意欲が看取された」のに、突然の訃報に驚いている。『坂口安吾研究』I(冬樹社 1972)に収録	
1955年2月	檀一雄	鬼神のワザ	紙誌	毎日新聞(18日)	時折の安吾の「乱心」は「自己抽出の異常な苦闘のあらわれであった。一々意識して、おびきよせたモノである」と分析。「その臂力の雄偉さ。その思考の規模の斬新さ」は「鬼神のワザに思われた」と最大級の讃辞をもって、その死を悼む。『坂口安吾研究』Iに収録	
1955年2月	尾崎士郎	人間坂口安吾	紙誌	読売新聞(18日)	「安吾は太宰治ほど器用な作家でなく、むしろ鈍重といたいほど荒けずりな男である」と評し、「未完成であることによって存在を全うしていた」「未完成の天才」であったと追悼	
1955年2月	獅子文六	最後の文士	紙誌	読売新聞(18日)	「あんな、純粋な文士のタイプは、どこにもいなかった。腹がキレイなのである」と安吾の死を惜しみ、獅子の胃の手術後に湯河原の「加満田」で数日を共にしたこと、川奈のゴルフ会のと熱海の旅館で遅くまで飲んだことなど回想	
1955年2月	無署名	(追悼記事)	紙誌	読売新聞・地方版(18日)	安吾生前の談話を掲載。「ここの正月の一夜訪問したときはウイスキーをコップでぐいぐい飲みながら『こんどぼくが書く小説には地方の新聞記者がシロウト探偵になって出るが、新聞社の通信網はどんな程度だい』と質問し『札幌から鹿児島まで連絡するにしても専用線があるから一分もかからない』と答えると『そんなに早くは困るな、回答がくるまで二日ぐらいかかるといいんだが、それではプロットの組み直しだ』と言って笑ったとある。七北数人『評伝坂口安吾』(集英社 2002)に引用	
1955年2月	尾崎士郎	安吾の死について	紙誌	産業経済新聞(18日夕)	檀一雄の電話で安吾の訃報を聞き茫然としていると、大井広介からも電話があり、安吾晩年の無謀な酒や薬物使用を振り返る。「一面、極端な厭人家であった彼は他の一面において、人生を愛し世俗に親しんだが、「感情の動きに妥協の余地はない」ので、友情にもいたびか危機が訪れ、逆にその姿勢が「文芸評論の切れ味のするどさ」につながったと回想	
1955年2月	三好達治	友を喪ふ	紙誌	東京新聞(18日夕)	新人時代の安吾と牧野信一の家や安吾の家などで会ったことを追憶。当時の安吾は「おふくる思ひの孝行者で」「明るく無邪気に闊達な好青年」であり、「一面求道の精神が旺んで」「お互ひ、放言しながら、そのあたりの枯野原をほつつき歩いたりした」という。小田原で水害に遭った折、安吾は父五峰の『北越詩話』を返してほしいと手紙で言って来た話など回想。『三好達治全集』6(筑摩書房 1965)に収録	
1955年2月	安岡章太郎	坂口さんのこと	紙誌	時事新報(19日)	戦後、共立講堂で講演する安吾を楽屋で見かけたと回想。自分の小説をほめてくれた安吾を桐生まで訪問すると、ゴルフや剣劇、アメリカ婦人のチップや放屁の話など5、6時間も話してくれたという	
1955年2月	池島信平	安吾を偲ぶ	紙誌	新潟日報(19日)	池島が1948年夏、坂口家で焼酎を飲みすぎて帰途どぶに落ち、安吾の一着きりのズボンを借りて帰った話(『座談』1949年7月号でも紹介された)、税務署員が差押えに来て家内には何もなかった話などから、安吾の物欲のないだらかさを紹介。「安吾巷談」という題名は池島が付けたという。小説では「新しいロマンとして実に新鮮」だった「火」を代表作に推す	安吾巷談 火
1955年2月	南川潤	(追悼記事中の談話)	紙誌	上毛新聞(20日)	「昨年夏ごろどうも手がしびれるといっていたからあるいはそのころ既に病気におそわれていたのではないかと思う」と話す。安吾の人柄について「正直者で思ったことをズバズバいう性格だった。その反面さびしがり屋で悲しいところをもっていた。僕も病気がちで三月も逢わないので「話したい」と昨日(十六日)手紙を書いたところだった」とある	
1955年2月	池島信平	精神の尾テイ骨	紙誌	朝日新聞(23日)	安吾の葬儀で尾崎士郎が語った話として、安吾が長男のお守り袋を自ら作ってやり、中のお札は20枚も入れていたと紹介。「快晴で暖かい日であったのが、式の途中でにわかにか、天候激変した。雪までちらついてきた」とある	
1955年2月	船山馨	坂口氏のこと	紙誌	図書新聞(26日)	1947年夏、安吾や太宰、石川淳らと『ろまねすく』同人となり、打ち合わせを兼ねた懇親会に出席した折の、安吾の酒量のすごさを回想。その後も銀座のルパンでよく出逢ったという。『坂口安吾研究』Iに収録	
1955年2月	臼井吉見	文芸時評「つましい義務に忠実に」坂口安吾・人と作品	紙誌	週刊朝日(27日)	安吾の人と作品を概括。「墮落論」は「日本文化私観」からつながると指摘。流行作家になったが、「兼好法師のような隠者的批評眼の持主」であり、「潔癖すぎるほどの精神主義」ゆえに狂おしい道を歩いたとみる。「信長」を代表作とし、「縦横に空想力を駆使した、発刺たる作風は、躍如として、坂口安吾の信長になりきっている」と評価	墮落論 日本文化私観 信長
1955年2月	大井広介	坂口安吾の文学	紙誌	日本読書新聞(28日)	戦争中「現代文学」発表の諸作について「いちばん悪条件の時期に、坂口は実にいい仕事をした」、「一部の人に高く評価されていた」と証言。戦後、流行作家になってからは「坂口の最もハリのある仕事」として「花妖」を挙げ、「坂口公認の見解である」と付す。また、「歴史のうんちくと探偵小説愛好の双方を発揮した」作として「飛鳥の幻」を挙げ、「本人としては会心の一文だとうかがわれる」と推察。大井広介『バカの一つおぼえ』(近代生活社 1957)、『坂口安吾研究』Iに収録	花妖 安吾の新日本地理—飛鳥の幻
1955年2月	今官一	坂口安吾	紙誌	毎日グラフ(28日)	昭和十年代、作品社で初めて会ったときは「手のきれるような神経の感ぜられる、ほほのこけた青年であった」と回顧。安吾文学は「人生を愛しながら、ひとときも、きびしい人間批判をゆるがせにできなかった人の文学」だと結論する	
1955年2月	石川淳	坂口安吾を悼む—判りきつたことをいうが、……	紙誌	別冊文藝春秋(28日)	談話筆録で、「これ程の人物は、僕の知っている限り、一人も居ない」と始まり、安吾の死に対する強い悲しみが、怒りのような表現になって全篇を覆う。「白痴」を近代文学史上の傑作とし、自伝小説の中では「古都」など京都の生活を書いたものが「最もはつらつとしている」、近年では「真書太閤記」に感心したと評価	白痴 古都 真書太閤記
1955年3月	臼井吉見	アブレ・ゲールの終り	紙誌	朝日新聞(13日)	数多くの安吾追悼文を読み、「ずいぶんメチャクチャ生かたをしていたものらしい」と冷淡な感想を述べ、「文学上のアブレ・ゲールはこのへんで終りであろう」と締めくくる	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1955年3月	平林たい子	文芸時評—文学化した観念	紙誌	朝日新聞(26日)	遺作「青い絨毯」は「ここ数年來の落着きない氏の風ぼうと違う何かしみじみした所と奔放なところがケオスになっていた」と評価。「天才的」だった安吾が後年には競輪事件などで騒がれるようになっていくプロセスは「商業主義がいかに作家の中に入って作用するかということ」を表す典型例と述べる	青い絨毯
1955年3月	尾崎士郎	あとがき	解説	狂人遺書(中央公論社刊)	安吾のことを「おそろしく気の弱い、むしろ愛情過重の男であつた」といい、「その愛情のふかさが、一つの壁につきあたるごとくに変貌したり、崩壊していつたりした」。だから、競輪事件の折の妄想なども薬や酒のせいだけではない内発的なものとみており、その時でさえ「彼は正義をつらぬこうとする感情に燃えていた」。本集の収録作「狂人遺書」は「安吾の遺書でもあり、無限につながる思いを、この一文の中にたたきこんでいる」と批評	狂人遺書
1955年3月	中村地平	安吾さんの狂気	紙誌	熊本日日新聞(23日&24日夕)	戦前、菊富士ホテルにいた安吾とよく行き来した話と、つい数カ月前、取材で宮崎を訪れた安吾を歓待した時の健全そのものだったようすなど回想。見聞する「ひどい狂気」など影もなかったという。中村地平『卓上の虹』(日向日日新聞社 1956)、『坂口安吾全集』別巻に収録	安吾新日本風土記
1955年3月	花田清輝	安吾と捕物帳	紙誌	京都新聞(24日)	安吾の訃報を聞いて、追悼の気持ちで初めて『安吾捕物帳』を購入、その見事さに驚いたと記す。まだ数篇しか読まぬ段階ながら「白痴」「火」「信長」などをも超える傑作と評価。翌年の「捕物帳を愛するゆえん」へと発展していく、そのはしがきのような小文	明治開化安吾捕物
1955年3月	無署名	上梓に際して	解説	保久呂天皇(大日本雄弁会講談社刊)巻末	安吾文学には「貪婪なくらい熱心な観察態度と、底知れぬまでに深い人間への愛情」があつたと評し、「好奇心は、人一倍旺盛であつたから、眼を光らせる機会の多い旅行等のあとではひどく消耗が目立つたようである」と安吾の死を悼む。末尾に「近くまた書下し探偵小説「いつもマントを着ていた」を刊行する手筈であつた」という情報を付す	
1955年4月	檀一雄	坂口安吾の死	紙誌	群像	安吾晩年の異常な酒量を紹介し、臨終から葬式までのようすを記す。檀一雄『太宰と安吾』、『文芸読本 坂口安吾』(河出書房新社 1978)に収録	
1955年4月	檀一雄	安吾・川中島決戦録	紙誌	文藝春秋	1953年7月から「決戦川中島」の企画で、安吾と新潟から松本へ取材旅行した折の回想。アドルム服用から鬱病の発作、留置、長男誕生のしらせまでが、檀の他著よりも詳細に語られている。他にも、安吾服や酒・煙草の好みなどから安吾の人となりを象徴的に紹介。檀一雄『太宰と安吾』に収録。同『小説坂口安吾』(東洋出版 1969)には「小説坂口安吾」第3部として編入される	決戦川中島
1955年4月	葛巻義敏	坂口安吾への手紙	紙誌	新日本文学	追悼文でありながら、半ば以上は安吾への抗議文になっている。直接には「世に出るまで」の記述に対する怒りで、素人同人誌「青い馬」を岩波にねじこんだのは自分ではないと主張。しかし、葛巻の韜晦した文章は結果的に、安吾の記述が決して「虚構」ではなかったことを証している。『坂口安吾研究』I、『近代作家追悼文集』36(ゆまに書房 1997)に収録	世に出るまで
1955年4月	花田清輝	坂口安吾の死	紙誌	新日本文学	安吾に会ったのは2度きりだが、「ツァーリ・ロシアの時代に生きていたらラスプーチンぐらいにはなれたであろう」と人柄を追懐。最初に会ったのは中央公論社から招待された時(平野謙「追悼」参照)。二度めは安吾と中野重治の対談企画のため、中野と桐生を訪れた時。大型犬のラモーに悩まされたが、南川潤もやって来て歓談。花田一人、最後まで居残ったところ「安吾は、わたしにむかつて、モグのようなことがあつたら、ぜひぼくのところへいらつしやい、ぼくは捕物帳をかいてるし、そんなことをするのが大好きだから、といつた」という。『坂口安吾研究』I、『近代作家追悼文集』36などに収録	
1955年4月	平野謙	追悼	紙誌	知性	戦後は3回しか会っていない。『新小説』の座談会、『文学季刊』の座談会と、これと前後して、当時中央公論社にいた林達夫の肝いりで、安吾、太宰、石川淳、福田恒存、花田清輝と共にごちそうになった(花田の「坂口安吾の死」に同じエピソードあり)。その日は「雪のふった翌日で、その日女房と立廻りを演じて手首にミズバシをつけた私は、やむなく白いホータイをまいて出席」、これを安吾にエッセイで書かれて、以来会わなくなってしまったという。『近代作家追悼文集』36に収録	
1955年4月	福田恒存	坂口さんのこと	紙誌	知性	安吾は太宰と同じく「自己破壊型」の人間で、「この二人の誠実さとは、あくまでも自己を否定しなければならぬものなので」と規定。「もともと坂口さんは人間のすなおなやさしさといったものを求めていた人」であり、それゆえ「ローマン派だともう」とも。伊東時代に2度ほど遊びに行き、住む家を探すのを手伝ったところ、「そのお礼に、アメリカ製のカンキリを貰った」という。『近代作家追悼文集』36に収録	
1955年4月	尾崎士郎	夢のあと(安吾についてのおぼえ書)	紙誌	中央公論	出逢いの日のこと、京都へ発つ安吾を送別したこと、その後の疎遠と戦後の友情復活などを、安吾からの長い手紙を引用しつつ語る。特に、1946年8月発表の「芋月夜」以来、尾崎が繰り返し語ってきた1945年9月29日の再会の描写は感動的で、資料価値も高い。『坂口安吾研究』Iに収録	
1955年4月	坂口三千代	亡き夫へ	紙誌	中央公論	臨終前後のようすを詳細に記した前半部分は『クラクラ日記』(1967年3月刊)に全文引用された。後半は長男出生後の子煩悩ぶりなど、やはり同書で語られるエピソードが多い。『坂口安吾研究』I、坂口三千代『安吾追想』(冬樹社 1981)、同『追憶 坂口安吾』(筑摩書房 1995)、同『ひとりという幸福』(メタログ 1999)に収録	
1955年4月	竹内一郎	書かれなかつた安吾風土記(高知県の巻)	紙誌	中央公論	急逝により執筆されずに終わった「安吾新日本風土記」第3回「高知県の巻」取材旅行のようすを詳細に記す。安吾らしい見解も随所にあり、高知をどのように書こうとしていたかが窺える貴重な資料。坂本龍馬を非常に高く評価していた談話もあり。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾選集』12(講談社 1983)、『安吾新日本風土記』(河出文庫 1988)、『坂口安吾全集』別巻に収録	安吾新日本風土記
1955年4月	大井広介	戦時中の坂口	紙誌	文学界	戦争中、安吾は月に10日ぐらい大井宅に寝泊まりして、三国志や探偵小説を読んだり、『現代文学』同人たちとゲームや野球盤などで遊んだりした。大井家の家族たちとも安吾がいちばん仲がよく、面白いエピソードには事欠かなかった、そのいくつかを紹介。ほかに安吾が親身になってくれたエピソードが多く、晩年、絶交してしまったのが無念でならない心情が伝わる追悼文。『バカの一つおぼえ』、『坂口安吾研究』I、『文芸読本 坂口安吾』、『近代作家追悼文集』36に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1955年4月	南川潤	桐生の安吾さん	紙誌	文學界	『現代文学』以来の友情と、競輪事件での親身な協力で報いるような形で、安吾が桐生へ転居して来た折の回想。晩年「酒と薬の魔性」に冒されて安吾が引き起こした「いくつかの事件」が頭をよぎるが、本作の中では一切触れず、転居の経緯だけを詳細に説明する。皮肉にもそれがために、安吾の事跡をたどるには絶好の資料となっている。『坂口安吾研究』I、『近代作家追悼文集』36、『坂口安吾全集』別巻に収録	
1955年4月	三好達治	若き日の安吾君	紙誌	文學界	漫談調の文章は嫌いだという三好が「安吾巷談」「安吾新日本風土記」などは「をかしみに一面高雅な味ひがある」と「まつしぐら」に「一気呵成の流露感が隈々にしみ透つておいていい」と高く評価。小田原時代の暮らしぶりを紹介する中で、「墮落論」へとつながっていく様々な安吾の性質を詩人ならではの感性で分析。三好の他の安吾回想文より、底に一貫した温かみを感じられる。『坂口安吾研究』I、『近代作家追悼文集』36に収録	安吾巷談 安吾新日本風土記
1955年4月	匿名(不可)	コラム「文學界」	紙誌	文學界	「世に出るまで」について、「自分で追悼記をかいているような奇妙な感じのするもの」と述べ、作中、島尾敏雄のことを「如才ない生き方に転じてから才能が伸びない」と評してあることに同調、「この傾向は、「第三の新人」や、『現代評論』に拠る若い批評家などにもみられる」とする。また、安吾の告別式に参列して感動した「きのとひつじ」なる匿名子が2月23日付『東京新聞』で「作品第一主義」の批評家たちを攻撃し「作家の現実を視るべし」と「人情断絶の訓話を垂れている」のを嘲笑	世に出るまで
1955年4月	青野季吉	弔詞	紙誌	文藝	「大いなる偶像破壊の文学、執拗な怒りの文学」でありつつ「その底に人間の赤裸々な真実への愛情をふかぶかとたたえている」ユニークな文学であったと追憶。『坂口安吾研究』I、『近代作家追悼文集』36に収録	
1955年4月	尾崎一雄	坂口安吾追想	紙誌	文藝	尾崎が『早稲田文学』の編集をやっていた折、牧野信一の紹介で安吾の「雨宮紅庵」を掲載したのが縁で知り合い、酒と碁で仲よくなった。大親堂の主人が祖父の葬式の時、安吾が円タクで乗りつけ、金を借りて行った話など回想。『坂口安吾研究』I、『近代作家追悼文集』36に収録	雨宮紅庵
1955年4月	河上徹太郎	『墮落論』その他	紙誌	文藝	安吾は「常識家」「モラリスト」であり、自らの示す常識に「外れたら贖物だぞといふことを、口を酸っぱくして説く所」が小林秀雄にそっくりだと指摘。「墮落論」とよく似た「至極健全な議論」を説いた「日本文化私観」を、河上は「戦後のものとはばかり思つて読んだ」が、戦争中だと知って驚いたという。「白痴」は「生来彼が持つてゐるものが一度に花を開くやうに純粹に開現したもの」とみる。出逢った頃、牧野信一らと飲み明かした日々を回想。酒席で議論する時も安吾には「求道者的なもの」があり、牧野からは酒倉の「大学生」と呼ばれていたと記す。『坂口安吾研究』II、『近代作家追悼文集』36に収録	墮落論 日本文化私観 白痴
1955年4月	川端康成	弔辞	紙誌	文藝	安吾のことを「独創、高邁、奔放、浄潔で、天才的」と評価し、その死を悼む。『坂口安吾研究』I、『近代作家追悼文集』36に収録	
1955年4月	北原武夫	坂口安吾の生涯	紙誌	文藝	デビュー当時から、安吾は「深沈とした色を湛へた不気味にも静謐な深淵的なもの、真の意味で思想小説と呼ばれ得る彼独特のユニークな小説」を書き「鬱然として一家を成してゐた」と回想。その後の長い不遇時代、共に『桜』の同人になったり、戦争中は北原の家にも居候に来ることがあったという。戦後発表した「白痴」が、初期からの重要な文学テーマを深めた一つの達成だったと評価。しかし、生きることと書くことが同義だった作家ゆえ「書きまくる」ことが必要で、そのためには酒でも「麻薬」でも愛用することが必要だったと解釈する。北原武夫『文学論集』(冬樹社 1972)、『坂口安吾研究』II、『近代作家追悼文集』36に収録	白痴
1955年4月	佐藤春夫	弔辞	紙誌	文藝	安吾の「高邁の志操」「闊達にして超俗の談論」「颯爽たる英姿」を惜しむ。『坂口安吾研究』I、『近代作家追悼文集』36に収録	
1955年4月	三好達治	昔ばなし	紙誌	文藝	小田原時代の安吾との交流を回想。「若き日の安吾君」と同年同月の発表で、少し毛色の違うエピソードを紹介している。安吾が「対人関係に潔癖」で人を毛嫌いすることがあった話、なんの挨拶もなく「長期の雲隠れに入った」ため、安吾の借宅の後始末に困った話など、本作では苦情めいた話柄が多い。『坂口安吾研究』I、『近代作家追悼文集』36、『坂口安吾全集』2(1999)月報に収録	
1955年4月	福永武彦	註文の多い文芸時評	紙誌	文藝	タイトルどおりの辛口時評だが、その初めに安吾を追悼。きちんと纏まっても「印象の稀薄な作家」より、「常に破れかぶれで、しかも個性のはつきりした坂口氏のやうな作家」のほうが貴重だという。「代表的傑作を未来に見詰めて、遂にそれを書きあげることの出来なかつた」作家だとしつつも「氏の筆力は旺盛を極めて、この次には必ずや傑作が現れるのではないかといふ期待を読者に抱かせた」と記す	
1955年4月	若園清太郎	坂口安吾さんと碁の話	紙誌	風報	同人誌『野麦』を作ろうと計画した話。若園と安吾、野上彰、頼尊清隆、岡田東魚、伊田和一らが同人で、みな碁の仲間でもあり、このメンバーで尾崎一雄ら砂子屋書房チームと対戦したいと安吾は楽しんでいったという。若園は大戦さなかの1943年頃のこととしているが、実際は安吾が取手に住んだ1939年5月頃である。1956年9月の頼尊清隆「花妖」の頃から、1957年6月の野上彰「青麦」時代に、より詳しい回想がある。『坂口安吾全集』別巻に収録	
1955年4月	尾崎一雄	冬眠居日録(九)	紙誌	風報	安吾が尾崎一雄宛に送った碁の挑戦状を全文紹介。安吾、頼尊清隆、岡田東魚、伊田和一、野上彰、若園清太郎ら「本郷チーム」が、尾崎一雄ら「砂子屋書房チーム」を「血祭りにあげ、やがて日本中を風靡の筈也」と書かれ、対戦では尾崎らが惨敗だったと回想。伊東でも安吾と会うといつも碁になったという。尾崎一雄『天狗の羽風』(宝文館 1957)、『坂口安吾全集』別巻に収録	
1955年4月	臼井吉見・亀井勝一郎・安岡章太郎・伊藤整ほか	安吾文学ベスト5	紙誌	別冊文藝春秋	臼井吉見、浦松佐美太郎、亀井勝一郎、丹羽文雄、安岡章太郎、河盛好藏、伊藤整、山本健吉の8人が安吾作品のベスト5を挙げたもの。うち7人が「風博士」と「白痴」を挙げ、続く4票獲得が「墮落論」「日本文化私観」「信長」、3票が「夜長姫と耳男」「安吾巷談」で、「桜の森の満開の下」は1票も入っていない。当時部数の多かった本がどれだったかにも左右されただろう。「風博士」には最初の衝撃という文学史的な見方が働いたものか	風博士 白痴 墮落論 日本文化私観 信長 夜長姫と耳男 安吾巷談

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1955年4月	臼井吉見	坂口安吾の作品	紙誌	別冊文藝春秋	マイ・ベスト5に「風博士」を挙げているが、これは牧野野一の影響下に書かれたと断じ、しかも牧野には及ばないと厳しい評価。「白痴」も挙げているが「不自然な力みといらだたしさがある」と留保付きの評価。晩年の「夜長姫と耳男」が最もよい作で「清冽孤独な精神が息づいている」、「人物のなかに坂口の息を吹きこんでいる」と高評価。この延長に「信長」があるとみる。多数書かれた安吾追悼文のなかでは北原武夫「坂口安吾の生涯」が「随一のすぐれたものであった」と評価	風博士 白痴 夜長姫と耳男 信長
1955年4月	大井広介	安吾言行録	紙誌	別冊文藝春秋	税金滞納から差押えを受けた話の詳細を語る。身近で調停役など引き受けていた大井だが、この件や競輪事件などの処置について安吾と対立し、絶交に至ったことなどもあって、デマに近い想像も書いている点、注意が必要	
1955年4月	中島河太郎	探偵作家・坂口安吾	紙誌	宝石	安吾の推理小説観と発表された作品とを概観したもの。『近代作家追悼文集成』36に収録	
1955年4月	江戸川乱歩	坂口安吾の思出	紙誌	宝石	座談会で出逢ってから、乱歩の土曜会でも数回話したが打ち解けた仲にはなれず、「不連続殺人事件」の作品は絶讃したが、探偵作家クラブ賞を授賞する際に安吾自身が来なかったことにも悪感情をもったことなど回想。『江戸川乱歩随筆選』(ちくま文庫 1994)、『近代作家追悼文集成』36などに収録	不連続殺人事件
1955年4月	無署名	時評—坂口安吾の死	紙誌	芸術新潮	井伏鱒二、石川淳、獅子文六、尾崎士郎らの安吾追悼文の一部紹介し、死を惜しむ。「彼は自分の文学の信条を大切にしていた人で、自分の文学を守るためには、それにふさわしい生き方をしなければならぬと頑固に信じていた」がゆえに「日常生活にも無理があつたのではないか」と推測	
1955年4月	檀一雄	あとがき	解説	真書太閤記(河出書房刊)	「真書太閤記」は「中絶した信長の続稿をも兼ねて、更に秀吉を大規模に書き拡げてみたい意向であつたらう」と推定。もともと、本作も桶狭間の合戦で終わり、「これから信長と秀吉が接触すると云ふ、もう一息のところであつた」と作者の死を惜しむ	真書太閤記
1955年4月	正宗白鳥	下戸の文学観	紙誌	東京新聞(22-24日)	李白の漢詩から歌舞伎、岩野泡鳴、安吾へと至る「酔ひどれ讚美」の文学・演劇への嫌悪感を綴ったもの。「多量に飲めば飲むほど、えらいと感心し、飲む人その人の豪傑性に敬意を寄せる」態度が文壇の風潮になっていると、下戸の立場から批判。確かに一部の読者にそうした傾向があるとしても、それを感情的に作者のせいにしては問題あり。「死屍に鞭打つ」たぐいの悪口としか読めない。これに対し、尾崎士郎が「酔中一家言」で反論を試みている	
1955年5月	檀一雄	解説	解説	わが人生観(筑摩書房刊)	収録作品の解説というより、安吾賞揚の広告文のよう。「生れなかった子供」を「わが人生観」連載中の「白眉」とし、「安吾の憂鬱な思考の極限で書き綴られたような淋しい、はてしのない虚無の文体だ」と批評。檀一雄『太宰と安吾』(虎見書房 1968、角川ソフィア文庫 2016)に収録	我が人生観
1955年5月	檀一雄	小説坂口安吾	紙誌	新潮	1949年の第1部と同題だが明確な続篇の意図をもって書かれてはおらず、重なるエピソードも少なくない。太宰没後、安吾に小林秀雄邸へ案内された話や入院前後の話が新しく、安吾井や安吾オジャの話も入っている。檀一雄『小説坂口安吾』に第2部として編入され、『坂口安吾研究』Ⅱに再録	
1955年5月	菱山修三	旧知坂口安吾—転々流離の生涯を偲んで	紙誌	笑の泉	アテネ・フランスで知り合った頃から、蒲田の母や兄たちと同居した安吾の家を訪ねたのをはじめ、安吾がバーのマダムおさんと半同棲生活に入った蒲田の工場街の安アパート、その後転居した大森のアパート、本郷の菊富士ホテル、京都伏見の下宿など、各所を訪ねた時の部屋や境界のようすが詳細に語られている。年月などの記憶違いや情報の取り違えは多々あるが、資料としては貴重なもの。『坂口安吾全集』別巻に収録	
1955年5月	江戸川乱歩	探偵小説三十年44—坂口君はクラブ賞を悦んでいた	紙誌	宝石	安吾がクラブ賞授賞式に来なかった理由について、大井広介から届いたハガキを全文紹介。「坂口は受賞を無邪気に悦び、大得意でした」「式に欠席したのは、テレビのテレ屋でした」とある。事実上、授賞式の3日前から安吾は入院治療中で意識もない状態だった。江戸川乱歩『日本探偵小説事典』(河出書房新社 1996)などに収録	不連続殺人事件
1955年5月	田村泰次郎	青春坂口安吾	紙誌	小説新潮	葬儀のようすから書き出し、新人時代の安吾と山下三郎邸で出逢ったこと、『桜』同人として活動を共にし、矢田津世子と安吾の恋の顛末をはたから見ていたこと、照れ屋だが頑固だった安吾の言動、バーのマダムおさんと安吾の半同棲生活まで、戦前の安吾の姿が目に見えるように描かれた追悼文。資料としても貴重。『坂口安吾研究』Ⅱに収録	
1955年5月	十返肇	坂口安吾の死—文壇クローズアップ	紙誌	小説新潮	「デカダン文学をもって前進した作家は、太宰のみならず織田も坂口も、まるで自殺のやうな死に方であつた」と印象を述べ、「作家としての坂口氏の悲劇は、彼の文学には通俗性が本質的には全くないにもかかわらず、彼自身もあると信じこみ、流行作家となつた点にあつたのではなからうか」と論じる。「通俗性」の定義問題に帰する議論ではあるが、十返はそれまでの徹底的な安吾否定からやや方向を転じた感あり。十返肇『現代文学の周囲』(河出新書 1956)に収録	
1955年5月	無署名	侃々諤々	紙誌	群像	諸氏の安吾追悼文のうちで檀一雄の「最も軽薄」で「彼ほど坂口の亜流は見当らない」と悪罵をぶつけ、平林たい子が3月の「文芸時評」で安吾の「奔放性」を語ったのを評価する。ただし、その「奔放性」を戦後の「商業主義のワクの中で捉へて居た」のは考えが浅いとする。「日本文化私観」を引き合いに、安吾は商業主義に引きずられたのではなく「坂口がジャーナリズムの一つのタイプを造つた」のだと高く評価	日本文化私観
1955年5月	荒正人	坂口安吾の二著	紙誌	図書新聞(7日)	「狂人遺書」について、「英雄も凡人も垣根をはずして、一箇の人間として把握している自在の造型力に感心する。四角四面の歴史小説など、この作品のまえに大いに反省の必要がある」と絶讃。短篇集『保久呂天皇』は、いずれも「市井の変り者、型破りの人物を主人公」にしているが、歴史ものよりも張りがないと比較的評価を下げるが、「人間の愚行への愛情をこんなにむきだしに示している文学は他に類例をみることができない」と好意的に批評	狂人遺書 保久呂天皇
1955年5月	辻亮一	「吹雪物語」について	紙誌	文学者	「吹雪物語」は「作者が自らの為に書いたもので、読者を対象としていない」「なぐり書き」の長篇とみる。安吾自身の「再版に際して」の記述にのっとり「失敗作」と断じながらも、「此の物語に対決する作者の態度は誠実で、すさまじい打込み方である」点を評価。『坂口安吾研究』Ⅱに収録	吹雪物語

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1955年5月	大井広介	坂口文学の舞台裏	紙誌	産経新聞(23日)	「信長が己れを神にまつり拝ませようとして、光秀に大義名分を与えたというのが、坂口多年抱負の解釈だったが、到々「信長」「太閤記」どちらも桶狭間までしかかけなかった」と回想	信長
1955年5月	中村地平	安吾の風土記と宮崎	紙誌	朝日新聞・西部版(31日)	取材で宮崎を訪れた安吾に「この土地の人間と、神話について語った」ところ、安吾は「まるで子供のような興味と、熱情をみせてきた」という。たった一夜の案内情報から見事な取材記事にまで仕立てた手腕を讃える。『坂口安吾全集』別巻に収録	安吾新日本風土記
1955年6月	無署名	ベストセラーの紹介 第10集「信長 坂口安吾作」	紙誌	社会人	「信長」の紹介文で、「信長を彼独得の軽快な筆で生き生きと描いている。そして安吾好みの、人生を命をかけて開拓した人物として描出している」と評価	信長
1955年6月	尾崎士郎	酔中一家言	紙誌	新潮	正宗白鳥が「下戸の文学観」で、安吾や太宰などを例に引き、文壇に「酔ひどれ讚美」の風潮が蔓延していると非難したことに対して、真っ向から反論する。彼らの文学が人の心を動かすのは「酒のせみではない」と断言し、安吾がいかに家族思いの人間だったかを語る。子供のために自らお守り袋を作ってやった話、新潟へ安吾と共に講演に行った帰りに、安吾が父五峰の号の由来となった山や実家の話など懐かしそうに語った話などを回想	
1955年6月	無署名	縮刷図書館——狂人遺書	紙誌	知性	新刊『狂人遺書』の書評。「過剰な愛情は罪デアルカ」または「我執とは空々漠々たるあの世へのただ一つの切りこみではないか」などの問いを立てて読むのもいい、と紹介。「キリストのいない国の告白文学の変種。彼は対象がないため、自分を食うだけである」と警句のような批評で締めくくる。同誌月号から檀一雄による「真書太閤記」続編が「連載第八回」として始まる	狂人遺書
1955年6月	臼井吉見	解説	解説	戦後十年名作選集6(カッパ・ブックス)(光文社刊)	根拠なく安吾作品は牧野信一の「作風をうけつたもの」と断定。安吾の執筆事跡についても誤認が多い。「墮落論」は「日本文化私観」とつながるもので「きわめて合理的で闊達な批評精神が働いている」、「これが非合理的な障害にぶつかれば」「デカダンスへの呼びかけも高まらざるをえない」と指摘。「白痴」については「空襲下をさまよう人間の虚無感を象徴する記念すべき作品」と高く評価し、「夜長姫と耳男」「信長」も「すぐれた作」と評価。本書には「白痴」を収録	墮落論 白痴 夜長姫と耳男 信長
1955年8月	山本健吉	戦後の文学運動の消長	紙誌	文學界	戦後文学10年における各文学グループの消長を概説。「新戯作派」は「既存の秩序に反抗し、一種のデカダニ的韜晦のうちに、アウトロウ的な反俗精神を示している」点で共通するのが、安吾、太宰、織田の3人であったとし、三者三様に「もろさがあった」といくぶん否定的にみる。石川淳は「知的な諷刺から手法のデフォルマンシオンに進んだ」ので流れが違うとし、伊藤整や高見順を同じ派に分類する意見は「当を得ない」と完全却下	
1955年8月	檀一雄	解説	解説	二流の人(ミリオンブックス)(講談社刊)	安吾の歴史小説について、「安吾は歴史に明るいというよりは、人間に明るい。かりに、いかがわしい講談、稗史の類をかりてきても、安吾の眼光を通すと、堂々たる人間像に転化する」と賞讃。しばしば、安吾は秀吉などの偉人を卑小にしすぎだと批判されたが、檀は批判に反論、「安吾は大正期の作家のように、巨人を卑小にして自分の足許にころがすようなことをしない。巨人は巨人のように、懸命に、赤裸々に、堂々と生き尽そうとする存分の姿を描く。そしてその果に、「死のうは一定」のあわれな人間共の過ぎてゆくマボロシを弔うわけである」と好意的に記す。また、単なる娯楽にとどまらず「人間とは何か? 人生とは何か? この問題をまぎれなく生き抜いた小説の魔物のような天才をかり来て縦横の筆をふるうわけである」と安吾の生真面目な本質を突いている	二流の人
1955年8月	大井広介	解説	解説	花妖(池田書店刊)	「坂口の小説から代表作の一つあげるといわれれば、私は躊躇なく「花妖」をあげる」と大井が絶賛する未完長篇を初収録する。中断の理由は、新聞小説の型をはみ出した過激なシーンが疎んじられたためと大井はみる。「名状しがたい迫力のある一篇」で、安吾自身「あんなにハリをもつて小説を書いたことはなかつた」と、述懐していたという。また、国税局による印税差押えが原因で単行本にならなかった「安吾の新日本地理」から、「坂口の重要著作である」と大井が強調してやまぬ「飛鳥の幻」と、戦中に世相に「ソッポをむいて」書かれた「さすがにいいエッセイ」である「ラムネ氏のこと」も初収録する。大井の追悼の意のこもった編集本になっている	花妖 安吾の新日本地理 飛鳥の幻 ラムネ氏のこと
1955年9月	大井広介	「現代文学」の悪童たち—戦争を如何にしのいたか	紙誌	文學界	『現代文学』の同人集めの話に始まり、戦争中は大井の家に集まって探偵小説の犯人当て、ファイン・プレイという野球のおモチャ、ウスノロというランプゲーム、イエス・ノーという質問を重ねて話題の人物を当てるゲームなどで遊んだことの回想。誰が強かったかとか誰がどんなインチキをしたかという笑い話まで、詳細で盛り沢山な内容。安吾は「原稿も積極的に書いた」が、ゲームでも主になり「負けを一手に引受けた」と書いている	
1955年9月	青山光二	青春の賭け	単著	(現代社刊)	無頼派座談会のような同時代に近い時期に活写した「旅行者」(1949)を含む、織田作之助の伝記小説。1978年に文庫化	現代小説を語る座談会
1955年9月	江口清	「青い馬」のことなど	紙誌	中央公論	「木枯の酒倉から」について「たしか藤村が賞めているという話も聞いたし、牧野信一もこの作によつて彼を注目しはじめたのである。当時の若手では佐藤村が推賞した」とある。江口のみが記す藤村が褒めた話の最初であり、又聞きである上、「風博士」で初めて安吾を知ったはずの牧野の部分も含め、事実誤認である可能性が高い。『青い馬』の誌名は本多信が付け、表紙の字も本多が書いたという。「風博士」を認めない葛巻義敏が編集から手を引いたあとは、本多と江口が引き受けたことなど回想	木枯の酒倉から 風博士
1955年9月	十返肇	破滅型作家と現代	紙誌	東京新聞(19～20日)	戦後派作家の作品がすたれて、織田・安吾・太宰ら「破滅型」の文学が若者たちに愛読されている現状に鑑み、再読してみて彼らの文学の若々しさに驚いたという。「破滅型とはつまり青春の性格そのものを自己の生き方としたということ」だと気づくが、その文学に親近する「現代青年の感じている不安と絶望」が社会に対するそれであるとすれば、「現代日本の復興のあり方が間違っている証拠」だろうと解釈	
1955年9月	大岡昇平	あとがき	解説	創作代表選集16「昭和30年前期」(大日本雄弁会講談社刊)	「狂人遺書」をこの年の秀作として収録するが、特に内容に関する言及はない	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1955年11月	鶴見俊輔	坂口安吾 清水幾太郎 伊藤整	紙誌	中央公論	「明治・大正・昭和 人物思想史」特集の一篇で、安吾の生涯と作品を概括。長島萃(アツム)との友情が後年まで安吾の「人間観の原型」になっていたとし、「火」や「不連続殺人事件」にもその影が見られるという。「安吾巷談」や「街はふるさと」を評価し、「中でも「信長」は、安吾の全創作中第一の秀作であり、講談の技法と精神とを、円朝以後の長い模倣時代から解放した」と絶讃	火 不連続殺人事件 安吾巷談 街はふるさと 信長
1955年12月	臼井吉見	無頼派の消滅	紙誌	世界	無頼派作家たちの文学活動とは、志賀直哉や島崎藤村に代表された当時の文壇に対して「自己破壊による復讐」を行った「一種の特攻戦法」であったと述べる。彼らは「被害者」心理からデカダンスへ向かったとみる。戦後派作家たちの活躍によって、すでに志賀たちは「別個のフィクショナルな「私」が、いくつも生れている」ゆえに、無頼派の戦ってきた意味もなくなったとする、一面的な視点の論文。『臼井吉見集』1(筑摩書房 1985)に収録	
1956年1月	荒正人	戦後の文学	共著	創作講座「文学をどう考えるか」(思潮社刊)	文学概論書。「伝統的文学」のくりに「新戯作派」を含め、安吾・太宰・織田・石川・田中英光・高見順・伊藤整・阿部知二・北原武夫などと規定。安吾については「反俗的抵抗が衆人に迎えられた。一部からは、デカダンスの謳歌者と見做されたが、実は深癖なモラリストであり、健全な常識家であった」と記す。1950年12月、1952年6月および10月発表の論文と同題だが、内容はそれぞれ別	
1956年1月	臼井吉見	解説	解説	日本国民文学全集30「昭和名作集IV」(河出書房刊)	「風博士」を牧野信一の影響下に書かれた作品と断定。ただし、安吾自身は執筆当時、牧野作品を読んでいなかったと証言している。本書には「風博士」と「黒谷村」を入集	風博士
1956年1月	大井広介	坂口・太宰・織田	月報	日本国民文学全集30「昭和名作集IV」(河出書房刊)	「現代文学」時代の安吾は「最も積極的に書いていた」。とにかく「書くのが好きだった」という。また「友情の厚い人物」で、大井家が罹災した時など、安吾が大井の妻に「うんと甘いものをもってきてあげますよと告げた。坂口は平常はカケ基をしりぞけていたが、この時間師の砂糖とカケ、虎の子のラジオをふいにした」とある。『バカの一つおぼえ』に収録	
1956年2月	江口清	ANGO未発表断章—新人時代の文学活動—「解説に代えて」	紙誌	文学界	「木枯の酒倉から」を書いた直後の安吾が葛巻に送った手紙と、同封された未定稿「愛染録」および「愉快なる殺人戯画」についての解題・補註(この未定稿は2000年『坂口安吾全集』第16巻に葛巻宛書簡として収録)。1955年2月の「若き日の安吾」と内容の重なる回想も付いている。ここでの新しい話題として、江口の生家が質屋だったため、安吾は金に困った時、尾崎士郎が安吾に贈った掛け軸を担保に17円を借りたことがあったという。その軸は江口がとっておいて、後に菊富士ホテルにいた安吾に返しに行つたらしい。また、安吾が竹村書房で「フランス心理小説叢書」の企画をしていた折、ラディゲの巻の訳者として江口を推挙してくれ、「ドルジェル伯の舞踏会」を訳したが、この時の企画は立ち消えになった	
1956年3月	福田蘭童	続うわばみ行脚	単著	(近代社刊)	「安吾居士」の章で、安吾が伊東競輪の不正告発をする前夜、蘭童は安吾、三千代と3人で不正を確信し、深酒したという。ジョニーウオーカーのストレート。しかし、『サンデー毎日』で告発の応援を書いたところ、電話口の安吾は「キミは俺の苦境をすくってくれた。これがこわい。つまりキミは俺をすくってくれたという名目で、この俺を脅喝するだろうからサ……」と言ったという。「気の毒な安吾さんだと思った」。伊東時代から安吾に釣りを勧めていたが、桐生に転居してようやく釣りを始め、「アユのドブ釣りは面白いね」とハガキが来て安心して矢先の計報だったと嘆く	
1956年4月	松葉直助	坂口安吾の思ひ出	紙誌	創作	栃木県足利市の古墳めぐりをしたいという安吾のため、1953年5月、作品社社長の山内文三と共に案内して回った話、安吾が足利に自邸建築の計画を立てた話、足利の旅館「巖華園」で画帳に「花の下には風ばかり」と揮毫した話など回想。画帳の写真は『坂口安吾全集』第16巻(筑摩書房 2000)に収録された	
1956年5月	荒正人	無頼派の文学	紙誌	知性	織田、太宰、田中英光、安吾の生涯と文学とを順に概説、彼らが「私小説を出発点としている」のは「生活の破滅と文学の破滅の重なり」があるからだとする。概説は表面的で、やや敵意が感じられる。「家族主義をふみにじった点」に大きな特徴があるとし、身の破滅をかえりみず自由を謳歌した彼らの文学がサラリーマンの羨望を呼んで人気が出たと説く。『坂口安吾研究』Ⅱ(冬樹社 1973)に収録	
1956年6月	石川淳	安吾のある風景—無駄なエネルギーを使って生きた孤独な面影の追憶	紙誌	文学界	アドルム中毒から鬱病を再発させた安吾に入院をすすめたこと、舞昇に行った折の話、競輪事件の折の「なにものかに追はれてゐるやうな、おひえたけはひを示した時間」などを回想。長篇「火」の見事な「描写」の力を評価。「白痴」は「安吾の全部」であり、「印度的」でまとまりのつかない無限のエネルギーを感じさせると高く評価。安吾が書いた色紙の文句「花の下には風吹くばかり」で締める。石川淳『安吾のいる風景・敗荷落日』(講談社文芸文庫 1991)、『現代日本文学大系』77(筑摩書房 1969)、『坂口安吾研究』Ⅱ、『文芸読本 坂口安吾』などに収録	火 白痴
1956年6月	十返肇	現代文壇人群像	単著	(六月社刊)	『時事新報』に匿名連載したもの。「坂口安吾」の章は安吾生前の発表回で、1955年5月の「坂口安吾の死」と同趣旨の論旨展開。安吾はジャーナリズムにチャホヤやされすぎて「タガがゆるんじやったね」と嫌味を述べながらも、もう少し桐生で静養できていたら「今までよりずっと特異な芸術性を生めるに違いない。牧野信一みたいな空想的ロマンの可能性をもつのは矢張り彼ぐらいじゃなからうか」と珍しく褒めている。また、「二流の人」や「道鏡」の方が「外套と青空」などより「遥かにすぐれている」とも	二流の人 道鏡
1956年6月	小林秀雄	坂口安吾	月報	坂口安吾選集・内容見本	新人時代の安吾と上野駅でばったり会ったことを回想。共に新潟へ行く用事があり、食堂車で酒盛りに。石打という山間の小駅に一人降り立った安吾は「長い事手を振って」見送ってくれたと追懐。『新訂小林秀雄全集』別巻1(新潮社 1979)、『坂口安吾全集』別巻に収録	
1956年6月	石川淳	おそるべき隣人	月報	坂口安吾選集・内容見本	「安吾の仕事はひとびとのうちにあるひは眠つてゐるかも知れないエネルギーを呼びおこし、あるひは発見されなかつたかも知れない運動の方向にあたらしく目をひらかせるだらう」と述べる。『石川淳全集』19(筑摩書房 1992)などに収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1956年6月	三島由紀夫	私の敬愛する作家	月報	坂口安吾選集・内容見本	「戦後の一時期に在つて、混乱を以て混乱を表現するといふ方法を、氏は作品の上にも、生き方の上にも貫ぬいた」と安吾を敬愛するゆえんを語る。「風博士」などでの「ボオのファルスへの親近は、私にもひそかな同好者の喜びを与へた」とも。『三島由紀夫全集』29(新潮社 2003)などに収録	
1956年6月	獅子文六	坂口安吾の人間を愛す	月報	坂口安吾選集・内容見本	安吾の文学以上にその人が好きだったと述べる	
1956年6月	佐藤春夫	現代日本には過ぎものの文学者	月報	坂口安吾選集・内容見本	「生粋の芸術家」で「健康な知性を持った狂人であつた」と安吾を評し、「一言半句のなかにも滲み入り覗き出てゐるその高邁な芸術精神はむしろ驚くべきもの」と評価	
1956年6月	福田恒存	純粋と潔癖	月報	坂口安吾選集・内容見本	安吾にとっては「純粋に精神的なものと、純粋に肉体的なものと、この両極端しかなかつた」といい、「彼の評論は、その断ち切りの作業であり、彼の小説は、さうして失はれたものへの郷愁だつた」と批評	
1956年6月	河上徹太郎	最後の無頼派	月報	坂口安吾選集・内容見本	「文学にほんどに青春の気を与へ、ほんとの革命を齎らすものは、無頼派の文学しかない」と述べ、安吾の死を悼む	
1956年6月	尾崎士郎	男性の文学	月報	坂口安吾選集・内容見本	「坂口安吾の文学は彼の人間の直接的なる表現である」と評し、戦後文学の中では例外的に「男性的であつた」と印象を述べる	
1956年6月	平林たい子	独創的な偽悪文学	月報	坂口安吾選集・内容見本	「彼は文学の中で悪党ぶることで、人間の善良さと温かさとをさらけ出した。この逆説のおもしろさが、彼の文学の背骨である」と批評	
1956年6月	尾崎一雄	全貌を誤りなくつたへる	月報	坂口安吾選集・内容見本	安吾を「数少ない名文家の一人」と規定、戦後はさらに「その格を破り、流通無碍な作風に到達した」と評価。また文明批評や史論における「眼」の確かさも挙げ、選集「六巻」で全貌が伝わるだろうと述べる(8巻まで刊行されたが、内容見本発行時は全6巻の予定であつた)。	
1956年6月	大井広介	事実と虚偽—坂口の競輪事件について	紙誌	群像	花田清輝が大井との論争の中で、競輪事件の折の安吾が「暴力団の言論統制をうけて悪戦苦闘しているとき、最初に『親友』をみすてて、敵にまわつたのがこの男である」と大井を罵つたことへの怒りを表明したエッセイ。文章は感情的だが、事実を明らかにする意図が強いので、当時の安吾のようすが最も詳細に語られた貴重な証言	
1956年7月	田村泰次郎	含羞の人	月報	坂口安吾選集6(東京創元社刊)	1933年、同人誌『桜』の記念講演会の時の、照れ屋だつた安吾のようすを回想。楽屋で酒をラッパ飲みし、当時流行したヒッター・ユージェントの敬礼をまねて登壇、二言三言叫んですぐ引込んだという。『坂口安吾研究』Iに収録	
1956年7月	荒正人	安吾の推理	月報	坂口安吾選集6(東京創元社刊)	戦争中、大井広介邸で探偵小説の犯人当てゲームなどで遊んだこと、競輪事件の折は強迫観念に駆られて檀一雄家に隠れていた安吾から呼び出されて会つたことなど回想。ゲームをやる際、井上友一郎などは何時間もねばる耐久力型だつたが、安吾は「鋭い直感型であつた」という。『坂口安吾研究』Iに収録	
1956年7月	坂口三千代	鈴虫便り	月報	坂口安吾選集6(東京創元社刊)	斎藤道三が夏の虫を3年生き永らえさせた話を聞いて、安吾が熱心に育てようとし、時に三千代の不注意をなじる手紙が枕元に置かれていた話を回想。そうした叱る手紙ばかりもらったが、「直かに主人の体温を感じ声を聞く思いがし」「唯ただ懐かしく切ない」という。「鈴虫」と改題して『坂口安吾研究』I、『文芸読本 坂口安吾』に収録。坂口三千代『安吾追想』、同『追憶 坂口安吾』には原題にて収録	
1956年7月	西ヶ谷終吉	「信長」の頃	月報	坂口安吾選集6(東京創元社刊)	『新大阪』記者として「信長」連載を担当した折の回想。信長が死ぬまでを書く予定で最初は上機嫌だつたが、しだいに遅れがちになり「鬼気迫る」顔で2階から降りてくることもあつたという。桐生では3軒の映画館の上映作品を片端から見て、「真昼の決闘」など何度も見に行く映画もあつた話、楽しそうにゴルフに打ち込んでいた話、酒はジンばかり飲んでたことなど、日常のようすも紹介している。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾全集』13(1999)月報に収録	
1956年7月	檀一雄	解説	解説	坂口安吾選集6(東京創元社刊)	切支丹文献の調査から安吾が信長・秀吉・家康に突き当たり「それらの天才が、イノチを賭けて行つた自己認識と自己拡大の爽快さが、魔物のように安吾をとらえて離さなかつた」それゆえ、「安吾の歴史小説は、例外なしに、精神の形成と、その突破と、拡大の物語だ」と説く。「歴史に明るいというよりは人間に明るい」とし、なかでも「二流の人」が「根幹」で、戦国時代もの小説「それぞれの萌芽を見るだろう」と評する。檀一雄『小説坂口安吾』、同『太宰と安吾』に収録	二流の人 信長 狂人遺書 家康 梟雄道鏡
1956年8月	佐藤春夫	文学の本筋をゆく—坂口安吾選集	紙誌	読売新聞(1日夕)	おもに太宰と比べて安吾を「おとなの文学」「高邁な精神をひそめたすぐれたもの」と評価し、「世俗的などんな先入観念にも煩はされるところなくだかに人間を見た」ゆえに人間通であつたことが雑文の類からもわかると説く。刊行もない東京創元社版「坂口安吾選集」第6巻の収録作「信長」「二流の人」「狂人遺書」「道鏡」「梟雄」「家康」の中では「彼の歴史小説中の白眉といふべき信長は宛然(さながら)作者の自画像のおもかげのあるのは最も面白い」と賞讃	信長
1956年8月	井伏鱒二	安吾さんのこと	月報	坂口安吾選集2(東京創元社刊)	文春の編集者だつた永井龍男から「風博士」を推薦されて読んだのが初めて、その後、銀座出雲橋の「はせ川」で牧野野一と飲んでいる安吾をよく見かけたという。安吾の「信長」は「文献に対する独創的な解釈が際立つてゐるので熱心に読んだ。澆刺とした生氣あふれる信長が書けてゐたと思ふ」と高評価。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾全集』別巻に収録	信長
1956年8月	三好達治	坂口安吾君	月報	坂口安吾選集2(東京創元社刊)	1955年4月の「若き日の安吾君」と内容の重なる部分が多い。安吾流の「速断には一種の魅力があり」それが「風俗時評めいた文章」に生きていたとする。「鷹揚寛大でもあつたが、どこやらむざんな切捨てとつきつめた偏よりとをその蔭にいつも伴つてゐた」、「不断に幻想に悩まされ通しのやうな一面が以前からあつた」と回想。『坂口安吾研究』Iに収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1956年8月	井上良	偉大な個性	月報	坂口安吾選集2 (東京創元社刊)	文春編集者として「安吾の新日本地理」取材で随行した折の回想。打ち合わせの時からすでに、連載の眼目は「どうやって歴史が現代に生きているのかをみること」であり、旅先の選択もほとんど安吾の発意であったという。死んだあとの骨は海にでもばらまいてしまえばいいと語った話も紹介。『坂口安吾研究』Iに収録	安吾の新日本地理
1956年8月	笹原金次郎	桐生の一夜	月報	坂口安吾選集2 (東京創元社刊)	中公の編集者として「負ケラレマセン勝ツマデハ」に対する国税局高官の反駁文を掲載したところ、「オレは作家だ。オレの書いたものは、ぜんぶがオレの生命(いのち)じゃないか」、役人の片手間文章と一緒にすると激怒を買った話。3年ぶりに緊張しながら桐生を訪問すると、思いのほか歓待され、「狂人遺書」や「安吾新日本風土記」の構想などを意欲的に語ってくれたという。『坂口安吾研究』I、「坂口安吾全集」別巻に収録	負ケラレマセン勝ツマデハ 狂人遺書 安吾新日本風土記
1956年8月	檀一雄	解説	解説	坂口安吾選集2 (東京創元社刊)	「安吾新日本地理」「安吾新日本風土記」では「悠遠な人間の足跡を、さながら広大な空間と時間の中に放置して、ジッと聴き入るようなやさしく謙虚な安吾の眼ザシが見えてくる」といい、「人間のとめどなく淋しい生滅の根源にジッと耳を澄ませて聞いているような、温い絶望した眼ザシ」はチャーホフと通底するものと批評。中でも「長崎チャンボン」と「富山の薬と越後の毒消し」が「格別に好きだ」という。「安吾史譚」では「直江山城守」や「勝夢酔」を読むと、安吾が愛した「人間の生きざま」がわかるとする。檀一雄『小説坂口安吾』、同『太幸と安吾』に収録	安吾新日本地理 安吾新日本風土記 安吾史譚
1956年8月	中島河太郎	解説	解説	探偵小説名作全集9「坂口安吾・蒼井雄集」(河出書房刊)	「不連続殺人事件」について、「日本の本格長篇の最高水準」と賞讃、「ヴァン・ダインの系統を引く探偵小説ゲーム派に属する」とし、以下、乱歩の評価を追認する形で内容紹介	不連続殺人事件
1956年9月	尾崎士郎	安吾選集第二巻	紙誌	日本読書新聞(3日)	「安吾の新日本地理」について、小説での業績が「未完成」であったのに比べ「みごとに完成した作品として、不可思議な光芒を放っている」と賞讃、その「闊達自在な文章力」を特に評価する	安吾の新日本地理
1956年9月	無署名	(安吾詩碑建立についての記事)	紙誌	新潟日報(19日)	新潟に安吾詩碑を建立する計画が具体化し、近く着工を伝える記事。発起人の名前や具体的な計画内容を記す。檀一雄が「私は安吾にゆかりのある鈴鹿か山科あたりの花のもとにも、もう一つ詩碑をぜひ建てようと思っています」と語っている。『坂口安吾選集』4の月報「編集後記」に記事を転載	
1956年9月	坂口献吉	「三人兄弟」	月報	坂口安吾選集4 (東京創元社刊)	献吉、上枝、安吾の三兄弟が性格も志向もまるで違ったこと、ガキ大将だった安吾の少年時代、中学を落第しかけた話、純文学ひと筋だったことなど紹介。戦後たまたま兄弟3人居合わせて囲碁をやったところ、安吾が最も強かったという。『坂口安吾研究』I、「坂口安吾全集」別巻に収録	
1956年9月	江口清	若いころの安吾のことなど	月報	坂口安吾選集4 (東京創元社刊)	1955年2月の「若き日の安吾」と重なる内容が多い。アテネ・ فرانセで知り合った頃の回想で、安吾の「木枯の酒倉から」を「たしか藤村が賞めているという話も聞いた」とあるが、前述の回想では牧野野一になっていたもの。江口だけの記憶であり、しかも伝聞情報なので信用度は低い。『坂口安吾研究』I、「坂口安吾全集」別巻に収録	
1956年9月	頼尊清隆	「花妖」の頃から	月報	坂口安吾選集4 (東京創元社刊)	本郷の基金会で知り合った安吾や岡田東魚らの墓の打ち方を紹介。取手に住む安吾を、野上彰、岡田らと訪問した折には、茶目っ気たっぷり、人を信じやすい安吾の一面を活写。『坂口安吾研究』Iに収録	
1956年9月	井上靖	坂口さんのこと	月報	坂口安吾選集4 (東京創元社刊)	初めて読んだ安吾作品は「女体」で、「全く目を見張らせられる思い」がして、会う人みなに薦めたと回想。続いて「墮落論」に興奮し、「火」では「書き出しのうまさ」に驚かされ、「信長」にも心から感動して書評を書いたと述べる。自分の作風とは全く違うが、安吾作品に「最も親近なものを感じた」という。『坂口安吾研究』Iに収録	女体 墮落論 火 信長
1956年9月	檀一雄	解説	解説	坂口安吾選集4 (東京創元社刊)	「いずこへ」などで家庭を逸脱した女性を理想とするのは「安吾の仮構人生上の壮烈な悲願であって、その悲願の形づくられてゆく経過、ならびにフィクションと実人生の相剋してゆく哀しみが、まことにユニークな形で語り続けられている」と批評。一連の自伝的作品から「求道者の姿」「聖僧のような人生観」も感得する。安吾の氣質が最もよく表れた代表作として「桜の森の満開の下」「夜長姫と耳男」を挙げ、「白痴」は「人間の哀れさ、空しさを、透明に、殆ど神のように描き得た稀有な作品」で「最大の古典の一つ」とまで賞揚。檀一雄『小説坂口安吾』、同『太幸と安吾』に収録	白痴 桜の森の満開の下 夜長姫と耳男
1956年10月	尾崎士郎	知性図書館—安吾選集第六巻	紙誌	知性	安吾の歴史小説は、歴史的事実よりも「人間に重点をおく方法」で描かれるとし、その典型といえる「二流の人」が安吾全作品の中でも「異彩をはなっているのは彼の間人研究が透徹しているから」と評価。「狂人遺書」は秀吉よりも安吾自身の遺書に見え、「信長」「家康」「梟雄」のどれも、今後の歴史作家は必読、もし未読ならば「あたらしい分野を開拓することは不可能である」とまで言い切る	二流の人 狂人遺書 信長 家康 梟雄
1956年10月	大井広介	書評—坂口安吾選集第二巻「安吾新日本地理」「安吾史譚」創元社刊	紙誌	群像	「安吾史譚」の「天草四郎」と「道鏡童子」は「坂口自身の思索が以前より深められてある」と評価。戦争中に書かれた「島原の乱」冒頭の天草四郎は、皆に拝跪されるような「かうがうしい美少年」であったし、「道鏡」は松木幹雄『月削道鏡伝』の解釈を踏襲しただけのものであったが、今度のは新しい発見や解釈が含まれているという。「安吾の新日本地理」では「飛鳥の幻」が「会心の一編」で、いわゆる「進歩的歴史家」も安吾に比べれば歴史に対して不真面目ではないかと指摘する	安吾史譚 安吾の新日本地理 道鏡 島原の乱
1956年10月	佐々木基一	解説	解説	白痴(角川文庫)	「青鬼の禪を洗う女」を「坂口安吾の戦後創作の一つの頂点」と絶讃、「日常性を軽蔑し反撥しながら、曠野をさまよう人の孤独な心」が描かれていると批評。佐々木基一『現代作家論』(未来社 1966)、『坂口安吾研究』IIに収録	青鬼の禪を洗う女
1956年11月	花田清輝	捕物帳を愛するゆえん	紙誌	特集文藝(『文藝』増刊号)	「安吾捕物」シリーズについて「チェスタートン風のモラリストらしい哲学や残酷なユーモアがあったばかりではなく、まったく予期しなかった、転形期の日本のすさまじいすがたがあった」と絶讃。特に「時計館の秘密」に現れる貧民窟のくだりでは、家賃や平均賃金、米代、薪炭代など「非情な数字を列挙することによって「転形期のプロレタリアートの生態が、いさぎと、とらえられている」「つまり、一言にしていえば、『安吾捕物帳』のネライは、日本の伝統との対決にあるのだ」と批評	明治開化安吾捕物

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1956年11月	関義	アテネ・フランセのころ	紙誌	ユリイカ	『言葉』『青い馬』の同人だった関の回想文。中原中也特集号への寄稿なので、1927、8年頃に中也が通っていたアテネの話が中心。後に同人誌『紀元』で中也と安吾が一緒になり、2人が「そろって、おジョロ買いに行っている様子だった」と記している	
1956年11月	尾崎一雄	坂口安吾についての断片	月報	坂口安吾選集1 (東京創元社刊)	豪胆でありながら小心・細心な面もあった安吾の人となりを回想。碁の実力では上位の安吾が尾崎に負ける時は「考え過ぎて」自滅するパターンが多かった。伊東の競輪事件の折は、安吾の部屋の隅に「用心のため」と木刀が立てかけてあったという。『坂口安吾研究』Iに収録	
1956年11月	三根山	焼酎と酒	月報	坂口安吾選集1 (東京創元社刊)	戦後の酒不足の折、安吾はもっぱら焼酎を飲み、どこからか入手した酒を自分は飲まず皆に振る舞っていたという。『坂口安吾研究』Iに収録	
1956年11月	高橋義孝	妙な工合	月報	坂口安吾選集1 (東京創元社刊)	新宿のカストリ飲み屋で安吾と一度だけ出逢ったことを回想。東大病院退院前後の午前11時頃で、その店には安吾が書いた「遊びせむとや生れけむ」云々の色紙が額縁なしで掛かっていたという。その色紙と安吾作品とが一体のイメージとなり、「こんな筈じゃなかったのに」と、坂口さんはいつも作品の中でいっているように感ぜられる。「それでは約束がらがうじゃないか」といっているようにと印象を述べる。『坂口安吾研究』Iに収録	
1956年11月	田中西二郎	遊戯三昧—坂口氏の探偵小説について	月報	坂口安吾選集1 (東京創元社刊)	「勝負師」などの観戦記を書く安吾の筆致は、「信長」など歴史小説の筆致と同じであり、「遊び」が人生の日常性よりも高い価値として意識される瞬間がある。安吾は「人生そのものの下劣で然も荘厳な相」を「遊び」の世界から発見していたと説く。安吾にとっては「お道楽」の探偵小説もまた、碁や将棋に近いもので、「遊戯三昧の境地で謎を楽しんで、邪念から洗われている」がゆえに「一流の傑作」となると批評。『坂口安吾研究』IIに収録	不連続殺人事件
1956年11月	檀一雄	解説	解説	坂口安吾選集1 (東京創元社刊)	ほとんどが1955年2月の「鬼神のワザ」と同年5月の「わが人生観」解説を流用したもの。収録作品にあわせて多少手を入れてある。檀一雄『小説坂口安吾』、同『太宰と安吾』に収録	
1956年11月	織田昭子	マダム	単著	(三笠書房刊)	銀座のバーでの見聞などを記したエッセイ集。「太宰治氏と坂口安吾氏」の項で、無頼派座談会の帰りに太宰と安吾が織田の職場の佐々木旅館へ立ち寄った話を回想。安吾は昭子を娼婦と間違えたく、「おい、同僚を呼んで来い」と命じたという	
1956年12月	織田昭子・坂口三千代	対談「銀座マダム大いに泳ぐ」	紙誌	増刊オール小説	三千代はバー「クラクラ」を始めてまだ2カ月だが、いちおう黒字だという話。従業員は6人。資料的価値のある話題は少なく、バー経営について先輩の昭子が指南する形で進む	
1956年12月	菱山修三	坂口君の青春	月報	坂口安吾選集3 (東京創元社刊)	アテネ・フランセで出逢った安吾は口数すくなく「端正」で「精神的な高貴さ」を感じさせたが、ヴォルテールの「カンディード」に読みふけり、「ダダの一方法として「笑」を考えていた」と観察。安吾から50枚以上もの長文の手紙を何度かもらった話などあり。『坂口安吾研究』Iに収録	
1956年12月	木山捷平	安吾のどてら	月報	坂口安吾選集3 (東京創元社刊)	初めて逢った頃の安吾は、銀座でもどこでもどてらで現れたと回想。安吾とはその後数回、偶然逢った程度だが、木山に会ういつも安吾は説教しがったという。『坂口安吾研究』Iに収録	
1956年12月	寺江とき子	「風博士」の世界	月報	坂口安吾選集3 (東京創元社刊)	「風博士」の世界を詩的に分析した評論。作品にあふれる「エネルギーの強烈さ」は、「病を持った魂が、自己の生の燃焼の炎によってその生の実在を確かめたいと切望している姿ではないか」と評する	風博士
1956年12月	檀一雄	解説	解説	坂口安吾選集3 (東京創元社刊)	初期作品には「晦渋で沈鬱な安吾の暗い青春と、その暗い青春が当然摸索も定着もなしえないような、やりきれぬ憤怒」が感じられるといい、「黒谷村」や「古都」「孤独閑談」には「井伏鱒二や太宰治と比肩出来る得がたい漂蕩」があると評価。「古都」で描かれた京都への旅を境として作風が安定し、「紫大納言」は日本的な「詩的超躍」の作品となり、「波子」はリルケの清澄な作品に似ると批評。「安吾の本質が雄渾な詩人であることを痛感した」という。檀一雄『小説坂口安吾』、同『太宰と安吾』に収録	黒谷村 古都 孤独閑談 紫大納言 波子
1957年1月	坂口三千代	クラクラ日記	紙誌	酒	この号から断続的に連載開始。初回のタイトルは「安吾が恋しい——坂口安吾未亡人のクラクラ日記——」。バー「クラクラ」でのスナッフ写真併載。ごく短い酒失敗談と、安吾による酒禁止令が出た話、水とゆで卵ばかりで毎晩カストリ飲み歩きの供をしたせいで盲腸になった話、病人の部屋が宴会場になってしまった話など、単行本には収録されなかったエピソードばかりで構成されている	
1957年1月	葛巻義敏	坂口安吾のこと	月報	坂口安吾選集5 (東京創元社刊)	同人誌『言葉』『青い馬』時代の回想。同じ選集月報を先に書いた菱山「坂口君の青春」の「誤認」指摘に終始する。安吾との長大な手紙のやりとりも全否定。安吾については「かなり複雑な、然も生涯を通じて、不思議にはげしい敵意と、それに等しい親愛の情との入りまじったものを、感じつつけてゐたと思ふ」とある。『坂口安吾研究』Iに収録	木枯の酒倉から 風博士
1957年1月	檀一雄	解説	解説	坂口安吾選集5 (東京創元社刊)	初めから失う物のなかった安吾は、敗戦にも動揺を受けず、全く変わらなかった。「墮落論」の思考も「彼の長年に亘る放浪生活の中で体得した平常心から語り出す言葉」にほかならなかつたと指摘。戦後の再会の回想もあり、その記述は「小説坂口安吾」とほぼ同様。檀一雄『小説坂口安吾』、同『太宰と安吾』に収録	墮落論 青鬼の禪を洗う女

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1957年3月	葛巻義敏	坂口安吾のこと(承前)	月報	坂口安吾選集7(東京創元社刊)	「木枯の酒倉から」を同人会で誰よりも強く推したのは自分だといひ、作品の中に「荒涼な迄に寂寥たる作者の魂」が感じられ、サティよりドビュッシーに近い資質だと評する。「風博士」については「彼の作品としては「無用である」とさえ極言した」が、その後、安吾から「友情と恋愛とは同じものである」か否かという議論を吹っかけられ、否定し続けた葛巻は、安吾とも他の同人たちとも一時疎遠になったという。『坂口安吾研究』Iに収録	木枯の酒倉から 風博士
1957年3月	大岡昇平	京都の頃	月報	坂口安吾選集7(東京創元社刊)	矢田津世子のことを「トイフェル(悪魔)」と綽名される「札付きの女流作家」で、売り出すためなら誰とでも寝るように書いている。ゆえに、安吾の「二十七歳」にあるような「苦しい恋」は全部「嘘」だと断定。悪意に満ちた文章で、証言価値は低い。『坂口安吾研究』Iに収録	二十七歳
1957年3月	檀一雄	解説	解説	坂口安吾選集7(東京創元社刊)	「吹雪物語」を収めた巻で、安吾の長篇は「例外なくひどい破綻をみせている」、「長篇を構成する造型の能力に欠けていたのでは」と評しながらも、「作品をささえている安吾その人の、観念的な、暗鬱な、荒涼の心象風景が、僅かに読者をつなぎとめてゆく」と好意的に解する。「安吾(安吾に限らない。総ての芸術家)において、事実が先行する前に、無意識の文芸的な仮構人生が先行する」、つまり矢田津世子との恋愛の苦悩は「根本に文芸的な野望があつて」さまざまな事実が「歪曲」されているに違いない、とみている。檀一雄『小説坂口安吾』、同『太宰と安吾』に収録	吹雪物語
1957年4月	大井広介	バカの一つおぼえ	単著	(近代生活社刊)	「坂口・太宰・織田作」(1956.1)、「安吾の文学」(1955.2「坂口安吾の文学」改題)、「戦時中の安吾」(1955.4「戦時中の坂口」改題)、「殿さまのような安吾」(1954.9「その頃の坂口」改題)などの章で安吾に言及	
1957年5月	坂口三千代	安吾と人麿	紙誌	中央公論・文芸特集	「安吾史譚」の「柿本人麿」は、自分たち夫婦にそっくりだと思ったといひ、女房のイヤな「目玉」の記述から、安吾がアドルムを飲んで暴れた話をいくつか思い出す。東京で妾をつくったのを認めると強要したり、コリー犬のラモーと決闘したりしたが、いずれも過度の愛情の裏返しだったとみており、醒めた時には非常に優しくしたことなど回想。坂口三千代『安吾追想』、同『追憶 坂口安吾』に収録	安吾史譚 柿本人麿
1957年5月	檀一雄	解説	解説	墮落論(角川文庫)	前置きの部分は1955年2月の「鬼神のワザ」をほぼ全文引き写している。「巨大な家からの脱走の果てに」「安吾流の壮大な仮構人生」がつくられたとみる。戦中の「日本文化私観」と、戦後の「墮落論」とが通底し、「安吾の精神がいつも正しく保持され、かりにもふらつかなかった」と指摘。檀一雄『太宰と安吾』にも収録	墮落論 日本文化私観
1957年5月	(三枝康高編)	坂口安吾年譜・主要参考文献	解説	墮落論(角川文庫)	1954年9月の渡辺彰編「坂口安吾年譜」をおもに踏襲して、安吾没年まで組み立てられた早い時期の年譜	
1957年6月	鵜殿新	わが師友	月報	坂口安吾選集8(東京創元社刊)	新人時代から菊富士ホテルに住んだ頃まで、安吾とよく訪問し合った話。安吾はよく「文学とは如何に生きるか、という事なんだ」「これからの小説は長篇でなくてはだめ」などと語り、ペンネームの由来も教えてくれたという。新潟中学の漢文教師が安吾を叱ったとき、炳五の炳はアキラカの意であり、おまへは自己に暗い奴だから「暗吾」と名のれと言ったのをもじった。今に伝わるペンネーム由来は、この鵜殿の回想が発祥である。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾全集』別巻に収録	
1957年6月	野上彰	「青麦」時代	月報	坂口安吾選集8(東京創元社刊)	1938年4月(実際は1939年5月頃)同人誌「青麦」を作ろうと計画して、若園清太郎、岡田東魚、頼尊清隆らと取手に住む安吾を訪ねた話。古式ゆかしい妓楼を冷やかにいった話など頼尊の回想(「花妖」の頃から)などと重なる内容。訪問年月や同行者については若干記憶違いがあり、総合するに若園は取手訪問のメンバーにはいなかったとみられる。『坂口安吾研究』Iに収録	
1957年6月	高橋旦	教師・坂口安吾	月報	坂口安吾選集8(東京創元社刊)	1946年2月頃、初めて訪問して以来せつせと通ひ、安吾からさまざまな教えを受けたことを回想。権力者の作った日本史の欺瞞を説き、浮浪者救護に献身して自らは発疹チフスで死んでしまった医学生を褒め、「カラマーゾフの兄弟」のアリョーシャをキリストに比して讃嘆した話など、緊張しながら聴いた。もともと、文学の勉強をするなら「ボクのものなどより、小林秀雄のものを勉強し給え」と言っていたという。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾全集』別巻に収録	青年に懇ふ
1957年6月	菅原国隆	安吾先生と編集者	月報	坂口安吾選集8(東京創元社刊)	『新潮』の編集者として長篇「火」の執筆から精神科への入院、新潮社との一時絶縁など激動の時期を経験したあと、伊東へすぐに招待されたという。「ジャーナリストの教え」として、真面目な人間であること、独創を持つこと、今日性を知ること、の三つを「しみじみ説かれた」。一旦机に向かうと15時間でも正座したままで書きつづける「極端にストイックな面があつた」と回想。桐生では伊香保温泉へ執筆に向かう安吾に数回お供をしたという。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾全集』10(1998)月報に収録	火
1957年6月	檀一雄	解説	解説	坂口安吾選集8(東京創元社刊)	安吾が文壇デビューするまでの略伝を記す。山口修三宛書簡や本選集月報に掲載された鵜殿、江口、菱山の回想を引用して、安吾の内面に迫った伝記だが、伝説のたぐいも紛れ込んでいる。処女作「木枯の酒倉から」について「混沌未分の、孤独と精気にみちみちた作品」で、中国の伝奇物語に似た「奇つ怪な感銘を受けた記憶がある」と評価。檀一雄『小説坂口安吾』、同『太宰と安吾』に収録	木枯の酒倉から
1957年6月	石川淳	阪口五峰	紙誌	別冊文藝春秋	安吾の父五峰の伝記および坂口家先祖の年代記が、過不足なくコンパクトにまとまっている。石川流のべらんめえ口調も時に交じり、読み物としても面白い。五峰の書については、書幅や扁額などより草稿の文字のほうがよいと述べ、特に小楷(細字の楷書)がよいと評価。石川淳『諸国崎人伝』(中公文庫 2005)、『坂口安吾研究』IIに収録	
1957年6月	三堀謙二	若き日の思い出	紙誌	新潟日報(30日)	新潟中学時代の安吾と忍術ごっこで遊んだ思い出や、安吾がお稲荷さんの実在を疑って「御神体に石をぶっつけた」エピソードなど紹介。『坂口安吾全集』別巻(筑摩書房 2012)に収録	
1957年6月	伴純	若き日の思い出	紙誌	新潟日報(30日)	「風と光と二十の私と」に出てくる山小屋の話。安吾が山へ行く前後に兄献吉のいる新潟新聞へ遊びに来て、伴は「気軽に五、六行位の社会面の雑報を一つ書いてもらった」という(無署名であれば探しようはない)。『坂口安吾全集』別巻に収録	風と光と二十の私と
1957年6月	坂口三千代	夫としての坂口安吾[インタビュー]	紙誌	新潟日報(30日)	安吾の子煩悩ぶりや日常生活、嗜好などが窺われる証言。『坂口安吾全集』別巻に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1957年6月	荒正人	安吾氏の作品と人物	紙誌	新潟日報(30日)	民主主義文学の立場から安吾批判を繰り広げてきた荒だが、亡き友を懐かしみ、生涯にわたり「詩人」の心があったと賞讃に転じる。「『墮落論』は、正面切ったモラリストの宣言である」とし、戦中の「真珠」は戦争文学横行の時代に「小さい、爽やかな泉」であったと評価。一連の自伝的作品にある「青春の暗いリリズム」に「いちばん心を惹かれる」、巷談や歴史小説も独特な書きぶりで面白いが、「安吾の新日本地理」などの上代史論に「最も興味をそられる」と書く。特に「飛驒・高山の抹殺」での「天馬空を行くような、大胆な論に「探偵としての坂口安吾の面目が躍如たるもの」と讃える	墮落論 真珠 安吾の新日本地理
1957年6月	尾崎士郎	根底に深い道徳観	紙誌	新潟日報(30日)	伊東での安吾は「毎朝五時に起きて海岸へ」行き、「魚を買い、僕のところへも持ってきてくれたりした」と回想。気難しい一面もあって、文春の編集者などは十何人も担当を変えたが、基本は思いやりの深い人間で、「無垢の精神」と「透徹した心眼で人間の心の底まで透視し尽くしている」「天才的作家であった」と記す	
1957年6月	青野季吉	風変りな作品を書ける天才	紙誌	新潟日報(30日)	戦前の短篇からリアリズムとは違う「風変りな作品を書ける天才」と注目していたといい、戦後は「白痴」など「人間のデフォーム、背徳、人間の意識の混乱を扱った作品」と、自伝的作品、「道鏡」や「信長」などの歴史小説も面白いと評価	風博士 白痴 道鏡 信長
1957年6月	檀一雄	心のふるさと日本海	紙誌	新潟日報(30日)	「見識の広さ、自在さ、独自さに於て安吾の文学は格段の男性的威容を帯びている」とし、その母胎は新潟の海にあると説く	
1957年6月	池島信平	人間そのものが魅力だ	紙誌	新潟日報(30日)	安吾の真価はエッセイや評論にあるとし、その魅力は「坂口さんの人間そのものにある」と述べる	
1957年7月	尾崎士郎	安吾詩碑	紙誌	東京新聞(2日)	新潟の寄居浜に安吾碑が建立され、除幕式に参列した話。碑は檀一雄が提案し、葬式の折に士郎が発表、安吾の兄献吉ら地元の人々が計画を実行したという。碑の文言「ふるさとは語るこなし」も、岩の巨大さも、安吾の「雄大な一面をゆったりと象徴している」と親しみをこめて記す	
1957年8月	浅見淵	坂口安吾の記念碑	紙誌	酒	檀一雄に誘われて、創元社の「知念君」や社長の小林茂らと新潟護国神社の安吾碑除幕式に参加した紀行文。尾崎士郎が発起人代表として挨拶に立ち、「坂口君は作家としては不幸未完成で亡くなったが、その気魄、文学精神といったものは、年月が経つに随つて愈々憶い出されるい違いのないといることを確信する」といった内容の演説をする。翌朝は檀に連れられて浜辺の「滄海亭」という二階建ての掛茶屋へ行き、キスの刺身でビールを飲む。安吾と来た時もそうして、そのあと泳いだと言い、檀は本当に泳ぎに行ったが、水が冷たくてすぐに戻って来たという	
1957年8月	坂口三千代	その頃の思い出	紙誌	宝石	探偵小説は「レクリエーション」だと言って、いつも楽しそうに書いていたと回想。未完の「復員殺人事件」では、「あと二回位で解決篇になるはずだった。もっとも、犯人はここまでで分るよ、と言っていた」という。坂口三千代『安吾追想』、同『追憶 坂口安吾』に収録	不連続殺人事件 復員殺人事件
1957年9月	谷丹三	信一と安吾	紙誌	一座	学生だった谷が、牧野信一に師事して牧野家に入出入りするようになり、そこで安吾と出逢った話あ。洋服は「いい生地」で、煙草を吸う動作にも「品」があり、それに案外神経屋らしいこまかさがうかがわれ、たという。そこへ河上徹太郎も現れ、大声で「安吾っ、おまえの芸術はユカタがけだな」と揶揄、安吾は「オレはリヤン(何も無いの意)だ」と答え、牧野がそれは「まんまと一にぎりの風をつかまえた」男にちがいないとつぶやいた。さらに「今夜は安吾罵倒論をやろう」とい、銀座に繰り出したという。『坂口安吾全集』別巻に収録	
1957年9月	無署名	愛のかたみ—未亡人のくらし	紙誌	婦人画報	グラビアページ掲載	
1957年11月	江戸川乱歩・大井広介・荒正人	鼎談「評論家の目」	紙誌	宝石	大井が戦中、『現代文学』同人たちで探偵小説の犯人当てをして遊んだことを話す。クリスティ「三幕の悲劇」や蒼井雄「船富家の惨劇」など。「ヨットの殺人」は10人ぐらいでやり、安吾だけ当てられなかったとか。カー「魔棺殺人事件」は翻訳がひどい抄訳で、当たるはずがなかった話、クイーン「ギリシャ棺の秘密」では安吾と檀と大井らで明け方までやったが、最後の回読部分で犯人がバれていて一晩無駄にした話、クリスティ「スタイルズの怪事件」でも安吾はハズして、以後なんでも思ったのと逆を答えるようにした話など回想。犯人当て作品名が最も多く語られている、貴重な証言	
1958年4月	尾崎士郎	睡眠薬と覚醒剤	紙誌	小説新潮	戦前、両国の「ももんじ屋」で、京都へ旅立つ安吾の壮行会をした話、戦後の再会、伊東で共に過ごした日々、晩年の狂気までを、いくらか虚構を交えて描いた回想小説。安吾から受け取った大量の書簡の文面を、対話の場面に交換して使用した箇所が多く、話し言葉としては不自然なところが散見される。両者の大多数の書簡は『坂口安吾全集』等に収録されているが、未発見の書簡からの引用とみられる文章もあり、随所に士郎のみ知り得る情報が混じっている。『坂口安吾研究』Ⅱに収録	尾崎士郎宛書簡
1958年4月	江口恭平	坂口安吾	紙誌	作家	南川潤と懇意だった桐生の作家の立場から、安吾の生きざまを批判したエッセイ。「信長の悲愴な最後を、安吾はこよなく愛していた」が、結局「おのれの『信長』をこえることのできない作家であった」と斬り捨て、「おのれの偏見をおし立てて、他人を説得するためには、全く傍若無人だった」と回想。安吾が南川宅へゴルフクラブを持って殴り込みに行った折の詳細を、南川の遺したノートから長文の引用をしている部分が資料として貴重。南川の作家魂までが文面から感じとれる追真のノートである。江口恭平『晩年の坂口安吾』(作家社 1964)、『坂口安吾研究』Ⅱに収録	信長
1958年6月	坂口三千代	安吾と旅	月報	現代紀行文学全集3「中部日本篇」(修道社刊)	旅は概して好きでなかったらしい安吾が、取材旅行に出る前には入念な下調べをし、史書や地方誌、神社誌など読み込んでいたという。また、旅に持参したものなども細かく報告されている。坂口三千代『安吾追想』、同『追憶 坂口安吾』に収録	安吾の新日本地理 安吾新日本風土記
1958年6月	山室静	文学と倫理の境で	単著	(宝文館刊)	「デカダンスの文学」(1947)、「欲の深さについて」(1942)に安吾についての言及あり	
1958年6月	中島河太郎	解説	解説	現代国民文学全集27「現代推理小説集」	安吾の推理小説は「最もオーソドックスな型のものばかりである」とし、代表作の「不連続殺人事件」だけでなく「短篇にも見事なものが多い」と高評価。本書には「心霊殺人事件」を収録	心霊殺人事件
1958年6月	白洲正子	銀座に生き銀座に死す	紙誌	文藝春秋	坂本睦子の自殺の報に接しての追悼文。銀座京橋のバー「ウインザー」の女給時代から、安吾や中原中也、小林秀雄、河上徹太郎、大岡昇平ら多くの文学者と浮き名を流し、魔性の女として知られた睦子だが、実は「肉体の部分が極く少なかった」と、彼女と親しかった白洲が慈しみをこめて綴る。『ユリイカ』1999年2月臨増号に再掲	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1958年8月	井上周一郎・小宮山慶一・佐藤毅	座談会「終戦直後の古本界」下	紙誌	図書新聞(16日)	井上周一郎が井上書店へ安吾がよく買いに来てくれたり、目録を見て注文してくれたりしたことを話す。「百科辞典とか歴史関係のものをたくさん買った安吾だが、荷物の箱をあけないうちに税務署に差押えられたこともあり、井上はそれらの購入本がそのまま競売に出ていたのも見かけたという。「大乗院」とか「多聞院」とか歴史的な根本史料になるものも買ってくれましたね」と回想	
1958年8月	馬場京吉	安吾さんのこと	紙誌	朱鳥	『日本小説』の編集者による回想。「不連続殺人事件」は稿料無料で書いてもらったという。当時、会うとすぐ酒盛りになり、安吾は甘いチョコレートヌガーを着てキングウイスキーをたちまち1本平らげてしまったり、無頼派らしい逸話をいくつか紹介。一面、やさしくて思いやりがあったと追懐。『坂口安吾研究Ⅰ』に収録	
1958年9月	野村章恒	作家及び作品論への精神病理学への応用	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	安吾・太宰・織田などを「睡眠剤とヒロポンの中毒」となった文学者に挙げ、安吾が「精神病覚え書」などで自己分析してみせた「幻覚妄想状態」は、アルコール中毒患者の「外因反応」とよばれる症状と酷似していると解説	
1958年10月	池島信平	雑誌記者	単著	(中央公論社刊)	無署名の「人物立看板」(1949)に記されていた、坂口家で飲みつづれた「編輯者が帰途、どぶの中に落ちた」話の顛末が語られている。安吾が貸してくれたズボンが一張羅だったらしく、慌てて返しに行った話、東大病院精神科に入院中の安吾を見舞った折には、患者の安吾に連れられて後楽園の職業野球を見物に出かけ、「ずいぶんたくさん観衆がいるが、これがみな『文藝春秋』の読者だったらいいな」と池島が言うと、「商売気の強いヤツだな」と安吾が大笑いした話など、懐かしそうに書いている。1977年6月、中公文庫から再刊	
1959年1月	江藤淳	作家は行動する	単著	(講談社刊)	「小説の文体」および「散文家たち」の章で「日本文化私観」に触れ、「坂口安吾の文体が美しいのは、そこに充実した主体的な行動の持続があるからであって、しかもそれが最終的には「肯定」しようとする意志にうらづけられているからである」と評価。「民衆の巨大なエネルギーをすいあげ、そのエネルギーに共鳴しあうことによって、この簡潔さ、この美しさをえている」と分析し、こうした態度は「日本の近代文学者が持ちえないところのものであり、18世紀の英国の作家たちにとらえたものであった」と賞讃する。ただし、「政治」にも「歴史」にもふれあわなない範囲に極端され、そこで停止するゆえに、安吾は「現代の傍観者ということとまる」と但し書きを付けている。2005年5月、講談社文芸文庫に	日本文化私観
1959年3月	四家正一郎	孤独の文学—坂口安吾覚書	紙誌	駱駝	作品の引用を主軸に、安吾文学を紹介。「坂口安吾の孤独は、実は幻想の裏側に見える」といい、芥川のような「自我の喪失」のない「現実逃避」の文学であると説く。また、人生の裏側や狂人を好んで書く「ひたむきな、エネルギー的な作家」で、「文体はせかせかとテンポが早い。書きなぐり」であると、これらをすべて肯定的な点として書いている	
1959年3月	本多秋五	安吾、文壇主流に乗る	紙誌	週刊読書人(15日&22日)	文学史的価値の定まった「墮落論」「白痴」を認めつつも、やはり「白痴」は焦点がぼやけた「尻切れトンボの小説」で、「墮落論」や「日本文化私観」「真珠」などと同様、「絶対追究者」による「一か八かの体当たり主義」「自爆の精神」から来るものだと分析。それは信長や黒田如水、宮本武蔵の執筆にもつながっており、「民主主義文学」の立場からは受容できないものと、変わらぬ批判を続けている。また、戦後第一作として安吾が『近代文学』にくれた小説が「わが血を追ふ人々」で、低調だったと不満を述べる。本多秋五『物語戦後文学史』(岩波現代文庫 2005)、『坂口安吾研究Ⅱ』に収録	墮落論 白痴 日本文化私観 真珠 わが血を追ふ人々 信長 二流の人 青春論
1959年6月	土屋光子	坂口安吾と京都	紙誌	東京と京都(～7月まで連載)	安吾がA新聞の京都支局で働いていたとか、同志社大学に在籍していたというデマ情報の数々を、まるで事実のようにルポした体裁の悪質なフィクション	
1959年6月	坂口三千代	写真のババ	紙誌	(発表誌未詳)	発表年月日未詳だが「私の子供は今年の八月で満六歳になる」とある。坂口三千代『安吾追想』、同『追憶 坂口安吾』、同『ひとりという幸福』に収録	
1959年7月	無署名	戦後文壇未亡人 坂口三千代さん	紙誌	朝日新聞(12日)	1956年8月1日、250万円の資金で銀座西5-5にバー「クラクラ」を開店、女給6人で3年間の経営実績が「まあトントン」というところと話す。連載中の「クラクラ日記」が評判で、「刊行希望の出版社が続出しているそうだ」とある	
1959年11月	臼井吉見	解説	解説	現代教養全集13(筑摩書房刊)	「日本文化私観」を収録するが、安吾作品に関する言及なし	
1960年2月	磯貝英夫	私小説の克服—昭和文学の一系流をめぐって	紙誌	文学	安吾の「戦後文章論」に言語感覚の鋭さを見、現実の生活に根ざした言葉を駆使できた稀な作家と賞讃。外来の思想を仰ぎ見るだけの「日本的」思想は現実とは噛み合わないし、私小説作家は「実感的に現実の断片をなげだすだけ」で思想がない。安吾にはその両面があった点で際立っていると説く。安吾作品に即して語る各論に入ると、牧野信一の影響で「風博士」が書かれたとするなど事実誤認もあるが、「古都」に関して、凡百の風俗小説と根本的に異なる「求道」の意識と「世界を論理的に対象化しようとする指向があらわれている」とする点など異彩を放つ。『坂口安吾研究Ⅱ』に収録	風博士 古都 戦後文章論
1960年2月	江戸川乱歩	推理作家を捜す話	紙誌	朝日新聞(7日)	安吾とは「新小説」の座談会で出逢い、大の推理小説ファンであるを知って執筆の「誘い」をかけたという。数年後、文壇から多くの推理小説の書き手を発掘できたが、安吾は「その先駆者」であり「ブームの原動力となった」と概括	不連続殺人事件
1960年3月	安川定男	新戯作派の作家	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	織田、太宰、安吾、石川淳の4人について、それぞれ共感をこめて論じている。安吾には「アナキスティックな反逆」の精神があり、「自己破壊的生活」を通したが、「求道者的真率さ」と「健康な意志」をもってたと批評	
1960年6月	倉橋由美子	モラリスト坂口安吾	紙誌	新潮	安吾の小説は、エッセイ的なものが多く、別世界へ連れて行ってくれるような創造性に欠ける、「紙芝居ふう」に何枚かのイデーを説明しているにすぎず「退屈と批評」。「墮落論」でのマニフェストも「存在の崩壊」へは進むことのない「古風なモラリスト」の倫理であって、現代文学のめざす深淵からは遠いと指摘。倉橋由美子『最後の祝宴』(幻戯書房 2015)に収録	墮落論
1960年6月	矢崎美鈴	落伍者の文学—坂口安吾管見	紙誌	フテイキ	二百数十枚書いたという卒論の概要をまとめた形の学生論文。「人間は人間を」「生きることが全部」「絶対の孤独」「サービス精神」など、安吾文学の特質を抽出・列記	
1960年6月	坂口三千代	父と子	紙誌	産経新聞(18日)	父を知らずに小学1年生になった長男が、父と同じ嗜好や性癖をもつことの不思議を記す。坂口三千代『追憶 坂口安吾』に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1960年8月	坂口三千代	青鬼作家の禪を洗った女	紙誌	文藝春秋	同月の「青鬼作家の禪を洗った女」について参照	
1960年8月	坂口三千代	「青鬼作家の禪を洗った女」について	紙誌	酒	この号は「クラクラ日記」休載で、『文藝春秋』に載った「青鬼作家の禪を洗った女」に抗議した顛末を記す。「クラクラ日記」の抜粋を載せるという話で承諾したが、「抜粋」の断り書きはなく、まるで別人の文章になっていたのがショックだった話。池島信平に抗議をしに出かけた翌日、田川博一が謝罪に来て、次の号に訂正文も載せることになったという。坂口三千代『ひとりという幸福』に収録	
1960年9月	佐々木基一	現代の眼(125)—坂口安吾	紙誌	東京新聞(21日夕)	石川淳との往復書簡で、安吾は「骨格正しい万人共通の本当の日本語はどこにも見当たらない」と言い、ならば自分は現在の「正しくない日本語をぶっこわす」だけだと語る。天皇制についても安吾は「自分はそもそも天皇制なるものを認めてないのだから、その反対は唱えたりはしないのだ」と語ったという。これらの発言は「日本文化私観」や「文学のふるさと」に通じ、「合理主義者であると同時に、孤独な虚無主義者でもあった坂口安吾の面目がよくあらわれている」と説く	石川淳との往復書簡 日本文化私観 文学のふるさと
1960年9月	野上彰	白い春	紙誌	東京新聞(24日)	野上彰「青麦」時代(1957)などと同じ、同人雑誌『野麦』計画の折の話や、「生命拾ひをした話」のエピソードを回想	生命拾ひをした話
1960年11月	中島河太郎	解説	解説	日本推理小説大系10「坂口安吾・加田伶太郎・久生十蘭・戸板康二集」(東都書房刊)	安吾作品を概観したうえで、安吾の推理小説観などを紹介。乱歩と同様の賞讃を繰り返す。本書収録作「不連続殺人事件」と「能面の秘密」のうち、後者については「手馴れた人物描写に加えて、トリックの独創こそないが、堅実な手法で効果的に纏められている」と評価。収録はないが「安吾捕物」にも言及、「本格的構成をとり、無数の捕物帳の中にあって出色の存在」と絶讃	不連続殺人事件 能面の秘密 明治開化安吾捕物
1960年11月	坂口三千代	坂口と探偵小説	月報	日本推理小説大系10「坂口安吾・加田伶太郎・久生十蘭・戸板康二集」(東都書房刊)	探偵小説を書くときは、通常の小説を書くときとまるで違って楽しげで、スピードも速く「一晩に六十枚位は軽く書きあげてしまう」という。晩年には「黒いマントを着た男」という探偵小説を書くと言っていたが、果たされずに逝ったと回想。坂口三千代『追憶 坂口安吾』に収録	
1960年12月	久保田芳太郎	坂口安吾覚え書—新戯作派についての手帳から	紙誌	日本文学	「墮落論」の主張は「本来の人間性にたちかえれ」との主張で、健康な倫理だったと説き、無類派共通の「反逆の批判精神」を指摘。また、彼らの「戯作性」とは、志賀直哉などに欠けていた「ロマン的な性格」だとみる。安吾は「牧野信一の直系の弟子であった」とし、社会からの疎外感から形づくられた文学と規定。小説としては「桜の森の満開の下」「夜長姫と耳男」などの説話小説に秀でていたが、全体的にはエッセイほどは評価できないと感想を述べる	墮落論 桜の森の満開の下 夜長姫と耳男
1961年3月	中戸川宗一	坂口安吾の酒	紙誌	酒	文春編集者として1947年早春、坂口家の水曜面会日に初訪問したところ、安吾を真ん中に「山賊の集会染みた」宴会が繰り広げられ、飲み屋から無尽蔵にカストリなどが運ばれてきたという。精神科に入院中に見舞いに行った折には、患者の安吾に連れられて後楽園へ野球見物に出かけ、その夜は浅草のお好み焼「染太郎」で徳利10本以上飲んだこと、安吾の好む酒は時期ごとに変遷したが常に「種類のみを愛飲したこと、常に独創性を重んじ、「オリジナリティーを持たぬ奴は、人間の屑だ！」と編集者を叱ったことなど、やや誇張描写を交えて回想	
1961年5月	加藤秀俊	坂口安吾—Human Natureの発見	紙誌	思想の科学	欲望があるから進歩がある、「こうした欲望人としての人間の本性」を外さなかった安吾の思考は、日本には稀なもので、その根本に立ってアナーキズムに近い「徹底したりべリズム」を主張した唯一の人物だったと説く。「日本文化私観」「青春論」を引用し、その「ラジカルな機能主義」と「目的・手段の合理性」へのこだわりが、やはり「人間の本性」に照らして発見されたものである点を賞揚。「デカダン文学論」「墮落論」なども、日本人がニセの「フィクションの世界」から脱け出せずにいることを指摘した意義があると論じる。『坂口安吾研究』Ⅱに収録	日本文化私観 青春論 デカダン文学論 墮落論
1961年5月	橋爪健	安吾、織田作の斬り死—文壇残酷物語	紙誌	小説新潮	1932、3年頃、上野の「キヨ」という酒場で、安吾ら数人の文士連と出逢い、うるささに怒鳴りつけると、安吾から平手打ちを食ったというが、事実かどうかは定かでない。戦後、「墮落論」を読み、その力強さに再び殴られたように感じたこと述べ、各種伝記資料を引用しながら安吾の無類ぶりを概観	墮落論
1961年6月	小島恵(庄司肇の別名義)	クラクラ	紙誌	日本きやらばん	「墮落論」や「白痴」を悪罵した十返肇の「坂口安吾論」(1948)の非論理性と感性の鈍さを列挙したあと、「白痴」については、庄司自身、安吾作品の中では失敗作だったと批評。共感できない主人公の設定と、ファルス精神の欠如などを指摘する。庄司肇『坂口安吾』(南北社 1968)、同『坂口安吾論集成』(沖積舎 1992)に収録	白痴 墮落論
1961年6月	鳥井足	南川潤と坂口安吾に関する覚え書き	紙誌	作家	桐生で南川潤と共に『上毛文芸』同人であり、病弱の身で桐生の文化に献身する南川への尊敬の念を綴り、安吾の狂気に苦しめられたことへの怒りを記す。安吾が桐生に来ると知った時、南川が大喜びして「天下の名士」を迎え入れる準備にいそしんだこと、自分は安吾に会いたくなかったが、何度も南川に誘われて一度だけ訪問したこと、その折、大型犬のラモーが座敷をうろろうしていたのに放ったままの安吾に腹が立ったことなど	
1961年9月	安田武	坂口安吾への姿勢	紙誌	思想の科学	加藤秀俊が「坂口安吾—Human Natureの発見」(1961)において、安吾の著作に「心底から感動した」と書いたことへの違和感を表明。「合理主義、機能主義」ばかり見ようとする加藤の学者的な見方への反発であり、もっとギリギリのところまで「生涯、なま身をかけて吐きつづけた逆説」が、かしくまった学者にはわからないのかと、安吾の熱い側面を熱く語った文章	日本文化私観
1961年10月	田辺茂一	安吾の酒	紙誌	酒	安吾が没する前年(実際は1953年)の12月半ば過ぎ、「安吾捕物帖」出版をめぐる版元ともめていたのを仲裁しに桐生まで行き、大いに歓待された話を回想。銀座のホステスを同伴して行くことになった顛末から、カフェ・パリスに行くとき安吾が暴れて割ったという窓ガラスが壊れたままになっていた話、ヒステリーで泣きだした銀座のホステスを安吾が懸命になだめて宿まで手配してくれた話など詳細な内容	明治開化安吾捕物
1961年11月	坂口三千代	石川淳先生のこと	月報	石川淳全集5(筑摩書房刊)	激動の時ばかり、石川淳と4度会った話。淳が安吾の東大病院入院の手助けをしてくれた時、競輪事件で大井広介家に潜んでいた時、熱海大火の時、安吾が死んだ夜、それぞれの時を回想。坂口三千代『安吾追憶』、同『追憶 坂口安吾』に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1962年3月	檀一雄	戦後異色人物探検—坂口安吾	紙誌	週刊現代(4日&11日)	檀が「小説坂口安吾」(1944&1955)などに書いたエピソードを簡略化、安吾年譜と組み合わせるコンパクトにまとめたもの。檀一雄『太宰と安吾』、『坂口安吾研究』Ⅱに収録	
1962年4月	佐々木基一	「新戯作派」について	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「新戯作派」とは、戦後文壇の権威となっていた左翼系文学グループからの「いささか侮蔑をこめた名称」で、佐々木は当時からこの命名が嫌だったという。1962年現在、当時の権威はすべて失墜したが、「新戯作派」作家たちの「精神と方法」には、文学史上の位置づけを超えた「普遍的な意義」が認められるとして、再評価を促す。「出来上つた世界」の一切にたいする彼らのやみがい不満と妥協をしらぬその反逆は、たしかに、文学の地の塩であり、今日の日本文学がそれをますます失いつつあるが故に、なおさら重要なものなのである」と結論する。『佐々木基一全集』Ⅲ(河出書房新社2013)に収録	墮落論 デカダン文学論
1962年4月	きだみのる	アテネ・フランスのこと	紙誌	朝日新聞(9日)	アテネ・フランスのなりたちと現在までの経緯をまとめたエッセイ。安吾については、三崎町に校舎があった時代に、きだがフランス語とギリシャ語の教師をやり、生徒だった安吾や江口清、関義らを知ったとあるのみ	
1962年7月	佐々木基一	解説	解説	日本文学全集 55「武田麟太郎・坂口安吾・織田作之助集」(新潮社刊)	「一切の中間的手続きを省いて、一挙に、人間存在の実相と、宇宙の真理とを手づかみにしようとする性急な願望」が安吾にはあり、それゆえ他人と妥協できず、戦前は孤独のうちにあったと解説。その「根源的な精神の高さ」によって、醜悪な風俗を描いても「人間の孤独の美」を造型しえているとし「古都」「白痴」を評価。「青鬼の禪を洗ふ女」を安吾文学の頂点とし、本作の「楽天性と明るさ」は、「健康な魂を回想した「風と光と二十の私」とを貫く明るさ」と照応していると説く	古都 白痴 青鬼の禪を洗う女 風と光と二十の私と 墮落論 風博士
1962年7月	三好達治	安吾君の一面	月報	日本文学全集 55「武田麟太郎・坂口安吾・織田作之助集」(新潮社刊)	安吾が取手で、蚊帳もなく線香をつけて「夜を凌いでいる」という噂話を宇野千代から聞き、ハガキで小田原に誘ったことを回想。すぐに達達のハガキと荷物が届き、その数時間後には安吾がやって来た。2カ月ほどは三好の家に泊まり、その後、近くの空家に引っ越す。その後の生活ぶりは三好の「若き日の安吾君」「昔ばなし」など同様。「当時の彼は出沒自在、行動に於て神速を尚(たつと)び、原稿用紙にむかつては無心に半日を楽しむといふ風であつた」という	
1962年10月	村松剛・奥野健男・佐伯彰一	座談会「坂口安吾と武田泰淳」	紙誌	文學界	「安吾の一番書きたかったのは、やはり大型人物が縦横にあばれ廻る、ヒロイックな東洋流全体小説じゃないのかな」と佐伯が述べ、「火」「二流の人」「信長」を例示。奥野は安吾の長篇を認めず、「全体小説」という意見にも反対し、短篇などの断片的な言葉の中にいちばんの魅力があると主張。村松も安吾を「牧野信一のようなマイナー・ポエトだった」とみる点で奥野と共通するが、個々の作品評価では対立。ただ、「日本文化私観」や「墮落論」などに「虚無感と解放感が隣りあわせに」とあるとする点や、歴史小説には人間通の側面がみられてよいとする点などで、3人の共通認識ができる。『坂口安吾研究』Ⅱに収録	火 二流の人 信長 日本文化私観 墮落論
1962年12月	高橋幸雄	太宰・坂口・檀氏と海	紙誌	太宰治研究(第2号)	太宰や檀らと『青い花』の同人だったが、安吾のことはあまり知らないようすで、もっぱら作品に登場する「海」を論じる。「私は海をだきしめてみたい」などの描写から、安吾は水泳好きというより「水浴好き」なのではないかと推測	私は海をだきしめてみたい
1963年1月	坂口三千代	長い長い鼻	紙誌	こども部屋	学校の先生から「無欲でテンタン」と評された長男が、怪物の夢をみる話。坂口三千代『安吾追想』、同『追憶 坂口安吾』、同『ひとりという幸福』に収録	
1963年1月	生松敬三	戦前の日本文化論	紙誌	思想	阿部次郎、和辻哲郎、長谷川如是閑、安吾の順に、戦前の代表的な日本文化論を概説。「日本文化私観」について、「ユニークな反伝統主義的日本文化論」であり、「日本文化論無用論」でもあるという要諦を衝く。無用論でありつつ「実存的な生活信条の告白でもある」という不思議な明るさを伴った書き方にこそ「真の独自性」があると説く	日本文化私観
1963年2月	丸茂正治	安吾自転車に乗る	紙誌	新潮	1934年頃、『紀元』同人で、江古田の結核療養所で会計の仕事をしていた丸茂のもとへ安吾がふらりと現れた日のことを回想。安吾は淋病にかかって顔色青く、井伏鱒二から聞いたという秘伝の治療法を実践しはじめた。白檀油を少量と水一升を飲んでから自転車を1時間ほど乗り回す。これを1週間続けると大量の小便が出て治るというもの。安吾は療養所の自転車を借りてきっちり1週間日課をこなし、本当に完治させたという。七北数人『評伝坂口安吾』(集英社 2002)に引用あり	
1963年3月	田村泰次郎	わが文壇青春記	単著	(新潮社刊)	無名時代から田村が加わった同人誌のメンバーや互いの関係などが詳細に記録されている。商業同人誌『桜』時代の回想も多い。徹夜で議論した翌朝など、皆で銭湯に行ったが安吾だけ来なかったのは、胸が薄いのを見られなくなかったからだと言ったと河田誠一が語っていた話や、情報の少ない大島敬司の話など、ここでしか語られていないことが多く、貴重な資料	
1963年3月	田村泰次郎	わが文壇青春記	単著	(新潮社刊)	一九三〇年代の同人誌作家たちの中には横のつながりが多くあり、目立つ者ほどあちこちの同人誌に引っぱられたようすが詳細に記されている。特に安吾らと創刊した『桜』の頃をクローズアップして書いており、「坂口は大森の矢口ノ渡の近くの、兄の家の応接間を自分の部屋にしていた」とある。「河田の貧乏世帯は、一番多く私たちのあつまる場所に利用された」といい、「坂口はノーネクタイの洋服姿に、太いステッキをはなさなかった。彼だけはつねに和服を着なかった。私たちは夜明して議論をし、ザコ寝をした翌朝など、よく街の銭湯へ出かけたが、そんな際、坂口は頑として一しよに風呂へ出かけなかった」。それは当時の安吾は胸が薄かったせいだと同人誌仲間が推測した話も載っている	
1963年4月	坂口献吉	その頃	紙誌	新潟短歌	東京の空襲激化を案じて弟の安吾に疎開を促したところ、「東京が敵の襲撃で亡びるなら、自分は東京と運命をともにして亡びるだろう」と返事があったことなど回想。そのとき安吾は、東京が焼けることよりも新潟が焼けるほうを心配していたという。『坂口献吉追悼録』(BSN新潟放送・新潟日報社1966)、『坂口安吾全集』別巻に収録	
1963年4月	石川弘	安吾覚書(断片)	紙誌	この道	「安吾の悲しみ」は「身近な人間愛から顕れている」として、「ふるさとに寄する讃歌」や「古都」を挙げ、「いつこへ」「暗い青春」には「人間の業を見る」と述べる。「桜の森の満開の下」は人間の本能や本質を追求する「一ツの思想小説」と評価	ふるさとに寄する讃歌 古都 いつこへ 暗い青春 桜の森の満開の下

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1963年5月	奥野健男	「戦後派」文学批判—純文学は可能か(その4)	紙誌	文学界	かつて野間宏、中村真一郎、椎名麟三ら「戦後派」が文学界で最大に評価されていたが、奥野は畏敬しつつも共感できなかった。左翼偏向の『近代文学』同人たちが戦後派文学に「負担する」のにも違和感があったという。戦後派文学の理念は「十九世紀の文学理念であり、人間疎外の状況下では成立し得ないもの」だったと断じ、そこを脱却しようとしたのが無頼派作家たちだったとみる	
1963年6月	奥野健男	無頼派と戦後派の断絶—純文学は可能か(その6〔マ〕)	紙誌	文学界	戦後派文学は「自己や人間に対する根源的な問いという方向に深化せず、本格的ロマンの夢にとりつかれ、筋のある大小説へと拡散してしまった」ゆえに廃れたと総括。無頼派はその根源的な問いを保ち続け、ますます「奇詭」な時代になると予感していたからデカダンな姿勢をとったと指摘。特に「白痴」については「日本において性を意識的に思想として表現した最初の文学」と賞讃。しかしその後、平野謙『芸術と実生活』や中村光夫『風俗小説論』などの影響で、無頼派の作品も、戦後派の中の「自己凝視的な」良質の作品も、みな「私小説」として一くりに否定されてしまい、文学界の正常な発展が阻害されたと振り返る。	白痴
1963年9月	磯貝英夫	昭和十年代の文学—下降的方法の文学を中心に	紙誌	日本文学	安吾の評論はその「発想の原型を、都会の流浪的下層庶民の心性に求めることができる」とし、「かれが大観念、あるいはトータルなヴィジョンをもたぬということ、そのことが、かえって、この強力な現実批評を可能にしている」と説く。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』(有精堂出版1978)に収録	
1963年10月	高木隆郎	芸術と精神分析～嗜癖—心理的自殺—	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「太宰は自らの中に偽善をさがして嘲い、坂口は世間の偽善を叱る」という自己流の解釈をもとにして、なぜ安吾が若年時から「抑うつ状態の周期」をもっていたのか理解できないので「評論をさけたい」として終わる	
1963年10月	尾崎士郎	続 小説四十六年 9	紙誌	東京新聞(17日夕)	1935年に「続人生劇場、愛欲篇の執筆で行き悩み、半ば絶望的な状態に陥っていた」尾崎士郎のもとへ、安吾が「絶えず激励をこめた長い手紙をくれた」と回想。『坂口安吾全集』別巻(筑摩書房 2012)所収の士郎宛安吾書簡がそれと思われる。実際には「愛欲篇」刊行3カ月後の手紙で、文壇での悪評を真っ向から論破し応援する内容だった。士郎はその手紙を特別な封筒に入れ大切にしまっていたため、2012年まで発見されずに来たものである	尾崎士郎宛書簡(1935.12.23)
1963年11月	黒田征	戦前の坂口安吾	紙誌	市民文芸(帯広市図書館)	打ち込むべき何ものかを探して彷徨する心情を描くのが安吾の初期作品の特徴だったと読解。しかし、そのニヒリズムの果てに「現実の人間の苦悩とすることに関心のなくなった」安吾は、黒田にとって「醜悪」で矛盾だらけの「日本文化私観」を書くに至り、「一人の空虚なる審美家」になりさがったと批判	日本文化私観
1963年12月	野上彰	囲碁太平記	単著	(河出書房新社刊)	「坂口安吾」の章あり。文人囲碁会では野上がいかに強くても安吾は四子までしか置かず、負けてばかりだったらしい。それでも野上に六子から八子置いた尾崎一雄よりは安吾のほうが実力あったが、尾崎は勝負強く、しばしば安吾に勝った。菊富士ホテル時代の安吾は、旅行などに出ていないかぎり文人囲碁会に皆勤だったという。1939年5月頃、取手に住む安吾を同人誌『野麦』に誘った話は頼尊清隆、若園清太郎、野上彰らの1955～57年の回想と同様で、安吾はそこに「道鏡」を書くと言って皆にプロットまで語ってきかせたという。また、1940年のエッセイ「生命拾ひをした話」の詳しい顛末もあり、安吾が詰碁にでも「デモ—ニッシュになれるということは大変なことだ」と感慨深げに書いている	道鏡 生命拾ひをした話
1964年1月	江口恭平	晩年の坂口安吾	単著	(作家社刊)	1958年4月発表(本文中では6月と誤記)の「坂口安吾」を「坂口安吾と織田信長」と改題し、その後のエッセイ「坂口安吾と南川潤」と共に収録する。後者は、時がたって南川と安吾とを偏見なく比較しようと努めたもので、安吾が実は「小心翼翼」ともいうべき繊細な気配りをする人だったと回想。前のエッセイと重なる部分が多く、不正確な聞き書きが多いので注意が必要。安吾との会話として記される内容あまり信用できない。安吾の生涯は「俗念と反俗のかたみにくり返された精神と行為のアンバランスな闘いであった」とする	
1964年2月	檀一雄	二月空漢—安吾さんと士郎さんのおもい出	紙誌	読売新聞(26日夕)	尾崎士郎の訃報を聞いての追悼文。安吾の死を重ね合わせて傷心の思いを綴る。檀一雄『太宰と安吾』に収録	
1964年3月	無署名	昭和文壇史に新たな一石／故坂口安吾氏の「尾崎士郎論」みつかる	紙誌	日本経済新聞(3日)	1948年4月、尾崎士郎がGHQから戦争責任を追及され、公職追放指定を受けた際、安吾が異議申立書として書いた原稿が発見された記事。「迎合せざる人」と題して申立書全文も掲載された。記事本文では執筆経緯など曖昧に記されているが、囲み記事として併載された平野謙による解説「史料としての安吾証言」で、異議申立書であろうと推定されていた。平野は「虚心に読みかえてみても、この坂口証言はほぼ妥当だと思われる」と内容に賛意を示している。『坂口安吾全集』16(筑摩書房 2000)の解題に詳しい経緯を記す	尾崎士郎の公職追放指定に対する異議申立書(迎合せざる人)
1964年3月	田辺茂一	天下の風物詩	紙誌	別冊文藝春秋	「金銭無情」について、「波瀾万丈の展開で、滾々とした詩情も淀みなく、妖しさいっぱいのそれでいて機鋒鋭い作品」と評し、「腐爛のなかに美を見出す天才であった」安吾の一番の秀作とする。続いて「信長」「二流の人」における「人間の小智慧、大智慧、惑乱、動顛、失着、無細工さ」の描出に「安吾自身の吐がきまつた」感があると述べる。「風博士」や「竹藪の家」などの初期作品には「詩はあるが、安吾自身の詩ではない」、「小説作法に逡巡している」と批評。『坂口安吾研究』Ⅱに収録	金銭無情 信長 二流の人 風博士 竹藪の家
1964年5月	尾崎一雄	実録『風報』始末記	紙誌	中央公論	1947年の第二次『風報』創刊時の安吾や尾崎士郎とのやりとりを詳細に記す。5月24日の座談会後には共に基を打っていたが、安吾は実は三千代入院で気もそぞろだったことを明かし、早々に帰った話、その翌年には尾崎士郎の公職追放指定に対する異議申立ての一文を安吾に促されて書いた話など。これらの話は尾崎一雄の長篇回想記『続あの日この日』(講談社 1982)にも別の角度から書かれている	尾崎士郎の公職追放指定に対する異議申立書(迎合せざる人)
1964年7月	三枝康高	「無頼派」の文学	紙誌	文学	「文学とはがんらい放埒無惨のものなのだ」とし、「太宰、坂口、織田の三人が主張した」既成道徳や権威に反逆する精神に賛同の意を示す。彼らの「無頼派」らしさを代表する作品として、織田「世相」、安吾「白痴」、太宰「ヴィヨンの妻」を挙げる。『太宰治と無頼派の作家たち』(南北社 1968)に「無頼派の登場とその作風」と改題して収録	白痴

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1964年10月	石川弘	坂口安吾—その文学の一形式に就て	紙誌	この道	安吾文学を「人間の心情に触れる」「さだまりのない魂のもだえ」と批評。年譜的記述に沿って「ふるさとに寄する讃歌」「吹雪物語」「桜の森の満開の下」「石の思ひ」などの作品を紹介	ふるさとに寄する讃歌 吹雪物語 桜の森の満開の下 石の思ひ
1965年1月	邦高忠二	「不良少年」と「非行少年」—坂口安吾と大江健三郎	紙誌	20世紀文学(第2号)	安吾も大江と共に「世間的忓念への反抗者」だが、安吾は「不良」型で、「直接的に慷慨をぶつけるの」に対し、「非行」型の大江は「外部の者やら時代」などから「超然」と切り離されていて「シニカル」であると区別する	
1965年2月	宗左近	作家研究のポイント(28)坂口安吾	紙誌	週刊読書人(15日)	没後しばらくの間を除いて、安吾について語られることが少なすぎると嘆く。安吾は絶えず「人間の復活」を要求し「絶対への希求」を切なく折りつけた作家であり、その特質は「男らしい笑いの文学」であったと高く評価。なかでも未完の長篇「花妖」を第一に推している	花妖
1965年2月	檀一雄	安吾を想う—規模雄偉な求道的な人格	紙誌	朝日新聞(15日夕)	カンガルーに似た「安吾服」を自慢していた話を紹介、安吾の「能率主義」と「精神主義」の発露とみる。檀一雄『太宰と安吾』に3/15と誤記して収録	
1965年2月	田辺茂一	わが縦横交友録(19)	紙誌	週刊読書人(22日)	10年めの安吾忌を銀座の灘萬でやった話。少し高級すぎて安吾忌には似合わず、と感想を述べ、安吾が没する前年(実際は1953年)の12月24日に桐生を訪ねた折の回想を記す。「安吾捕物帖」出版をめぐって版元の日本出版協同ともめていたのを仲裁に行った話で、「安吾の酒」(1961)の内容を短くまとめたもの	明治開化安吾捕物
1965年4月	檀一雄	安方町—文学とところどころ	紙誌	東京新聞(23日)	住む土地と作家とは関係の深いものだが、安吾の場合は「いつも空々漠々、唯今ここに迷いこんでいるだけ」という感じだという。蒲田安方町の家にかかっていた大きな絵の由来を尋ねると「尾崎一雄の妹さんの絵でね」と、後は何も言わず、ただそこにある絵以外の何ものでもなくなってしまう。檀はそこに安吾文学の精神風景を重ねて見ている。檀一雄『太宰と安吾』に収録	
1965年5月	辻淳	安吾と英光の父(1)北越の漢詩人	紙誌	図書新聞(29日)	新潟県立図書館「五峰文庫」の内容紹介。安吾の父五峰の『北越詩話』自筆草稿や資料数百冊が所蔵されているという。次号(6/5)には、田中英光の父岩崎英重がすぐれた維新研究者だったことを紹介	
1965年6月	原子朗	坂口安吾—昭和十年代における作家活動について	紙誌	国文学	文壇デビュー時から安吾の文学は異質で「孤立」しており、ずっと「不遇」だったが、説話ものや歴史小説を書くようになって、その才能を開花させたとみる。ただし、「不遇」であったがゆえに「浪漫的イロニイの精神」がそなわり「たくいまれな野太い天才」になったと論じる。「時に空虚な過渡期の感情に酩酊しすぎるきらいもあったが」そこがまた魅力的だという	
1965年6月	江口清	若き日の坂口安吾—「言葉」「青い馬」の頃	紙誌	早稲田公論	1955年2月の「若き日の安吾」、1956年9月の「若いころの安吾のことなど」とおおむね同じ内容。『言葉』という誌名はラディゲの「肉体の悪魔」に出てくる雑誌の名前からとったと回想。ここでは「木枯の酒倉から」を賞めたのが宇野浩二で、「黒谷村」を「藤村が推奨した」と、以前とは異なる証言になっている。『坂口安吾研究』Iに収録	木枯の酒倉から 黒谷村
1965年6月	葛巻義敏	「木枯の酒倉から」—安吾死してすでに十年	紙誌	早稲田公論	1955年4月の「坂口安吾への手紙」、1957年1月の「坂口安吾のこと」などと内容はほぼ同じ。没後10年たって安吾の「さびしい顔」を追懐、長島萃が安吾に宛てた手紙を一部紹介。『坂口安吾研究』I、『坂口安吾全集』別巻に収録。同別巻には、長島の手紙全文も収録された	
1965年6月	田中西二郎	その文章—苦悩の子・安吾の闘争	紙誌	早稲田公論	「日本文化私観」や「デカダン文学論」などを引用しつつ、安吾の明晰で「絶体絶命の必要」の精神で書かれた文学を賞揚。「破滅型」では全くない「健康な知性」の人であったと説く	日本文化私観 デカダン文学論
1965年6月	田村泰次郎	「桜」のころ	紙誌	早稲田公論	文壇に出たばかりの安吾と山下三郎郎で出逢ったこと、『桜』の編集会議では驚くほどジャーナリスティックな企画を出す安吾だったが、矢田津世子がいる時は「文学魂一徹の作家に早変わり」したと回想。『坂口安吾研究』Iに収録	
1965年6月	菱山修三	坂口安吾君の幻影	紙誌	早稲田公論	京都で「吹雪物語」執筆中の安吾を訪れて歓待されたが、その頃が安吾の生涯で最も辛い時期だったのではないかと回想。角川源義は「白痴」を「うすすぎた」と嫌ったが、菱山はその「壮烈」に圧倒された。安吾の「精神」のなかには、やはりダダイズムというほかはない領域があった」と考察。『坂口安吾研究』Iに収録	吹雪物語 白痴
1965年8月	庄司肇	「風博士」のころ	紙誌	円卓	「FARCEに就て」はファルス論でなく「小説論」であると指摘し、27歳という若さで文学の諸問題に立ち向かい、その本質に触れた「天才」の業であると賞讃。「風博士」は、何ものにも似ていない「傑作以上のもの」で、安吾自身、これをを超える作品は書けなかったと最大の讃辞を送る。庄司肇『坂口安吾』、同『坂口安吾論集成』に収録	風博士 FARCEに就て
1965年9月	笠原伸夫	坂口安吾論—『吹雪物語』について	紙誌	円卓	「吹雪物語」は「長篇としての骨格を全く欠いている」混迷の作で、発端が同時に終焉であるような「虚無の観念」「非在の観念」の小説化であったとみる。ただ、「故郷離脱」の思いをもって描写される新潟の風景は「意外に鮮彩な、そして哀切な情感」に満ち、「冷冽な眼をいたいたく感じさせる」と評価。ここを突き抜けた果てに「桜の森の満開の下」の世界があると説く。また、「吹雪物語」の苦渋をくぐりぬけたことによって「古都」の「自在無碍な文体」が生まれたとし、「古都」「日本文化私観」での達成が、戦後の「白痴」「墮落論」へとそのままつながっていると指摘。『坂口安吾研究』IIに収録	吹雪物語 桜の森の満開の下 古都 日本文化私観 白痴 墮落論
1965年9月	磯田光一	無頼派の反逆について—ダンディズム私考	紙誌	円卓	おもに石川淳のダンディズムについて論じた文章。無頼派作家たちに共通する傾向として、「家父長的な文学に対する偽装独身者の文学を樹立した」と説く。また、「自罰の崩壊の極にあらわれる虚無を代償としてのみ、幾つかの秀作を書くことができた」として、太宰の「お伽草紙」や安吾の「文学のふるさと」、石川の「紫苑物語」を例示する	文学のふるさと

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1965年10月	橋本稔	淪落に殉ず—坂口安吾論	紙誌	近代文学研究(法政大学日本近代文学研究会)	「風と光と二十の私と」「白痴」「私は海をだきしめてみたい」などで、男の肉欲を満たすだけの白痴的・人形的な女を好む男を描き、「いつこへ」や「外套と青空」では逆に、主観をもつ打算的な女を登場させ、それを拒む男を描く。これについて「安吾とは主観性が強く、自己対象化に不得手な人であった」と解釈し、すべては矢田津世子との関係から生まれてきたものではないかとみる。否定すれすれの分析だが、安吾の淪落に殉ずる自由な精神に大いに共鳴して書いている	風と光と二十の私と白痴 私は海をだきしめてみたい いつこへ 外套と青空
1965年10月	大井広介	坂口安吾	紙誌	日本(講談社発行)	大井がこれまでに書いてきた安吾回想文の抜粋的な内容	
1965年11月	中島誠	無頼派の問題点	紙誌	国文学	タイトルに反して無頼派を好意的に評価。安吾・太宰・織田・石川は「エネルギーの質」が似ており、互いに同族意識をもっていたとみる。「彼らは国の滅亡を契機とする、人間の変貌に期待した。その期待は、非常に強く、それだけに絶望の度合も一段と烈しかった」とし、「世相・世間の中の人間の群れ」を描き切ることに「方法の転機を賭けて」おり、その「放恣な冒険の実践」こそが「無頼派である所以」であったと批評	
1966年1月	奥野健男	現代文学の基軸—坂口安吾	紙誌	文学界(～2月まで)	「墮落論」と「白痴」発表当時、深い衝撃を受けたといい、太宰や伊藤整、高見順を文学上の母とするなら、安吾は父であるという。『「白痴」の人間を原初状態とらえる、奇怪な実存の姿として見る方法』は、戦後派作家を含め、後のすべての文学者に影響を与えたとみる。安吾の「内的宇宙の構造」は、「虚無的合理主義」と「現世的な精神主義」が矛盾なく一つになったもので、互いに他を補い合う形で「墮落論」が書かれ、その主張の小説化が「花妖」であったと説く。『坂口安吾研究』Ⅱに「坂口安吾」の題で収録。奥野健男『坂口安吾』(文藝春秋 1972)Ⅰ「安吾発見」の章にも、大幅に加筆・再構成して収録された	墮落論 白痴 花妖
1966年2月	獅子文六	気の弱いキレイな人柄	紙誌	朝日新聞(22日夕)	晩年の安吾にゴルフをすすめ、川奈の文壇ゴルフに誘った折の安吾の喜びようを記し、同時にその頃のウイスキーなどの過飲が命を縮めたと語る。『ノンキで気の弱い男というのは、大体、人物がキレイで、そのせいで過飲もしたし、そういう特質が安吾文学の根底にもあるとみる。』『坂口安吾全集』15(1999)月報に収録	
1966年2月	中山義秀	私の文壇風月	単著	(講談社刊)	1933～34年頃の話として、中村地平と共に安吾に連れられて神田神保町の酒場へ行行ったところ、「お安さん」と思われるマダムがいて、安吾がビールをおごらせようとするのを断られ追い出されてしまったと回想	
1966年3月	檀一雄	安吾と赤頭巾	解説	劇団三期会「櫻の森の満開の下」パンフレット	「無限の自由」を体現した安吾に見合う女は、完全な娼婦であり、その女は快楽の瞬間まで己を犠牲にするものだ、安吾が「エゴイズム小論」などで述べた持論を要約。安吾の好きだった物語がペローの赤頭巾だった話を重ね、「櫻の森の満開の下」公演への手向けとしたもの。劇団三期会は翌年から東京演劇アンサンブルに改称し、現在まで断続的に同作の公演を続けている。檀一雄『太宰と安吾』に収録	櫻の森の満開の下 エゴイズム小論
1966年4月	庄司肇	「吹雪物語」のまえに	紙誌	円卓	小説について深く考え続けた安吾は、その方法論の追求から「吹雪物語」執筆に至ったとみる。失恋したから、などという理由は当たらないし、むしろ牧野信一の自殺のほうが安吾には強い影響があっただろうと説く。初期作品「小さな部屋」は混沌とした「妙ちきりんな小説」だが、「それまでの集大成、小さなエポックをつくるもの」で非常に重要とし、この世界を広げたのが「吹雪物語」であったという。庄司肇『坂口安吾』(南北社 1968)、同『坂口安吾論集成』(沖積舎 1992)に収録	吹雪物語 小さな部屋
1966年5月	浜本純逸	安吾の第二次大戦期の作品	紙誌	近代文学試論(広島大学近代文学研究会)	安吾が「文学のふるさと」で書いたように「絶対の孤独」から脱却する小説を書けたか否かを検証。「真珠」「波子」「古都」などの文章を引用しつつ、結局、脱却はできず、「孤独そのものに酔い、美化したい心情が坂口にはあった」と結論。テーマ設定自体に評者独自の推測が含まれる、きわめて恣意的な感想。『坂口安吾研究』Ⅱに収録	文学のふるさと 真珠 波子 古都
1966年6月	十返肇	墮落論—当時の評価から	紙誌	図書新聞(25日)	十返の「坂口安吾論」(1948)の抜粋	
1966年6月	坂口守二	治右衛門とその末裔	単著	(新潟日報事業社刊)	坂口家の遠祖治右衛門から安吾の兄弟に至るまでの人物紹介エッセイ。安吾とは関係のない枝分かれの家系まで詳述されている。関連部分では、直系の先祖や兄弟の事跡などが関係者へのインタビューを交えて紹介されており、特に兄献吉の履歴など研究者には参考になるところが多い	
1966年6月	水上正寛	名著の履歴書—「墮落論」	紙誌	図書新聞(25日&7月2日)	銀座出版社の編集者であった水上の回想。1947年1月末頃、坂口家を初訪問して、安吾の本を編集したいと依頼。4月20日には短篇集『逃げたい心』刊行がかない、刊行までの早さが気に入られ、4月末頃、中央公論社から出す予定だった『墮落論』を銀座出版社に移して刊行したい旨を伝えられる。三千代の手術と入院療養費の早急な捻出のためであった。それとは別に、安吾はこの本の刊行に並々ならぬ決意と意欲をこめていたという。同社の編集者で安吾にかわいがられた入江元彦、高木常雄のことや、当時の出版界の裏事情も描かれた貴重な資料。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』(有精堂出版 1978)に収録	逃げたい心 墮落論
1966年7月	庄司肇	戯作について	紙誌	日本きゃらばん	「風博士」を書いた頃の安吾こそが「本物の戯作者」であったとし、この一作によって安吾は「ある高貴さを身にまとうようになった」と批評。「戯作者精神」というのは「絶えず変動を求めてやまない精神」プラス「笑い」であると規定し、庄司自身も本物の意味の戯作を書きたいと決意を述べる。庄司肇『坂口安吾』(南北社 1968)、同『坂口安吾論集成』(沖積舎 1992)に収録	風博士
1966年7月	日沼倫太郎	墮落論—今日の評価	紙誌	図書新聞(2日)	「マルクス主義思想の絶対化をくもるんだ第一次戦後派作家」や「近代文学」の批評家たちを戦後文学の出発点とする、それまでの文学史を「あやまり」と指摘。戦後派よりも「はるかに深かった」無頼派こそが戦後の「突破口」になったと訂正することを提言。「墮落論」の「逆説的弁証」が当時は理解されず、単なる墮落のすすめと受け取られ非難された不当さを振り返る	墮落論

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1966年8月	矢島道弘	無頼派文学論 1 悪霊を背負った人々	紙誌	新文学史	無頼派は「退廃や虚無、そして破壊を本質的に好んだ」とし、ゆえに「戦中の混乱は彼らに取ってみればユートピア」だったと説く。安吾が「1954年」2月に「狂死に近い」死を遂げたとするなど事実誤認も多く、表層的な調査に基づく論文	
1966年9月	浅田晃彦	金魚	紙誌	風雷	三千代の回想や安吾のエッセイなどを参考にしながら、桐生時代の坂口家のような自由を自由に想像して書いた小説。金魚や秋の虫たちの飼育に熱中した話を中心だが、安吾以外はみな変名にしてあり、細部はすべて空想なので、伝記資料にはならない。安吾の性格を傲慢な意地っばりに片寄せすぎた感があり、「信長」については、後半失速して安吾自身イヤ気がさして筆をおき、飲んだくれたことにある。浅田晃彦『坂口安吾桐生日記』(上毛新聞社 1969)に収録	信長
1966年9月	檀一雄	反俗・求道の作家—坂口安吾小伝	紙誌	新潟日報(10～17日)	安吾の自伝的小説や書簡、各氏の回想文などをもとに構成した安吾の略伝。文壇デビューまでの記述は、1957年6月の『坂口安吾選集』8「解説」とほぼ同じ内容で、かなり詳しい。それほど分量はないが、何より安吾の人と文学への理解度の点で、その後の長文の伝記類より数段まさる。デビューから没年までの記述は、『太宰と安吾』などで書かれた交流エピソードの抜粋になっている。檀一雄『小説坂口安吾』(東洋出版 1969)に収録	
1966年10月	いいだもも	坂口安吾	解説	現代の文学22「坂口安吾集」(河出書房刊)	推理小説や歴史小説、ファルス、説話、ルボなどエンターテインメント作品のほうが「のびのびした結実をみせている」と一定の評価を述べつつも、「日本文化私観」で書かれたような「豪奢俗悪の孤低、天下人のニヒリズムには遠かった」とし、「必要の美学と孤独の美学の統一」に成功していないと批評。花田清輝「動物・植物・鉱物」(1949)に賛同の意を示し、共産主義的な文学の理想像を語る。『坂口安吾研究』Ⅱに収録。なお、解説冒頭で、収録作品「不連続殺人事件」の犯人をバラしていることについて、小林信彦が重大なルール違反と怒っている(「深夜の饗宴 坂口安吾」1970)	不連続殺人事件 日本文化私観
1966年10月	大井広介	「負ケラレマセン勝ツマデハ」	月報	現代の文学22「坂口安吾集」(河出書房刊)	税金滞納問題で安吾が国税局と争ったときの裏話を語る。安吾が格安の背広を買って「一べんきたらすっかり駄目になっちゃった」と話していたエピソードや、各出版社が板ばさみで悩まれた話など。大井が国税局との交渉を代行してやった折、安吾が書いた「陳情書」の内容が「坂口の面目躍如としたユニークな珍文献で」「埋没しているのは惜しい」と述べる。『坂口安吾全集』別巻(筑摩書房 2012)に収録。なお、「陳情書」は同全集16巻(2000)に収録されている	陳情書 負ケラレマセン勝ツマデハ
1966年10月	瀬戸内晴美	「墮落論」との出逢い	月報	現代の文学22「坂口安吾集」(河出書房刊)	終戦後、北京から引き揚げて来て最初に読んだ本が『墮落論』で、「一つ一つの活字が生きて、私に掴みかかってくるような感じがした」、「墮落論」でガクゼンと目覚めた私は、ようやく本来の自分にかえり、新しく生きはじめた」と記す。安吾全作品中の傑作に「青鬼の禪を洗う女」を挙げ、「安吾がくりかえしのべている主張は、人間の孤独の哀しさと、いじらしさ」であり、「このヒロインほど魅力のある女を、私はまだ戦後の文学の中で見ていない」と絶讃	墮落論 青鬼の禪を洗う女
1966年10月	坂口献吉ほか	坂口献吉追悼録	共著	(BSN新潟放送&新潟日報社刊)	安吾の長兄献吉の事績を最も詳細に知ることができる資料集。安吾宛・三千代宛を含む多数の書簡、日記、短歌、遺墨、各氏の回想などが集められ、読んでいくうちに安吾の精神とも通ずる献吉の一途さや無私の精神が浮かび上がってくる。新潟日報社長や会長を務めながら、新潟宝塚劇場の再建や、各所からの反対を押し切ってラジオ新潟を立ちあげたことなど、各種公共事業に命がけて取り組んだようすが窺われる。安吾を回想した「その頃」(1963)も収録	
1966年11月	安田武	戦時下の尾崎士郎(上)	紙誌	文学	尾崎士郎が戦犯として追放仮指定をうけた際の、安吾からの友情こもった手紙を紹介。士郎の「芋月夜」(1946)などに長く引用されたことも紹介している	
1966年11月	庄司肇	「吹雪物語」について	紙誌	城砦	「吹雪物語」を読む人が感じる違和感や、「失敗作」評がなぜ多いか、その理由を小説家でもある庄司らしい独特な表現で読み解く。「心理描写の細分化と反復と、その泥沼の中に無理無体になじこまれてくる作者の顔との、えりわけようもないほど混り合ったどすぐろさ」を読みにくさの一因としつつ、その文学的格闘の真摯さもそこに現れていると評価する。ただ、登場人物はみな卑小な「短編型」で、しかも各人の区別が明確でなく、みな観念的で同じ漂泊願望をもっている点を指摘。狂言まわしのな大寺老人だけがファルスを体現し、この人物を描くことによって安吾は自分の中のファルスの質的転換をなしたと見た。また、後年の代表作と同じ表現が作中に散見され、安吾全作品のエッセンスをこの一作にみることができるとし、悪作の評価を改めるべきだと説く。庄司肇『坂口安吾』、同『坂口安吾論集成』、『坂口安吾研究』Ⅱに収録	吹雪物語
1966年12月	辻淳	「日本文化私観」について	紙誌	図書新聞(3日)	「古都」に出てくる京都伏見の食堂の養女「宇都宮アサ子」さんから当時のようすを聞か、あまり目新しい情報はない。安吾はドテラと2枚の浴衣だけで通し「腰紐は縄であった」という。河原義夫にも会い、戦時中に安吾から受け取った書簡(その後の全集に収録されたもの)を紹介している	古都
1966年12月	矢島道弘	坂口安吾論—無頼のふるさと	紙誌	新文学史	「石の思ひ」の紹介で「母に対する天誅を神に哀訴した少年、安吾」に無頼の根があると論述。神経衰弱が昂じた末、酒に救いを求めた、そんな気持ちで初期作品群から読み取れるとも。如上の独自の見解で安吾の生涯をたどる	石の思ひ
1967年1月	浅田晃彦	安吾と犬	紙誌	小説と詩と評論	三千代の回想などをもとに、桐生時代、坂口家で飼った犬の話を中心に展開する小説。ところどころ安吾の生い立ちなどを交えて語られるが、単純な間違いや、わざとする曲解などが散見され、小説としての純度を下げている。犬についても安吾の一番の愛犬コリーはひどい書かれようで「ラモー」の居候ぶりは安吾以上に横着なものだった」という調子。浅田晃彦『坂口安吾桐生日記』(1969)に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1967年1月	埴谷雄高	解説	解説	全集・現代文学の発見8(学芸書林刊)	「墮落論」「白痴」収録の巻。「墮落論」については「自己本来の姿にもどることにつける」と要諦を説き、人間が自然の一部であることの認識から「無きに如かざるか、天下一の俗悪豪華か」という「二つのテーゼ」が生まれることを戦中の「日本文化私観」ですでに明確にしていたと指摘。以上の自然観の延長で、「向う側からこちらへ無気味な何かが踏みこんでくる」感覚に至り着く、埴谷独特の論旨展開	墮落論 日本文化私観 白痴
1967年1月	平野謙	作品解説	解説	日本現代文学全集90「石川淳・坂口安吾集」(講談社刊)	1942年の秋頃、真杉静枝の家で宇野千代と安吾と平野の4人が会したことを回想。安吾作品では「日本文化私観」に最初の「強力なパンチ」を受けたという。戦時下に「敢然としていわゆる「日本的なるもの」を否定しようとした」ことに驚き、さらに次に「絶対の孤独が人間生存の本質だ」と説いた『文学のふるさと』を媒介することによって、戦後の『墮落論』の鮮烈もよく生れたのだと思う」と非常に好意的に批評	日本文化私観 文学のふるさと 墮落論
1967年1月	奥野健男	石川淳・坂口安吾入門	解説	日本現代文学全集90「石川淳・坂口安吾集」(講談社刊)	安吾の生涯と作品の変遷を順を追って記す。ただし、「吹雪物語」をはじめ「花妖」や「火」などの長篇については、どれも失敗作とらえており、「豪快さをてらうところが目立ち、また濫作の筆の荒れも出て来る」と批評	吹雪物語 花妖 火
1967年1月	檀一雄	安吾の狂気	月報	日本現代文学全集90「石川淳・坂口安吾集」(講談社刊)	「風模様と、荒れ模様が、何の接穂もなく、交替して」いた安吾の最も狂気に近づいた時期のことを、共に過ごし安吾の世話をした檀が回想する。競輪事件で身を隠した折には、「貸切バス」の床に腹ばいになって対向車をやり過ごした安吾の姿を思い出す。檀一雄『太宰と安吾』に収録	
1967年1月	田村泰次郎	含羞のひと—若い日の坂口安吾	月報	日本現代文学全集90「石川淳・坂口安吾集」(講談社刊)	1956年7月の「含羞の人」や1955年5月の「青春坂口安吾」、1965年6月の「桜のころ」と重なる内容の新稿	
1967年1月	佐々木基一	思いこみの大家	月報	日本現代文学全集90「石川淳・坂口安吾集」(講談社刊)	戦争中、『現代文学』同人たちでイエス・ノーというゲームをしていた折、まだヒントがゼロの段階で、安吾が人物名を当てたことがあった。奇蹟だと佐々木が何度も驚いてみせると、安吾は「佐々木基一はずっとぼくを軽蔑していた。そのことをぼくが知って面白くなく思っていることを、佐々木基一はよく知っているものだから、ぼくの機嫌をとる機会をねらっていたのだ」と大井広介に言ったという。佐々木には全く思い当たるフシがなかったという話。『佐々木基一全集』V(河出書房新社 2013)、『坂口安吾全集』別巻に収録	
1967年3月	坂口三千代	クラクラ日記	単著	(文藝春秋刊)	1957年から雑誌『酒』に連載された回想記を加筆・修整して単行本化したもの。読者が知りたがるエピソードを的確に拾い上げており、安吾の人と文学の補足資料として第一級の必読本である。細部までよく記憶していること、混乱の渦中にありながらも冷静で客観的な目を失わないこと、安吾や周りの人たちの行動心理がリアルに伝わることなど、さまざまな点で秀逸。文章も巧みであたたかい人柄がこじみ、読み物としても面白い。世に伝わる坂口安吾像の多くは、この回想記に拠っているとと言っても過言ではない。『坂口安吾研究』Iに抜粋収録。1989年、ちくま文庫から再刊	
1967年3月	浅田晃彦	坂口安吾桐生日記	紙誌	新潮	晩年、薬物の影響で暴れた安吾が、ゴルフクラブを肩に南川潤宅へ殴り込みをかけた事件を、想像を交えて創作した小説。自身も安吾に世話になった作家の浅田だが、安吾の乱暴さや殿様気どりへの反感が強く現れている。安吾以外は全員変名にしてあるが、三千代に当たる光世は「生れつきのホステス」と書かれ、南川に当たる北川も光世に邪念をいだく淫乱で陰険な男に仕立てられ、光世の乳首の色まで克明に描写する低劣な態度で書かれている。浅田晃彦『坂口安吾桐生日記』(上毛新聞社 1969)に「友情無頼」と改題して収録の際、エロ描写やあくどい人物造型など大幅に削除訂正された	
1967年4月	三枝康高	壮大なる虚構の精神	紙誌	日本文学	太宰、織田、安吾ら無頼派作家は、平野、本多、佐々木ら「近代文学派」から「不当に過小評価」されてきたとし、改めて作品に即した評価の見直しを促す。安吾については、「古都」「孤独閑談」と同様、「真珠」もファルスによる方法転化が効いていると説く。彼らの作品は「人間の実存」を描くための「壮大なる虚構の精神」の所産で、サルトルと同質の内的作用があると批評。『太宰治と無頼派の作家たち』(南北社 1968)に収録	古都 孤独閑談 真珠
1967年4月	杉森久英	文学は性をどう描いたか(3)「谷崎潤一郎」と「坂口安吾」	紙誌	小説新潮	戦後、性を描くのが自由になり、谷崎の「細雪」なども戦時中取締りに遭ったがゆえに箔を付けたという。戦後の肉体文学の代表を田村泰次郎と安吾とし、「白痴」と「道鏡」の肉欲への執着ぶりを紹介。安吾の文章は「すこしも煽情的でもなければ、エロティックでもなく、カラリとしている」と指摘	白痴 道鏡
1967年4月	檀一雄	異常な魂との出会い—坂口三千代著「クラクラ日記」について	紙誌	読売新聞(6日夕)	所帯じみた家庭を嫌い「女房という鬼をつくるな」という「戒律」を守っていた安吾に対して、三千代は「おそれもない生粋さをもって、このあやしい精神主義者の内フトロにおどり込んで」といったと語る。檀一雄『太宰と安吾』に収録	
1967年4月	三枝佐枝子	女性編集者	単著	(筑摩書房刊)	「最後に見たやさしいパパの眼」の章で、『婦人公論』編集者として接した安吾のようすを記す。1947年春に訪問した折には婦人誌には太宰の小説が向くと勧められたこと、新橋の酒場「凡十」で安吾にタクシーに乗せられ誘惑されかけたことなど回想。晩年には長男のおむつを自らかえてやるようすを写真付きで紹介する。『東京新聞』連載が初出らしい	
1967年5月	佐古純一郎	文学の探求	単著	(審美社刊)	「戦後文学論」の章で安吾についても触れているが、簡略な概要程度。「墮落論」については「サルトルやカミュに媒介的思考が見出される」とする	墮落論

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1967年6月	浅田晃彦	童話の眼	紙誌	風雷(9月の秋号まで分載)	安吾が競輪事件告発に至った顛末と、その証拠写真解析のため桐生の南川潤(作中では「北川」)を頼って来た話などを、まるで見ていたかのような書き方で小説化したもの。尾崎士郎や大井広介らの回想など援用しているが、どこまでが聞き書きか、どこからが空想か判断としないのが難点。浅田晃彦『坂口安吾桐生日記』(1969)に収録	
1967年7月	小川徹	坂口安吾—その「石」と「風」と「火」と	紙誌	文藝	安吾の生涯と作品を、安吾自身の小説や書簡、友人らの回想などを引用してまとめたものだが、安吾作品の読解が乱暴なため、傲慢で悪意じみた安吾像ができあがっている。また、安吾デビュー当時の短篇や戦争中の逢引きの相手など、性愛のモデルは全部お安さんとするなど、時系列を無視した暴論や曲解が目立つ。小川徹『墮落論の発展』(三一書房 1969)に収録の際「坂口安吾・その性と変貌」と改題。『坂口安吾研究』Ⅱに再録。『文芸読本 坂口安吾』に抄録	
1967年8月	庄司肇	「白痴」小論	紙誌	城砦	「白痴」が安吾の代表作とされることに疑問を呈し、「恰好のファルスの素材を」うまく処理できずに「放漫」になっており、しかも主人公の「伊沢のひとり高しとするが如き大甘ないやらしさ」が鼻につく「失敗作である」と評する。ただ、文体に新味があり、戦前の「うす墨色の膜をかけているような描写」がなくなり、「簡明雄勁なりズム」「奔騰するエネルギー」が生まれた点を高く評価している。庄司肇『坂口安吾』(南北社 1968)、同『坂口安吾論集成』(沖積舎 1992)に収録	白痴
1967年8月	瀬沼茂樹	人と文学	解説	現代文学大系 53「坂口安吾・井上友一郎・檀一雄集」(筑摩書房刊)	安吾の生涯と作品とを年譜に沿って概括したもの。文学史上「異数の存在」であることを認めながらも、代表作と呼べる作品がないと、瀬沼自身はあまり評価していない。戦後、流行作家となって「のぼせ、多作、濫作におちいった」と批判的に生涯を括る。1970年の『日本文学全集』53「坂口安吾・井上友一郎・檀一雄集」、1975年の『筑摩現代文学大系』58「坂口安吾集」にも再録	
1967年8月	田辺茂一	わが伯楽	月報	現代文学大系 53「坂口安吾・井上友一郎・檀一雄集」(筑摩書房刊)	前半は、安吾が戦後すぐに担当した「文芸時評」で、田辺の作品を数回にわたって褒めてくれた異例の厚遇への感謝を記す。後半は、晩年『安吾捕物帖』出版をめぐる問題の仲裁に桐生まで訪問した話で、「安吾の酒」(1961)と同じ内容。『日本文学全集』53、『筑摩現代文学大系』58に再録	明治開化安吾捕物
1967年8月	花田清輝	一宿一飯	月報	現代文学大系 53「坂口安吾・井上友一郎・檀一雄集」(筑摩書房刊)	安吾と中野重治の対談企画のため中野と桐生を訪れた時の回想で、「坂口安吾の死」(1955)とほぼ同じ内容。『日本文学全集』53、『筑摩現代文学大系』58に再録	
1967年9月	黒田征	坂口安吾の初期	紙誌	国語国文研究(北海道大学国文学会)	「木枯の酒倉から」「風博士」「黒谷村」など初期作品について、宗教的なもの(酒・幻術・詩・幽玄)をめぐって、文学(理性・煩悶)の世界へ向かう宣言だと説く。しかし「「FARCEに就て」が宗教的な文学の内容を論述している」のが不可解と記す。黒田の観念においては両者がつながらないのだ、と。安吾の矛盾、と書くが、黒田の矛盾とも読める	木枯の酒倉から 風博士 黒谷村 FARCEに就て
1967年9月	瀬戸内晴美	鬼の栖	単著	(河出書房新社刊)	菊富士ホテルに住んだ文人たちの足跡を記した評伝。1965年9月から1966年8月まで『文芸』に連載された。安吾と矢田津世子の恋の顛末は、おもに安吾自身の文章を引用する形で紹介するが、矢田と「特別に親密だった」大谷藤子へのインタビュー内容が貴重。矢田の数々のスキャンダルはすべてデマで、「痛ましいくらい、自分にきびしい人」だったが、「坂口安吾さんのことは好きだったようです。はっきり、もし結婚するなら、坂口さんとするだろう」と証言	
1967年10月	大井広介	庄司さんへの私信	紙誌	日本きやらばん	これまでの大井による回想文と同内容	
1967年10月	笠原伸夫	坂口安吾の女性像について	紙誌	日本きやらばん	「黒谷村」以来、安吾の描く女性像は「淫靡な部分と、無垢な部分とを同時に所有する女たち」で、それは「白痴」や「桜の森の満開の下」「夜長姫と耳男」に至るまで変わらないと評する。ただ、矢田津世子を知った頃から「ぎこちなく不透明な」ヒロインが現れるという。「吹雪物語」の主題が「(女)および(故郷)への断念」であるのも象徴的で、この時期だけ、安吾作品ははや異質な「混迷」の中にあるとする	黒谷村 白痴 桜の森の満開の下 夜長姫と耳男 吹雪物語
1967年10月	浅田晃彦	奇蹟を呼ぶ薬	紙誌	日本きやらばん	安吾には薬物偏執があったとして、DDTやペニシリンなどを信奉した話や、種々の薬を定量以上に飲んでいて話を列挙。死の床にエフェドリンがあったのを医師が見て、これが死因と判断したというが、噂に類するもので信用性に乏しい。さらに、安吾がヒロポンなどの幻覚作用によって創作能力を高め、文学へ奇蹟をもたらそうとしたと断定するのは、作家精神までも貶める暴論であろう。浅田晃彦『安吾・潤・魚心』(奈良書店 1986)に収録	
1967年10月	海谷寛	虚構・唯一の現実	紙誌	日本きやらばん	終戦後、無為の日々を送っていた海谷にとって、「恋をしに行く」や「外套と青空」「逃げたい心」などは「かけがえのない唯一の現実となり得た」という。虚構ならではの光彩や熱気に打たれ、それ以来、安吾文学のとりこになったと回想	恋をしに行く 外套と青空 逃げたい心

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1967年10月	宗谷真爾	虚空の幻術師—インド教的安吾私見	紙誌	日本きやらばん	安吾作品には処女作からずっと「インド哲学の影響を、かなり濃密に読みとることができる」とし、風や水などと一体になって「解脱」せんとする「梵我一如」の意志が感じられるという。例として「ふるさとに寄する讃歌」「木枯の酒倉から」「風博士」「紫大納言」「桜の森の満開の下」「私は海をだきしめてみたい」などを挙げる。「白痴」などにはネクロフィリー(屍体愛好)やタナトフィリー(滅亡愛)のテーマもみられるとする。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	ふるさとに寄する讃歌 木枯の酒倉から 風博士 紫大納言 桜の森の満開の下 私は海をだきしめて みたい 白痴
1967年10月	常住郷太郎	安吾と染太郎	紙誌	日本きやらばん	浅草のお好み焼き屋「染太郎」の来歴と、お内儀の崎本はるからの聞き書きを記す。安吾は染太郎で小説執筆する時はいつもお内儀をそばにいさせた話や、死の前日まで染太郎にいた話など紹介	
1967年10月	庄司肇	戦争中の安吾	紙誌	日本きやらばん	「吹雪物語」以前の作品群は、種々のものを詰め込みすぎて混沌としていたが、以後は「こじんまりとまとまった佳品」が続くとし、特に自伝的小説は秀作ぞろいで「安吾のはだかの心が脈々と息づいている」と評する。「吹雪」以前の「をみな」が原型であろうとみる。また、「真珠」は「己の下賤ぶりによって九勇士をひき立てようというようなさしきは、全く見られない」と、よくある対比説に異を唱えている。このあと、庄司は安吾の小説すべてがファルスであると定義し、ファルスであると同時に以下の5つの分類ができるとした。1、「波子」「海の霧」など登場する人物やモノよりも観念が優先される観念小説。2、「紫大納言」などの説話小説。3、「金銭無情」「現代忍術伝」などのドタバタ喜劇小説。4、3の失敗作としての風俗小説。これは戦前にはないという。5、「風博士」「風人録」「閑山」などの空話。庄司肇『坂口安吾論集成』に収録	吹雪物語 をみな 真珠 波子 海の霧 紫大納言 金銭無情 現代忍術伝 風博士 風人録 閑山
1967年10月	庄司肇	戦後展望	紙誌	日本きやらばん	戦後、「滑稽小説」などと銘打たれた「金銭無情」「出家物語」「ジロリの女」や晩年の短篇群は、戦前のファルスを引き継いだ安吾の新しい境地として、その独自の文体や奇抜な着想など、もっと評価されるべきと論じる。特に「火」や「女剣士」などは、庄司「戦争中の安吾」で5分類した全部を「総合した形」と賞讃。こうした作風の転進が、エッセイにも「微妙な変調を示しはじめ」、「安吾巷談」や「安吾の新日本地理」などの軽い調子の文体を選ぶようになったとみる。長篇では「信長」が最高であり、「街はふるさと」がこれに次ぐとする。「一見弱々しげでありながら強靱な生命力をあふれさせていた人々」への共感がこもっているゆえ。ほかにも、自伝的小説群や、「どろどろの不定型をそのまますくいあげるような」初期の「竹藪の家」「小さな部屋」なども非常に重要な作品であるとする。庄司肇『坂口安吾』、同『坂口安吾論集成』に収録	金銭無情 出家物語 ジロリの女 火 女剣士 安吾巷談 安吾 の新日本地理 信長 街はふるさと 竹藪 の家 小さな部屋
1967年10月	龍文雄	風の記憶	紙誌	日本きやらばん	戦前、初めて読んだ安吾作品が「篠笹の陰の顔」で、それは「虚無よりの創造」或いは咆哮といった、反体制的な要素を、たつぷり含んでいた小品であり、戦後の「わが血を追ふ人々」につながっているとみる	篠笹の陰の顔 わが 血を追ふ人々
1967年10月	安部隆宏	感傷と洞察—安吾について	紙誌	日本きやらばん	「FARCEに就て」で説かれる自由な精神は「本質的にアモラル」であるとみて、そこから「欲望について」などのように、欲望と秩序を対置して「本質」を洞察できるとする。そういう目でみると、「風博士」よりも「黒谷村」のほうがファルスとして成功しているという。「風博士」や「白痴」は、共に後半が「通俗的」とであるとして、評価しない	FARCEに就て 欲望 について 風博士 黒谷村 白痴
1967年10月	丸茂正治	角三つある鬼になれ	紙誌	日本きやらばん	『桜』発刊記念の講演会のような、『吹雪物語』出版記念会の模様を、細部まで詳しく回想。『桜』の会の控室では、安吾が谷丹三と隠岐和一を絶讃し、中他にも後押しを頼んでいたという。後者の司会が菱山修三であったことや出席者の顔ぶれなども細かく、安吾がスピーチで、何もない自分の掌から宝物を出して参会者へのお礼に言った話も、小説家の丸茂らしい臨場感あふれる筆致で綴る。ほかにも、安吾や中他にも吉原堤の馬肉屋で明け方近くまで飲んでから、皆で吉原へ繰り込んだ話なども詳細で面白く、短い貴重な証言の宝庫といえる	
1967年10月	杉森久英	小説坂口安吾	紙誌	新潟日報(7日～翌年3月9日)	安吾本人の自伝的小説や友人らの回想などをと、生涯と各時期の有名なエピソードを年代順に構成した伝記小説。小説らしく架空の会話を作った箇所もあるが、年譜を引き写しただけの部分もあり、時に安吾作品についての感想も述べられていて、全体的には評伝に近い。伝聞とハッキリ明示された箇所もあるが、明記しないままズルズルと『クラクラ日記』(1967)などを書き写している部分もあり、その中に杉森の空想も紛れ込むといった具合で、箇所ごとに変わる文体はバランスが悪く、資料としても扱いにくい。杉森久英『小説坂口安吾』(河出書房新社 1978)、同題(河出文庫 1984)に収録	
1967年11月	浅田晃彦	狂人遺書	紙誌	小説と詩と評論	長男出生前の安吾のとまどいと、出生後の子煩悩ぶりを三千代の回想などをと小説化したもの。安吾以外は全部仮名で、安吾をおとしめるような記述が散見する。「信長」も「狂人遺書」も、安吾が失敗作と断じたこととされている。浅田晃彦『坂口安吾桐生日記』(1969)に収録	信長 狂人遺書
1967年11月	檀一雄	破戒と求道	紙誌	国語通信	安吾が推敲など一切せず「一日のうちに、三、四十枚の原稿を流れるように書いた」と語り、たとえば「ラムネ氏のこと」など「簡明にして自由な魂のゆれ動くままに、奔放自在」な思考と文体でできていると評する。檀一雄『太宰と安吾』に収録	ラムネ氏のこと
1967年11月	石川淳	この巨大なるもの	月報	定本坂口安吾全集・内容見本	安吾全集の全巻に安吾がいると評し、「高貴なるもの、通俗なるもの、深くしづもの、派手にみだれるものを併せて、文学の精髓はすべて混沌としてここにある」と推奨の言葉を詩的に綴る。『定本坂口安吾全集』第7巻の帯に再掲載され、『石川淳全集』19(筑摩書房 1992)などに収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1967年11月	三島由紀夫	(推薦文)	月報	定本坂口安吾全集・内容見本	おもに太宰と比較する形で安吾を賞揚し、安吾文学には「いつもトンネルを感じる」と書く。「余計なものがなく、ガランとしてゐて、空つ風が吹きとほつて」いる感じだと。「太宰が甘口の酒とすれば、坂口はジンだ。ウオッカだ。純粋なアルコール分はこちらのほうが高いのである」とスタイリッシュに締める。『定本坂口安吾全集』第1巻の帯に再掲載され、『三島由紀夫全集』34(新潮社 2003)などに収録	
1967年11月	檀一雄	男性的思考の持主	月報	定本坂口安吾全集・内容見本	「人間いかにあるべきかの、生粋で、徹底的な求道者であった」と安吾を評し、平易に見えて難解な安吾文学は「その余りにも巨視的な視野のひろがりによる」と読み解く。『定本坂口安吾全集』第8巻の帯に一部が再掲載され、檀一雄『太宰と安吾』に収録	
1967年11月	小林秀雄	(推薦文)	月報	定本坂口安吾全集・内容見本	安吾文学は「何とも言へぬ優しい肯定的なものと荒々しく異常な破壊的なものとの微妙な混濁であつた」と評し、「彼の作品群の外見上の乱脈が、この作家が必須としたアイロニーであつた」とする。『定本坂口安吾全集』第2巻の帯に再掲載され、『小林秀雄全集』12(新潮社 1979)などに収録	
1967年11月	加藤秀俊	(推薦文)	月報	定本坂口安吾全集・内容見本	「墮落論」は「敗戦をうけとめた日本人の行動様式、思考様式を怒りをもって眺め、叱咤した」と述べ、そのモチーフは「金銭無情」や「ジロリの女」などにも「鬼気せまるほどの筆力で構築されている」とする。『定本坂口安吾全集』第3巻の帯に一部再掲載された	墮落論 金銭無情 ジロリの女
1967年11月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集7(冬樹社刊)	安吾のエッセイには、合理精神とニヒリズム、孤独、死の恐怖などが底流にあるとし、全集で通読すると「真摯な求道者の姿」「巨大な可能性を含む思想家の姿」が見いだされると述べる。特に「文学のふるさと」は、坂口文学のすべての鍵といってよいと推賞する。定本全集には全巻に奥野の解説があり、1972年、奥野健男『坂口安吾』に再構成する形で収録される。ただし、同書は評伝的構成をとったため、エッセイのみを収録した本巻の解説は、作品評などを適宜ぬきだす形で該当時期にはめこまれている	文学のふるさと
1967年11月	檀一雄	作家論	解説	定本坂口安吾全集7(冬樹社刊)	安吾が「仮構人生」を生き、「仮構」の恋愛を描いたとする主張は、『坂口安吾選集』7の「解説」(1957)と同様。同じように「人生を絶えず設計しつづけていた」牧野信一を描く「牧野さんの死」を「安吾の文章の中で、私が一番愛好する」作品という。全体に、詩的表現で安吾へエールを送ったようなエッセイで、以下の文章で締めくくる。「安吾の孤独が、まぎれもなく澄み透る時の文体は美しい。その孤独は、まるでもう天上大風の中に吹き上がっているようで、市井の雑踏も、狂躁も、ただ人間の生滅の遠鳴りとして、遥かに悲しく鳴り過ぎるのである」檀一雄『太宰と安吾』、同『小説坂口安吾』、『現代日本文学大系』77(筑摩書房 1969)に収録	牧野さんの死
1967年11月	尾崎一雄	暮でのつき合い	月報	定本坂口安吾全集7(冬樹社刊)	「冬眠日録(九)」(1955)同様、尾崎の日記に残る安吾からの小憎らしい困基挑戦状を全文記し、基敵として仲のよかつた頃を回想。安吾から短篇「雨宮紅庵」を受け取ったのが出逢いだったことなど	
1967年11月	葛巻義敏	長島と彼と……	月報	定本坂口安吾全集7(冬樹社刊)	「風博士」の方向性に反対して『青い馬』同人たちと疎遠になった葛巻のもとへ、死ぬ少し前の長島萃が突然訪れ、その後、数通の手紙が届いたという。文面は、安吾にも出したという異様な詩のようなもので、安吾を夜道のガス燈にたとえてあつた。また、その後『吹雪物語』の出版記念会で最初にスピーチしたことなども回想。長島からの手紙のうち安吾にも送った部分は七北数人『評伝坂口安吾』(2002)に全文引用され、手紙全文は『坂口安吾全集』別巻(2012)に収録された	
1967年12月	無署名	文化ジャーナル—坂口安吾全集の刊行	紙誌	朝日ジャーナル(24日)	冬樹社『定本坂口安吾全集』の刊行開始を慶賀、太宰の7回に及ぶ全集刊行に比して安吾が初なのは不可思議だが「作品群の外見上の乱脈」が敬遠されたかとみる。全集の三分の一が初収録作品であり、「安定ムードの日本人にとって未来への脱出の理想像になるかも知れない」と熱く語る	
1968年1月	中島健蔵	織田作之助と坂口安吾—素描	紙誌	大阪文学	1947年2月『新潮』に発表されたエッセイの再録	
1968年1月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集1(冬樹社刊)	戦前の安吾は「不遇な時代」だったが、「あらゆる可能性、前衛性」を含んだ「一級の文学作品」であつたと説く。特に「黒谷村」などの「観念小説」に、霊肉、愛憎、自然と人間などの激しい対立と自己抑制を感じるという。34篇の収録作すべてに短い解説を付しているが、全体に作者の実人生と作品生成とを結びつけすぎる傾向があり、デビュー直後の作に矢田津世子の恋情を重ねるなど、年譜的記述の混乱や間違ひも散見する。「麓[戯曲]」や「木々の精、谷の精」「紫大納言」などを高く評価	黒谷村 麓[戯曲] 木々の精、谷の精 紫大納言
1968年1月	磯田光一	作家論 無頼昇天—坂口安吾私観	解説	定本坂口安吾全集1(冬樹社刊)	「生来の故郷喪失者」である安吾の「ふるさと」に寄する讃歌には、仮構の母、仮構のふるさとしか出てこないで、「子供のために良き母であつた」異母姉もまた、安吾にとっては「無縁の世界の人間である」とする。作品の一部の表現だけ取り上げる論立てなので、少し危うい。「いつこへ」と「青鬼の禪を洗う女」は「陰画と陽画との関係にある」として、前者では「愚妻」型ヒロインのエゴイズムを憎み、後者では男のエゴイズムを見抜きつつ無償の愛を注ぐ聖なる「娼婦」を描いていると指摘。全体に詩的な表現を多用した評論で、内容的な新しさはあまりない。『坂口安吾研究』(南窓社 1973)に「坂口安吾論—無頼昇天」と改題して再録、『文芸読本 坂口安吾』にも再録	ふるさとに寄する讃歌 いつこへ 青鬼 の禪を洗う女
1968年1月	高木常雄	安吾先生のこと	月報	定本坂口安吾全集1(冬樹社刊)	駆け出し編集者として坂口家を初訪問後、秘書役として出入りした高木青年が、ある日、小料理屋で安吾から「諄々と説教」されたことを回想。「大人のうっ面だけを真似てはいけない」という親身な説教だったという	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1968年1月	若園清太郎	坂口安吾とステッキ	月報	定本坂口安吾全集1(冬樹社刊)	『言葉』同人時代から安吾がステッキを愛用したこと、竹村書房と尾崎士郎との検印にからむ悶着の仲介をしてスネークウッドのステッキをもらい、それを取手のある事件で失ったことなど回想。若園の他の回想文に比べて正確さに欠け、勢いで各エピソードの結末を創作しているため、資料とするには注意が必要	
1968年1月	河原義夫	安吾、偉なるかな	月報	定本坂口安吾全集1(冬樹社刊)	『定本坂口安吾全集』で初公開となった河原義夫宛安吾書簡についての背景が詳しく説明されている。安吾に寄稿してもらったエッセイ中に京都伏見の火薬庫の話題があり、発禁のおそれから返送したところ、安吾から「小生はケンエツといふものを念頭に小説を書くことは一切致しませぬ」という堂々とした返事が来たという話	
1968年2月	濫澤龍彦	日本文学における「性の追求」	解説	全集・現代文学の発見9(学芸書林刊)	「私は海をだきしめていたい」について、「安吾の娼婦礼讃、不感症礼讃は、端的に言って、女のなかのデメテールのものに対する嫌悪のあらわれである」と解釈、「処女と娼婦」という一見反対の概念が、母なるものへの対立項として共通すると指摘する。このことは肉体だけの女を描いた「白痴」にも通じる「純粋な女のイメージ」だという。つまり安吾は「性の追求においては、徹頭徹尾、ストイシアンで」「エロティシズムというものに本質的に無縁な人間だった」とみる	私は海をだきしめていたい 白痴
1968年2月	檀一雄	安吾の声	紙誌	毎日新聞(14日夕)	「クラクラ日記」がドラマ化され(安吾夫妻に似た「化物」としか見えなかったが)、安吾全集の刊行が始まり「その売れ行きがきわめてよしい」と聞いたこと、安吾忌は十三回忌を過ぎてますます盛大になりそうなことなど記し、かつて安吾が松本の留置所を出てまもなく男児誕生のしらせを受けたことなど回想	
1968年2月	檀一雄	文芸退廃に抗して	紙誌	読売新聞(16日夕)	文芸雑誌『ポリティアイ』創刊のポリシーを語ったエッセイ。その中に安吾についての回想が入り、「孤独で、アテナしの、深い沈潜の時間」の中で安吾の文芸は作られたと述べる。檀一雄『太宰と安吾』に収録	
1968年2月	檀一雄	坂口安吾と尾崎士郎	紙誌	東京新聞(16～17日夕)	安吾と士郎は、文学では結びつかないが「人柄の雄偉さ」や「けたはずれな野人魂」「豪快な純真さ」の点で似通っていたと評する。伊東で2人に誘われて飲み歩いた日のことや、安吾が石神井の檀の旧宅前に「テニスコート付き安吾小屋」を建てる計画をしていた話などを愉快地語る。檀一雄『太宰と安吾』に収録	
1968年3月	八木敏雄	坂口安吾論	紙誌	批評	安吾作品全体を通して見て、作品が優れているわけではない、という立場で批評。観念を表現するには巧みでも、人物に肉体が感じられないとする。ただし、例に挙げている作品が「風博士」や「ふるさとに寄する讃歌」などの初期作品や「白痴」であり、論のためにする例証、という感じは否めない。「桜の森の満開の下」は読者サービスがうまく働いて「美しい」が、「花妖」などはサービス過ぎて作品の質が下がったとみる。『坂口安吾研究』Ⅱに収録	風博士 ふるさとに寄する讃歌 白痴 桜の森の満開の下 花妖
1968年4月	丸茂正治	安吾忌の片隅で	紙誌	新潮	前年発表の回想文が縁で、初めて安吾忌に招かれた日の話。新橋第一ホテルが会場で、田辺茂一が司会、『紀元』同人だった若園清太郎や西田義郎と30余年ぶりに再会したことなどを記し、おもに片隅で飲んだくれていたが、安吾もまた恥ずかしがり屋で、奔放さの底に「一脈の「含羞」を秘めているからこそ、比類なき輝きを放つ」文学だったと回想	
1968年4月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集2(冬樹社刊)	「吹雪物語」の「再版に際して」は、安吾自身が「失敗」と断っているようだが、そこには強い執着も窺われ「全存在を賭けた懸命な祈り」が感じられると評する。原型の「母を殺した少年」には、父仁一郎をモデルにした人物の履歴から始まるので、年代記的な「自己形成小説」を構想していたのかもしれないと指摘。「吹雪物語」では年代記どころかほとんど時間が進まず、人物も動かず、展開には「因果律がない」ので、一種のアンチロマンともいえるとする。その他の収録作では、「篠笹の陰の顔」に登場する「聖女、幼女にして淫婦」である長島翠の妹が、安吾の「さまざまな作品に永遠の女性像として弥勒菩薩ように」描かれているとする。奥野健男『坂口安吾』に加筆修正のうえ収録	吹雪物語 再版に際して 母を殺した少年 篠笹の陰の顔
1968年4月	倉橋由美子	作家論	解説	定本坂口安吾全集2(冬樹社刊)	安吾文学は「愛を拒絶している人間の文学」なので、性的な魅力に欠け、安吾ファンも存在しないと極論を吐く。「墮落論」などのエッセイも「日本人マニフェスト」にしかなくないと手厳しく批判。「吹雪物語」に限っては文章に抒情があり比較的「好き」だというのが、「自分のなかの「他者」を描けていないので、近代小説にはなっていないと断る。『坂口安吾論』と改題して『毒薬としての文学』(講談社文芸文庫 1999)などに収録	墮落論 吹雪物語
1968年4月	関井光男	「吹雪物語」について	解説	定本坂口安吾全集2(冬樹社刊)	「吹雪物語」直筆原稿に安吾が記した各章の執筆期間メモなどを初めて紹介し、各刊本との校異を付す。未定稿「母を殺した少年」から「吹雪物語」起草に至る過程で、「『自叙伝的小説』から『思想小説』への移行を示し、その文学的飛躍を見せている」と批評するが、未定稿は「自叙伝的」ではないし、ほぼすべての内容が「吹雪物語」中に取り込まれている	吹雪物語 母を殺した少年
1968年4月	岡田金蔵	「吹雪物語」のこと	月報	定本坂口安吾全集2(冬樹社刊)	困基仲間だった安吾との出逢いから菊富士ホテルに共に住んだ頃を回想。かなり鞏固した文章で、ホラ話めいた趣もあり、信頼性には欠けるが、安吾から「吹雪物語」の直筆原稿を預かった経緯なども書かれた貴重な資料といえる。この直筆原稿は後に岡田が函館図書館に寄贈し、この全集で初めて翻刻された	吹雪物語
1968年4月	埴谷雄高	安吾と雄高警部	月報	定本坂口安吾全集2(冬樹社刊)	戦中の『現代文学』同人たちの遊びだった推理小説の犯人当てを、戦後の『近代文学』でも平野謙や荒正人らが流行らせ、そこに埴谷も加わったことを回想。これが安吾にも伝わって、『不連続殺人事件』の登場人物名に使われたこと、その後、大井広介に連れられて安吾宅に遊びに行ったことを記すが、親しく話したのはこの時ぐらいであっらしい	不連続殺人事件
1968年4月	頼尊清隆	闇の中の安吾さん	月報	定本坂口安吾全集2(冬樹社刊)	戦前、安吾の困基仲間だった頼尊が、本郷の飲み屋で不良と喧嘩して交番に連れて行かれた折、「突然、闇の中から」安吾が現れて「この男はいい男だから」と頻りに弁護してくれたという。「人を信じて信じ切る、疑うことを知らない、好意を持つと最後までその人をいたわる優しさがほんとの坂口さんの底にある」と懐かしさをこめて語る	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1968年4月	三枝康高	太宰治と無頼派の作家たち	単著	(南北社刊)	「無頼派」の文学(1964)と「壮大なる虚構の精神」(1967)を収録し、これに続けて織田、太宰、安吾の各論を書きおろした評論集。「坂口安吾という実存」の章で、三千代や檀一雄、石川淳、河上徹太郎らの文章や安吾の自伝的小説などを引用して安吾の人となりを概説	
1968年4月	檀一雄	安吾と漫画	紙誌	(発表紙誌未詳)	安吾は「戦後新人論」などで横山泰三ほか戦後の漫画家たちを讃え、外国でもブロンディを褒めていたという。そのウラには、日本の文学界が閉鎖的で「人間生活と密着した良識やユーモアの乏しさを、いたく慨嘆」する気持ちが強かったからと述べる。檀一雄『太宰と安吾』に収録	戦後新人論
1968年5月	浅田晃彦	坂口安吾の祖先	紙誌	医科芸術	坂口守二『治右衛門とその末裔』を要約して紹介、安吾の先祖はどの人も安吾とよく似ていたと述べ、「彼の無頼の文学は高貴の文学の裏返しだった」と評する。浅田晃彦『安吾・潤・魚心』(奈良書店 1986)に「祖先の血」と改題して収録	
1968年7月	檀一雄	太宰と安吾	単著	(虎見書房刊)	新聞雑誌発表作などを集成したもの。安吾を回想した第二部に、「坂口安吾論」「安方町」「安吾・川中島決戦録」「坂口安吾の死」「わが人生観」解説」「坂口安吾選集」解説」「墮落論」解説」「坂口安吾」「二月空漠」「安吾を想う」「破戒と求道」「安吾と赤頭巾」「男性的思考の持主」「安吾の狂気」「異常な魂との出会い」「文芸退廃に抗して」「坂口安吾と尾崎士郎」「安吾と漫画」を収録。1996年に沖積舎から、2003年にパジリコから、2016年に角川ソフィア文庫から再刊	
1968年7月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集3(冬樹社刊)	「恋をしに行く」の描写の美しさに触れ、「性に関する陰湿なタブーから日本人を解放する画期的な作品であった」と賞讃。そのほか、安吾の多彩な代表作が多数収録されたこの巻について、歴史もの、自伝的小説などのテーマごとに、全作品に短評を付している。奥野健男『坂口安吾』に加筆修正のうえ収録	恋をしに行く
1968年7月	秋山駿	無邪気な戦士—『信長』と『二流の人』の世界	解説	定本坂口安吾全集3(冬樹社刊)	「信長」について、「行動する人間を、心理的な局面によってではなく、行動の局面において捉えている。それがいい。そこからこの小説の澁刻たるテンポが出てくる」と絶賛、スタンダールの『ナポレオンに関する備忘録』と共通する点が多いという。「二流の人」は逆に、「作者の眼が、人間の行動には向けられないで、性格の縦横な批評による人物像の把握という点に向けられているので、むしろ、モンテニユの世界に近い」と指摘。「面白さ」では「信長」よりも上、とこれも高く評価する。『文芸読本 坂口安吾』に再録	信長 二流の人
1968年7月	肥田皓三・関井光男	解題	解説	定本坂口安吾全集3(冬樹社刊)	「いずこへ」について、新しさはないという伊藤藤之否定的な批評(『文学季刊』1947.12)のみ紹介し、安吾の自伝的小説の構想は「吹雪物語」執筆時から「胚胎していた年代記小説の編成にあったのではないかと推論。「石の思い」については、「おみな」よりも実像から離れた観念的な母が描かれているとし、「インド教の「梵我一如」と通じる精神作用だと述べる。「道鏡」についてもなぜか、中野好夫による「歪められた歴史小説の典型」(『群像』1947.4)という悪評のみ紹介。「二十七歳」に至っては、丹羽文雄による「うすみつともない自己弁護」(銀座出版社刊『私は小説家である』1947.11)という悪罵をとりあげ、それに半ば同調の意を示している。「オモチャ箱」についても同断。この第4回配本から解題執筆者として関井光男が加わっている	いづこへ 石の思ひをみな 道鏡 二十七歳 オモチャ箱 吹雪物語
1968年7月	瀬戸内晴美	安吾の碑	月報	定本坂口安吾全集3(冬樹社刊)	終戦で北京から引き揚げてまもなく「墮落論」に出逢い「目の前の幕が切って落されたような爽やかな感じ」を味わい、以来、安吾に熱中、「一番面白かったのは風博士で、一番、心に沁みだしたのは青鬼の禪を洗う女であった」という。青鬼の「女の透明な虚無感にたいそう親身なものを覚えた」そうで、「吹雪物語」も「何か胸につかえたような書きぶりも、行間から迫るものがあって何度も読みかえしたとある	墮落論 青鬼の禪を洗う女 風博士 吹雪物語
1968年7月	庄司肇	十三年目の安吾忌	月報	定本坂口安吾全集3(冬樹社刊)	「クラクラ日記」ドラマ化のパーティーのようだった安吾忌に嫌気がさして、『紀元』で安吾と交遊した丸茂正治と二人で離れた席にいと、「ゆつくりと大股」で歩き来たり歩き去った綱男少年の「あくまで醒めた静けさ」が「あの感じがそっくり、あれこそ安吾ですよ」と丸茂にささやかれたという話。庄司肇『坂口安吾』(1968)、同『坂口安吾論集成』(1992)に収録	
1968年7月	江口清	在りし日の安吾	月報	定本坂口安吾全集3(冬樹社刊)	『言葉』『青い馬』時代の回想。1955、56、65年に発表した回想文とほぼ同じ内容	
1968年7月	大岡昇平	思い出すこと	月報	定本坂口安吾全集3(冬樹社刊)	1931年、『文科』の集まりで小林秀雄、河上徹太郎、牧野信一らと一緒に飲んだのが安吾との出逢いで、翌年、京都では友人の加藤英倫の下宿を世話したこと、後に竹村書房の企画顧問ようになった安吾から「スタンダール選集」に誘われた話などを語る。大岡流の皮肉な調子はここでは鳴りを潜めて、むしろ好意を表している	
1968年7月	長田弘	青春の四つの構図	解説	全集・現代文学の発見14(学芸書林刊)	田宮虎彦「琵琶湖疏水」や檀一雄「花筐」など『自殺』をコロナとする青春」に対して、安吾の「暗い青春」では自殺に潜むロマンを「激越に否定して生きること」が示されるとする。「真珠」「古都」「孤独閑談」については、「どのようにも《生》を扱いつづけるだろう生活がその深みに夥しく沈黙させてゆくじつ々たる思想のかたち」と、詩的に批評	暗い青春 真珠 古都 孤独閑談
1968年8月	大岡昇平	歴史小説論	解説	全集・現代文学の発見12(学芸書林刊)	「二流の人」を「漫談風」と評し、史実を重視するよりも「自由に作者の解釈を加え、たとえ話を混ぜて、通説を引っくり返す」タイプの歴史小説とする。鷗外や、それ以前も露伴が「頼朝」で試みた手法だという。大岡自身の政治的側面からみた家康論も開陳して、安吾の「人間本位の歴史解釈の限界」を指摘する	二流の人
1968年8月	庄司肇	坂口安吾	単著	(南北社刊)	各誌に発表された「クラクラ」(1961)「風博士」のころ(1965)「吹雪物語」のまえに(1966)「吹雪物語」について(1966)「白痴」小論(1967)「戦後展望」(1967)「十三年目の安吾忌」(1968)「戯作について」(1966)と、書き下ろしで「戯作・断片」「百の触手をのばす軟体動物—あとがきに代えて」を収録。「戯作・断片」では、無頼派の呼称が彼らの繊細な本質をつかんでおらず、新戯作派の呼称も江戸趣味を想像させる点で気に入らないと述べる。以上各篇は庄司肇『坂口安吾論集成』(沖積舎 1992)に再録された	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1968年8月	梅原猛	ニヒリズムの系譜	解説	戦後日本思想大系3「ニヒリズム」(筑摩書房刊)	「墮落論」と「白痴」を収録する巻の解説。戦後、「天皇神の崩壊と共に、ニヒリズムは生じ」とし、その例として安吾と三島由紀夫を挙げる。「墮落論」について、戦前的な禁欲という「美風はもともと人間が弱いもので墮落しやすいためにもうけられた虚構である、と考える」ところから出発したとらえ、この思想が「敗戦の日本の若者にとって天啓」となったという	墮落論
1968年9月	坂口三千代	その後十年[その後の十年]	紙誌	自由	「クラクラ日記」ドラマ化について、シナリオが原作と掛け離れたものだったため何度も討論したという。「実在の登場人物を傷つけてはならない、坂口をおかしな人物にしてしまうのは耐えられない、私ばかりいい子になるのはつらい」この3点で戦ったという。「その後の十年」と改題して坂口三千代『安吾追想』、同『追憶 坂口安吾』、同『ひとりという幸福』に収録	
1968年9月	奥野健男	作家と作品—坂口安吾	解説	日本文学全集71「坂口安吾集」(集英社刊)	論旨は1966年の「現代文学の基軸」や当時刊行中の『定本坂口安吾全集』解説などと同じ。戦後「墮落論」から受けた衝撃に始まり、安吾の自伝的小説の記述を年譜に沿って案配する形で、作家の生涯をまとめたもの。1972年5月の豪華版にも再録	
1968年9月	(小田切進編)	坂口安吾年譜	解説	日本文学全集71「坂口安吾集」(集英社刊)	「戦争と一人の女」にGHQ検閲による大幅なカットがあった事実を最も早く指摘したものか。1972年6月の豪華版にも再録	
1968年9月	野口富士男	さかぐつつあん	月報	日本文学全集71「坂口安吾集」(集英社刊)	戦時中、『現代文学』同人たちが大井広介の家に入り浸って遊んだ折、大井は安吾のことを「さかぐつつあん」と呼び、安吾は大井を「あつさん」と呼んでいたと回想。当時の安吾は「言葉の丁寧な人で、五歳も年少の私にむかって決して乱暴な口はきかなかった」という	
1968年9月	大井広介	矢田津世子伝説	月報	日本文学全集71「坂口安吾集」(集英社刊)	『吹雪物語』のモデルは矢田津世子でなく、安吾の親戚の「素行の納まらない娘」だと安吾自身が語ったとあるが、大井のいう、作中で「呉服屋がさっと犯す」シーンに登場する娘は、矢田をモデルとした澄江でなく文子のことなので、大井は大きな勘違いをしている。ほかのエピソードも以前の大井の回想に既出	
1968年9月	頼尊清隆	思い出すままに	月報	日本文学全集71「坂口安吾集」(集英社刊)	「生命拾ひをした話」のエピソードや、『ろまねすく』同人会後の怪しげな焼酎の話、取手訪問の話など、頼尊のいつもの回想と同じ内容。最後に、「僕らがオーバーを着てもふるえている冬の最中に「今オーバーを質に入れて来たから酒を飲もう」と、さっそうと東京新聞まで誘いに来てくれたあのニコ顔を回想し、「最後まで精神貴族だった」と懐かしむ	
1968年10月	野口富士男	暗い夜の私	紙誌	風景	戦時中、『現代文学』の編集責任者だった野口が、矢田津世子に原稿依頼したことがもて、少し問題になったことなど回想。安吾が「二十七歳」で書いている話の実情。野口富士男『暗い夜の私』(講談社 1969)に収録	二十七歳
1968年10月	坂口三千代	空想する楽しみ	紙誌	ゴルフダイジェスト	桐生時代、安吾と太田のゴルフ場まで通ったことを回想。車に乗って行く1時間の間、安吾とは車中タバコを吸ってればよく、なんの気兼ねも要らなかったという。坂口三千代『安吾追想』、同『追憶 坂口安吾』に収録	
1968年10月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集4(冬樹社刊)	「決闘」「淪落の青春」を「墮落論」の小説化とみる最も早い批評など、全収録作に短評を付している。「三十歳」を自伝的連作の「頂点」とし、「異様に暗い迫力にみちて」しかも恋愛の本質を深くえぐった傑作と評価。歴史短篇「織田信長」も「坂口文学の代表的傑作」とし、「安吾の人生観、歴史観がまことに率直になまのまま語られて」といると批評。長篇「火」については、構成に破綻があるとして評価せず。奥野健男『坂口安吾』に加筆修正のうえ収録	決闘 淪落の青春 三十歳 織田信長 火
1968年10月	加藤秀俊	座談の文体—勝海舟と坂口安吾	解説	定本坂口安吾全集4(冬樹社刊)	二葉亭から始まる言文一致体は円朝などの「語りもの」の文体で、聴衆を意識した演技する話者のものだが、『海舟座談』で筆記された「談」はもっと親密で、話し手と聞き手に分かれていない。「安吾捕物」で「談」ずる海舟を登場させた安吾は、他の作品でも「談」の文体を多く使うと指摘。「金銭無情」や「安吾巷談」などを例に挙げる。権力の外にいた晩年の海舟と安吾の立場が似ていて、「談」ずる人は、一代ぼっすり、そして、ひとりぼっちで「自由自在、弟子をもったり教祖化したりすることはないと説く	明治開化安吾捕物 安吾史譚 安吾巷談 金銭無情
1968年10月	関井光男	解題	解説	定本坂口安吾全集4(冬樹社刊)	「決闘」については奥野と同様「墮落論」の小説化とみる。「三十歳」については、未完であった可能性を指摘するが、その根拠は曖昧。「二十七歳」「死と影」とともに、関井はこの自伝的作品系列を物足りなく感じているようす。この第5回配本以降はすべて関井一人の執筆となり、単なる「解題」を逸脱した独自の安吾論を打ち出そうとする強い野心がうかがえる	決闘 三十歳 二十七歳 死と影
1968年10月	福田蘭童	坂口安吾の裏ばなし	月報	定本坂口安吾全集4(冬樹社刊)	戦後、座談会などで知り合った安吾と、空手の道場や甲賀流忍術の藤田東湖の家を訪ねた折、安吾は東湖が自分の関節を抜いてみせるのを真剣に怖がったことを回想。その後の競輪事件前後の話については1956年の『続うわばみ行脚』と同じ内容	
1968年10月	関義	ペダンのタバ	月報	定本坂口安吾全集4(冬樹社刊)	アテネ・フランセの書籍部で新着本のポスターに関が書いたコピーを、葛巻義敏に褒められたのが同人誌に入るきっかけだったという。関は同僚の若園清太郎を誘い、それ以後、葛巻の家で深夜まで同人会を開いたことなどを回想。『言葉』創刊号に載った小説は関の1篇だけだったが、その掲載に安吾は「術学的」だと反対したことなど、他の回想にないリアルなやりとりが知れる貴重な資料	
1968年10月	きだみのる	坂口安吾のいたアテネ・フランセ	月報	定本坂口安吾全集4(冬樹社刊)	アテネ・フランセの歴史と創始者コット氏の業績を語るエッセイ。安吾は最後に少しだけ登場し、「彼はほくに薄い同人誌をほくに(ママ)渡した。それが「青馬(ママ)」だった。その中に彼の秀れた作品風博士が掲載されていた」とあるきり。きだ(山田吉彦)も同人名簿には入っているが、ほとんど関わっていないことがわかる	
1968年10月	立原正秋	「白痴」の美しさ	月報	定本坂口安吾全集4(冬樹社刊)	「墮落論」より先に読んだ「白痴」に感動、作品には「墮ちて行く人間の美しさがあった」という。特に女の尻肉をむしりとして食う幻想描写が衝撃的で、伊沢と女の淪落とともに、滅亡する国土の淪落も、重なり合って迫ってくると評価	白痴

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1968年10月	池田三四郎	山麓襟記	単著	(東峰書房刊)	「坂口安吾氏との出会い」の章で、1953年、松本の取材旅行に来た安吾が暴れて留置場に入れられた後の、8月6日から10日頃までの安吾の行状を回想している。松本の木工家だった池田は、姪が営む旅館に滞在した安吾と、毎晩「命がけ」で乱酔したという。生意気を書いて殴られた夜のこと、酒が入らないと紳士で優しく、夜中に見かけた孤独な子供へ心配りのお使いを頼まれたことなど、リアルに感情ゆたかに描かれていて読み応えがある。1980年に『山麓雑記』と表記変更された新装版が刊行された。『坂口安吾全集』別巻に収録	
1968年11月	亀井宏	織田作と安吾	紙誌	大阪文学	漱石や荷風に対する安吾の「理解の浅さ」と、安吾の小説の平板さを酷評。「なにもかもが、中途はんばで投げだされている」と印象批評	
1968年11月	大井広介	坂口安吾伝	解説	現代日本文学館27「梶井基次郎・中島敦・坂口安吾集」(文藝春秋刊)	大井執筆の安吾回想文は多いが、その中では最も長文の略伝。しかし、安吾と絶交中に先立たれた悔しさが前面に出て、他のどの時よりも怨み節の文章になっている。安吾が語った話を広範囲で紹介している点は伝記資料として貴重だが、そのすべてを嘔と決めつけているところなど扱いに注意が必要。ただ、毒舌の文章には激しい悲しみがにじんでいる。『坂口安吾研究』Ⅱに収録	
1968年11月	大井広介	解説	解説	現代日本文学館27「梶井基次郎・中島敦・坂口安吾集」(文藝春秋刊)	大井の選定になる安吾作品集の解説だが、「石川淳からの申し送りで、「いずこへ」だけはぜひいれるというのを尊重した」とある。「紫大納言」については「作品として完璧性を備え、坂口の愛着も深いとみられる」とし、「狂人遺書」は「安吾史譚」を経て深化した安吾独自の秀吉像を高く評価。「文学のふるさと」は「出色」の文学論で、安吾作品読解には欠かせない語り、「ラムネ氏のこと」については、開戦直前の時期に「こんなエッセイをかいてのけた人物があったのは、さわやかというほかはない」と賞讃	いづこへ 紫大納言 狂人遺書 文学のふるさと ラムネ氏のこと
1968年11月	無署名	坂口安吾スケッチ	月報	現代日本文学館27「梶井基次郎・中島敦・坂口安吾集」(文藝春秋刊)	「競輪事件」「狂人伝説」の2章立てで、事件の顛末と薬物中毒から入院に至る経緯などをコンパクトに過不足なく紹介している。坂口三千代『クラクラ日記』からの引用が多い	
1968年11月	荒正人	回想・昭和文学四十年	紙誌	東京新聞夕刊	戦争中、大井家でいろいろな遊びをしたが、探偵小説の犯人当てについては、初め安吾に誘われて行ったという。1945年には荒の「埼玉県久喜町の疎開先で、遮蔽幕のなかで」平野家や埴谷雄高らと行ったらしい。埴谷は安吾とは遊んでいないが、戦後は埴谷の家で『近代文学』同人たちと犯人当てを続けている。『荒正人著作集』2(三一書房 1984)、中公文庫版『不連続殺人事件』(2024)に抄録	
1968年11月	田辺茂一	プレイボーイ安吾	月報	日本文化私観〈復初文庫〉	安吾が戦後すぐの「文芸時評」で田辺の作品だけ数回にわたって褒めてくれた話、晩年『安吾捕物帖』出版をめぐる問題の仲裁に桐生まで訪問した話など、「安吾の酒」(1961)「わが伯楽」(1967)などと同内容。「枯淡の風格を排す」の精神を讃え、売れない頃は「蓬髪無残」な姿でも平然と新宿駅に立っていた安吾の姿に「ダンディを感じ」「いつも若い精神の持主」という意味で「プレイボーイ」であったと述べる	明治開化安吾捕物 枯淡の風格を排す
1968年11月	高橋旦	矛盾をなつかしむ	月報	日本文化私観〈復初文庫〉	アドルム中毒の折の安吾から「かえって師匠としての訓示」を受けることが多かったという。「この世の中で、いちばん偉いのは芸術家だ。そのつぎに偉いのは、ほんとうに民主的な人物だ。おまえは芸術家にはなれそうもないが、まさしく民主的な人物ではある。将来大をなすかも知れん」と褒められたことを回想	
1968年11月	佐藤忠男	解説	解説	日本文化私観〈復初文庫〉	どんな政治思想にもくみしない安吾はアナーキズムに近いとする。「日本文化私観」や「墮落論」では「一貫して、精神の虚飾を去れ、ということをお呼びつづけてきた」とし、そこから「もう軍備はいらない」と結びつける形で「軍備を放棄した日本こそ、安吾の考えでは一応「正しく墮ち」たといえるわけである」と、ややイデオロギッシュな結論に導く	墮落論 日本文化私観 もう軍備はいらない
1968年11月	坂口三千代	遺品	月報	日本文化私観〈復初文庫〉	安吾の朝起きてからの習慣が記され、坂口家に遺された遺品の数々が紹介されている。安吾筆の色紙や即興詩、年賀状、腹掛けデザインなどの裏話が知れる。坂口三千代『安吾追想』、同『追憶 坂口安吾』、同『ひとりという幸福』に収録	
1968年11月	佐藤忠男	解説	解説	新日本紀行〈復初文庫〉	収録作の時代背景を補足説明し、競輪事件や税金闘争にふれて、卑俗な問題であろうとも反権威主義を徹底させたと評価。逆に「弱者に対していかにやさしく、親身の同情を惜しまなかったか」を述べ、安吾の思想が「政治イデオロギー」とは無縁だったと説く	
1968年12月	坂口三千代	光琳梅	紙誌	美しいキモノ	向島の待合だった三千代の実家で、大みそかの騒然とした仕度のような正月のにぎやかな行事のようすなどを記し、競輪事件の折に一度だけ安吾も見て、呆れたのか興味深かったのか「女ざむらいたちは何を考えているのだか」と言っていたと回想。坂口三千代『追憶 坂口安吾』(筑摩書房 1995)に収録	
1968年12月	広末保	そのさまざまな試みについて	解説	全集・現代文学の発見11(学芸書林刊)	「日本文化私観」について、「無定形にして何ものにもとらわれまいとする」心意気を評価。本書収録作の小林秀雄「無常といふ事」と比較しながら、「教養主義的美意識」に対して「素朴な、しかしもっとも根底的なところから問いなおした」と論じる	日本文化私観

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1969年1月	矢島道弘	現代文学と所謂無頼派文学の接点	紙誌	文学者	矢島の1966年の論文2本と同種の内容。無頼派は戦後の荒廃を「天国」のような「逃避場」と見たと主張。「墮落論」は「戦乱の破壊を賛美」するものと説くなど、批判的ともとれる内容だが、矢島は無頼派が好きで、自らも「破壊」賛美者であるらしい	墮落論
1969年1月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集11(冬樹社刊)	同巻の関井の解釈と正反対で、安吾捕物には第1、2話が必要不可欠であり、初版で省かれたのは納得がいけないと出版社を断罪。「筋やトリックの組立て」の見事さには「数学的、理科的な才能」が感じられるといい、同時に明治の歴史や風俗の知識や教養の深さに驚嘆している。ただし、安吾にとっては「傍系のあらずもがなの遊び」であり、「もっと純文学作品を書いて欲しかった」と本音をもらしている。奥野健男『坂口安吾』(文藝春秋 1972)に加筆修正のうえ収録	明治開化安吾捕物
1969年1月	尾崎秀樹	戦後批判としての捕物帖	解説	定本坂口安吾全集11(冬樹社刊)	江戸時代の資料や岡本綺堂『半七捕物帳』などから「捕物帖」の定義や起源から説き起こし、捕物帖文学史と各作家の特色などを詳細に記す。謎解きよりも江戸や明治期の「人情世態をえがく風物詩」としての要素が強いジャンルにあって、「安吾捕物帖」は「白眉」であると絶讃。エンターテインメントの魅力も十分で、しかも「その可能性を拡大」したとする。新十郎と海舟と二段構えの推理構成については、「海舟の言葉を通して、開化期の世相をとらえ、さらに戦後の混沌とした時代相を二重うつしにする配慮ではなかったか」と読み解く。「つまり薩長も実質的には占領軍だった」という「安吾史譚」の言葉を引用しつつ、「新しい開化コーガイ談を創造した」と批評。尾崎秀樹『歴史文学論』(勁草書房 1976)に収録	明治開化安吾捕物 安吾史譚
1969年1月	関井光男	解題	解説	定本坂口安吾全集11(冬樹社刊)	綺堂の「半七捕物帳」がコナン・ドイルの影響下に書かれたように、安吾の捕物帖もドイル同様「推理小説の裡に「秘教じみた色合い」を含ませている」と指摘。また、生前の初版本未収録の第1話と第2話を実験的なもので失敗作だったと断じ、この2篇を除外することによって初めて、連載時のタイトル「安吾捕物」が「安吾捕物帖」に「昇格」できたとする。しかし、連載の最終話まで「安吾捕物」のタイトルであったことの説明にはならないし、連載中に発表したエッセイなどでは自作を「捕物帖」とも「捕物帳」とも呼んでいて、特に呼び名にこだわりはなかった。なお、この時点では書誌情報が不完全で、各版の冊数や収録作品数など間違いが多いので注意が必要	明治開化安吾捕物
1969年1月	田村泰次郎	「櫻」の時代	月報	定本坂口安吾全集11(冬樹社刊)	「青春坂口安吾」(1955)や「櫻のころ」(1965)と重なる内容の回想。安吾は喜怒哀楽のハッキリしたところがあり「一たび沈鬱におち入ると、そばにゐる者までがどういって彼に話しかけていいのかためらはずにはゐられないほどがっくりと肩を落とし、うつむいてしまふ」といい、『櫻』同人仲間の菱山修三は、そんな状態の安吾が訪ねて来ると「禪問答のやうな会話をにつづけて」元気を回復させてやったと伝聞を語る	
1969年1月	巖谷大四	坂口安吾氏のこと	月報	定本坂口安吾全集11(冬樹社刊)	巖谷が鎌倉文庫出版部に勤めていた1946年春頃、日本橋にいた安吾から原稿料至急入用との電話を受けたが、雑誌『人間』の編集者はすでに帰宅後で、巖谷が会計に無理を言って金を持参。安吾は巖谷が気に入り、新橋のバー「凡十」で「正真正銘の宝焼酎」を飲ませてくれたという。1950年からは河出書房に入社し、そこで『現代日本小説大系』への作品収録を拒否していた安吾の説得役を任せられ、訪ねるとすぐに許してくれたと回想	
1969年1月	林忠彦	思い出	月報	定本坂口安吾全集11(冬樹社刊)	1946年11月、銀座のバー「ルパン」で安吾と出逢い、1947年夏にゴミだらけの書齋に座る安吾を撮影したエピソードなどがリアルに語られており、貴重な回想。ただし、「忘れもしない」と書きながらも撮影した時期は誤っており、後に誤伝を流布させるもととなった	机と布団と女
1969年1月	大井広介	ある旅行の追憶	月報	定本坂口安吾全集11(冬樹社刊)	戦争中、『現代文学』同人たちは徴用逃れのため、大井の親戚が経営する九州の炭坑やその東京支社に勤めた。安吾も九州まで見学に出かけ、ラバウル帰りと嘘をついて工員を激励したり、大井の友人の特級酒をまきあげたりしたことなど回想。晩年、安吾と喧嘩別れした大井は、安吾の失敗談をコミカルに語りながら、時折うらみを混ぜた誇張があったりするので、全面的には信用できないが、同人たちの動向も含めて詳細に語られている点、貴重な資料といえる	
1969年1月	檀一雄	小説坂口安吾	単著	(東洋出版刊)	「小説坂口安吾」(1949&1955)「安吾・川中島決戦録」(1955)「東京創元社版『坂口安吾選集』解説」(1956～57)「反俗・求道の作家—坂口安吾小伝」(1966)「坂口安吾論」(1967)を収録	
1969年1月	奥野健男	無頼派の文学	解説	「坂口安吾・田中英光・織田作之助三人展」図録	図録の前書きとして書かれた推薦文。「日本文学史上、無頼派の活躍ほど人々に本質的な深い影響を与えた文学はほかにない」とし、現代でも「気鋭の文学者」だけが無頼派の文学を受け継いでいると説く	
1969年1月	関井光男	坂口安吾	解説	「坂口安吾・田中英光・織田作之助三人展」図録	展覧会展示写真27ページ分の下段に掲載された坂口安吾伝。後に完成する「伝記的年譜」(1971)と執筆態度は同じで、安吾自身の自伝的小説や書簡、友人らの回想文を引用しながら、その生涯を構成したもの	
1969年2月	長谷川泉	坂口安吾	紙誌	国文学	作家の文体を紹介する特集の一篇。「安吾の文章には、人間へのいとしさが充満している」とし、「そのいとしさを被虐的な破壊をもってはたした」と説く。安吾の文体はリアリズムではなく「笑劇的な要素と、説話的な要素とがある」と紹介	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1969年2月	鷲尾洋三	はるかな人々 13—坂口安吾と田中英光	紙誌	週刊読書人(24日)	文春の編集者として、安吾に小説を依頼すると、きちんと締切前に「女体」を書いて持参してくれたと回想。その後も「安吾巷談」の連載や芥川賞選考委員などで文春と縁が深かった安吾だが、1949年の辻亮一「異邦人」に芥川賞授賞の折、特殊な題材で将来性は疑問などと半数以上が迷っていた中、安吾が熟っぽく作品のよさを力説、「かりにこの作品一つで消え去る作家であつても一向構わぬではないか、と言いつつ切った」。五味康祐と松本清張の同時授賞の折も、佐藤春夫と安吾の2人が熱心に推して決まったという	女体 芥川賞選後評 安吾巷談
1969年2月	石川淳	安吾のいる風景	解説	現代日本文学大系77「太宰治・坂口安吾集」(筑摩書房刊)	1956年6月発表のエッセイ再録	
1969年2月	檀一雄	坂口安吾私論	解説	現代日本文学大系77「太宰治・坂口安吾集」(筑摩書房刊)	1967年11月に発表された「作家論」の再録	
1969年2月	花田清輝	動物・植物・鉱物	解説	現代日本文学大系77「太宰治・坂口安吾集」(筑摩書房刊)	1949年1月発表のエッセイ再録	
1969年2月	平岩八郎	思い出すこと	月報	現代日本文学大系77「太宰治・坂口安吾集」(筑摩書房刊)	東京新聞の記者として無頼派の作家たちと接した折のことを回想。安吾については「花妖」連載時、小説の内容も挿し絵も「冒険をあえてしたい」青年記者たちの客気があったことを伝え、しかし販売面から中断を余儀なくされたと記す	花妖
1969年2月	小川徹	安吾復活	月報	現代日本文学大系77「太宰治・坂口安吾集」(筑摩書房刊)	戦前の作品群および「白痴」から「ジロリの女」に至る女性像の変遷を探り、「白痴型に対してはサド的であった彼が、ジロリ型に対してはマゾ的になった」として、「そこには母親をふくめた五〇年間のジロリの女との闘いの総決算があるのではないかとみる。「安吾復活・白痴型とジロリ型」の題で小川徹『墮落論の発展』に収録	白痴 ジロリの女
1969年3月	小田切秀雄	坂口安吾「白痴」	紙誌	教育国語	国語教育の雑誌へ寄稿されたもので、学校の先生向けテキストになっている。長い引用をしながら「白痴」の内容を丁寧に追ひ、作品が書かれた時代背景、とくに戦後派文学との共通点や相違点なども解説。文学史的な位置づけに注意を払っているため、1947、48年に激しく安吾を攻撃した同じ小田切のペンとは思えないほど客観的。ただし、論の最後で、「白痴」のラストへの不満を述べ、戦後の人々のこれから先について「ほり下げを進めるにいたっていない」と苦言を呈している。小田切秀雄『戦後文学作品鑑賞』(読売新聞社 1971)、『坂口安吾研究』Ⅱに収録	白痴 墮落論
1969年4月	増田和利	坂口安吾 健康なる「自我」の追求者	紙誌	大阪文学	「デカダン文学論」について、「坂口安吾の健康さは、漱石が暗い「我執」の沼に自己を溺れさせないために必死に身もだえした精神の劇に全く関知しないところからきている」とし、安吾のいう「自我」は「人間の本来の自由」であるために、「あらゆる倫理に気兼ねする必要はなく」それゆえ健康であると説く。「家」というものの「強靱な影響力から自己を遠ざげることが彼の「自我の発見の途」であったといい、「文学のふるさと」や「日本文化私観」の中の「家に就て」「青春論」などをその延長に置いて考察	デカダン文学論 文学のふるさと 日本文化私観 青春論
1969年4月	吉田定一・八橋一郎・法橋和彦・小寺正三・清水正一・河原義夫	座談会「無頼派について—太宰治・織田作之助・坂口安吾を裸にする」	紙誌	大阪文学	無頼派の呼称が気に入らないと口々に言い合い、日本には無頼派なんていないと言い出す。彼らはみなモラリストだったと述べるあたりは首肯できるが、無頼漢と同義で話しているのが、議論自体が不毛。安吾の小説は「わかりにくいし、下手ですね」と吉田が言い、女性に受けないだろうと八橋が指摘。小寺だけは、「下手」には同調しつつも「散文精神」の高さと「深いニヒリズム」がある文章だと高く評価している	
1969年5月	関井光男	『吹雪物語』について	紙誌	無頼派の文学	「矢田津世子との恋の清算のみを祈願しつつ『吹雪物語』の構想を立てたとする従来の見方」を批判。安吾の場合、「現実よりも先にまず文学＝空想が先行」するとし、芸術家の「冷然たる姿」を見よ、と説く	吹雪物語

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1969年5月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集5(冬樹社刊)	税金闘争や競輪事件は安吾にとって「卑劣な現実との必然的な衝突」であったが、「風車に突撃するドン・キホーテ的な滑稽さとかなしさがある」と述べる。これにより、この時期は小説から遠ざかるが、「陰には、文学者として自己へのいらだちに似た怒りと絶望があったのではないかとみる。安吾の長篇小説は「はじめから作者がストーリーを決定することを拒否している」から、全体の構成は破綻してしまうとし、「街はふるさと」も同断の失敗作であったと批評。この「衰退」の時期に発表された作品では、ファルス連作「落語・教祖列伝」が五味や柴田らの「剣豪小説の先駆であり、はるかにそれより徹底した茶番であり、数等勝っている」と評価する。「夜長姫と耳男」は「桜の森の満開の下」と並ぶ「安吾文学の最高峯」と絶讃、これにより安吾は「再び文学への自信を得た」とみる。その後の「幽霊」「輸血」「犯人」「梟雄」などを傑作として推奨している。奥野健男『坂口安吾』に加筆修正のうえ再構成して収録	街はふるさと 落語・教祖列伝 夜長姫と耳男 幽霊 輸血 犯人 梟雄
1969年5月	瀬沼茂樹	作家論	解説	定本坂口安吾全集5(冬樹社刊)	初期の「FARCEに就て」には「二六歳で獲得した自己の文学への自覚の深さ」が窺われ、観念的な初期の小説群も「オリジナリティの秀抜さと澆刺としたエスプリの生動とを感じ、爽快」と評価する。戦後作品では「女体」や「恋をしに行く」などに「生命の根源への回帰が希求されている」と高く評価。「金銭無情」などの滑稽小説には「作者の仏頂面しか見えず虚しいと評し、その反作用のように「清冽なロマンスに純情のただよう」自伝的小説群が書かれたとする。最も成功した作品は「人間認識と文明批評とに裏づけられ、その得意の推理力と想像力とを自在に駆使する」歴史小説や説話作品であったと批評。後年は「マス・コミの商策に走って」推理小説やエッセイ、ルポなどに「才能を濫費した」と否定的にみる	FARCEに就て 女体 恋をしに行く 金銭無情 信長 夜長姫と耳男
1969年5月	関井光男	解題	解説	定本坂口安吾全集5(冬樹社刊)	伊東時代から桐生転居後までの小説を収めた巻であるが、この時期のエッセイ「安吾巷談」「墮落論」に比肩するとして、収録作でない「安吾巷談」の魅力を延々と説く。その文体は「〈夢想的真質〉の円熟した営為によって」「架空凝視をほとんど完全にFarce(道化)の世界に収斂しているのだ」と結論づけているが、主張の意図や内容は判然としない。収録作の長篇「街はふるさと」については、「「救い」を主題としながら」「「救い」を止揚できず、俗物の再出発で終わっている。この作品の限界はここにある」と否定的に述べる	安吾巷談 街はふるさと
1969年5月	海老原光義	「日本文化私観」の思い出	月報	定本坂口安吾全集5(冬樹社刊)	戦争中「時代から脱出する「淪落」の思想をひっさげて奇蹟のように世に出た』『日本文化私観』や雑誌『現代文学』発表の安吾作品のとりこになり「たのしい代弁者を見出した」思い出を綴る。海老原は戦後、『中央公論』の編集者として真っ先に安吾に原稿依頼した	日本文化私観
1969年5月	桜井幸男	安吾母校で語る	月報	定本坂口安吾全集5(冬樹社刊)	1947年6月中旬、東洋大学で学生たちが実存主義研究の公開講座を企画し、安吾にも講師を依頼したことを回想。安吾は「日本文化私観」や「墮落論」について1時間ほど話し、桜井が政治と文学の関係について質問すると、「文学は制度への反逆であり、逆説です」と答えてくれたという	
1969年5月	細川忠雄	あちらこちら命がけ	月報	定本坂口安吾全集5(冬樹社刊)	読売新聞で春秋の2期、文壇ゴルフを主催していた時代、文化部長だった細川は川奈での開催時に獅子文六や桐生の安吾を招待した。その何カ月か後にも、小林秀雄と安吾とを都内の東雲ゴルフ場へ案内したとき、安吾のゴルフは全くの初心者だったが、「一度だけひどい逆風の中で、彼のティ・ショットが、二五〇ヤードは飛んだ」という	
1969年5月	小川徹	安吾と女性	月報	定本坂口安吾全集5(冬樹社刊)	「安吾は処女を知らなかったのではないだろうか」という俗な話題に始まり、おもに「母の上京」のモデル探索を行う。この作品に限らず、お安さんとその妹の関係が投影されていると論じ、小説の中で戦前の方がモデルになっていれば戦前の話だろうと推定していくやり方は牽強附会。「文学のふるさと」で、狼に食われる赤ずきんの話が出てくるのは、安吾の「母親への恐怖のイメージがよほどつよかったから」とする説も説得力はない	母の上京 文学のふるさと
1969年6月	庄司肇	滑稽小説について	紙誌	関西文学	「西東」を「風博士」に匹敵する傑作と評価し、初期のファルスとは違う「後年の滑稽小説の先駆をなす作品」とみる。その要諦は「微妙な一線で常識から外れ、そのわずかの落差によって纏綿たる笑いをただよわせる態のもの」という。主要部を会話文だけで通した文体実験や、ラストで主人公から作者にも読者にも自在に变身してみせる「たぐい稀なる天性」を讃える。庄司肇『坂口安吾論集成』(沖積舎 1992)に収録	西東
1969年6月	亀井宏	坂口安吾補遺	紙誌	関西文学	「織田作と安吾」(1968)で安吾を否定的に書いたが、安吾のエッセイは嫌いではないと弁明。小林秀雄との対談で安吾が「ドストエフスキイという作家は、結局無学だったから正しい心を維持できた」と述べたのが「かまえないわば無心の言葉」でよかったと褒める。本誌6月号の発行日は5/1	
1969年6月	清水信	坂口安吾論	紙誌	関西文学	自筆原稿が発見されるまでの『吹雪物語』の伏字箇所を大量に引用し、「恋愛論小説」として「非常に秀れたもの」と高く評価。「ドラマに係わる老人を配した」点が非凡で、「老人たちの死と共に、この特異な小説が終りを告げるのは当然」と説く。また、小説内に「詩や戯曲やエッセイやが混然とまじっている点、「ディスカッション・ドラマ」のような箇所、文学論や寺院建築論の挿入など、「現代小説の先駆のような要素」があると緻密に分析している	吹雪物語
1969年6月	野口富士男	深い海の底で	紙誌	風景	戦時中、野口は『現代文学』の同人で、しばらく編集責任者も務めたが、安吾から不信任案が出ていたという大井広介の証言は「ニュアンスが違っているように」思うと回想。野口富士男『暗い夜の私』に収録	
1969年6月	無署名	真珠—文学神奈川地図	紙誌	神奈川新聞(17日)	「真珠」は「批評的な私小説」で、「独得の死生観」が語られているとして、あらすじを紹介	真珠
1969年6月	山田尚子	坂口安吾論—『墮落論』への道	紙誌	日本文学(立教大学日本文学会)	『吹雪物語』執筆時の京都の暮らしぶりに、「青春論」で説かれたような「淪落世界」があり、安吾はその中で「判然とした火」が自分の中にあることを強く意識したのではないかとみる。そこには「文学のふるさと」につながる「絶対の孤独」の認識があり、それがそのまま「墮落論」の主張へ通じていると説く	古都 青春論 文学のふるさと 墮落論
1969年7月	野口富士男	真暗な朝	紙誌	文芸	戦後、『文芸時代』同人会で再会した安吾は「テーブルをドンと叩いて、「文学は気合いだ」と言った」という。しかしその後、大地書房の廊下でバッタリ倒れた時には、昼間から泥酔して恥ずかしそうにしており、数日後、九段の待合から福田恒存と寄せ書きのハガキを送ってくれたと回想。野口富士男『暗い夜の私』に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1969年7月	かじてつや	現代文学者の病蹟	紙誌	中外医薬	安吾の鬱病について、自殺の意志や罪の意識がない病症は珍しいとし、「案外小心律儀な一面をもち、傲慢なひねくれ者というところで、自己中心的にすべてを恣意的に合理化し、小児っぽい弁解をしたり、意地を張り通したところはヒステリー性格に最も近い」と分析。「その韜晦の巧みさは天賦の才」など悪意に満ちた主観を述べる	
1969年7月	大岡昇平	昭和文学への証言	単著	(文藝春秋刊)	「坂口安吾」の項に、「放浪者坂口安吾」(1951)と「京都の頃」(1957)を収録	
1969年8月	(岡本功司企画)	尾崎士郎 書簡筆滴	単著	(インパルス刊)	尾崎士郎の書簡集。安吾宛のものは『坂口安吾全集』第16巻(筑摩書房 2000)にすべて収録されているが、それ以外にも尾崎一雄宛などで安吾と飲んだ話や安吾の精神状態が不安定な時期のようすが語られている	
1969年10月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集8(冬樹社刊)	戦後のエッセイでは「私は誰？」を推し「安吾のみなしく切ない魂の絶唱」とみる。「安吾巷談」の頃からエッセイやルポルターージュが多くなったのは、競輪事件なども影響したが、「小説にスランプを感じ、人生に虚しさをおぼえていた」ためと考察。そのため「安吾人生案内」などのように「ジャーナリズムサービスし過ぎて、つまらない仕事」になったという。晩年の「明日は天気になれ」は「安吾の博識と好奇心と洞察力の集大成」と讃え、「短文ながらひとつひとつパンチが利いて小気味よい」と批評。奥野健男『坂口安吾』に加筆修正のうえ収録	私は誰？ 安吾巷談 安吾人生案内 明日は天気になれ
1969年10月	松本清張	作家論	解説	定本坂口安吾全集8(冬樹社刊)	安吾は世にいう「破滅型」作家ではなく、その社会批評などでの視点は「石川達三氏に近い」とみる。歴史小説や推理小説を多く書く点など、清張自身の「興味あるところと似ている」と感じ、会うことのなかった先輩を兄事する温かい文章。ただし「明治開化 安吾捕物」は評価していない	
1969年10月	関井光男	解題	解説	定本坂口安吾全集8(冬樹社刊)	この巻では珍しく解題の本分に徹して、独自の批評を述べていない	
1969年10月	高橋幸一	断片的回想	月報	定本坂口安吾全集8(冬樹社刊)	『言葉』『青い馬』の同人仲間で、蒲田の坂口家に泊まった時のようすなどが詳しく語られた回想。安吾が語る、人間が裏返しになることを想像する話や、新潟の実家に尾崎紅葉が泊まった時に不作法だった話、ソプラノ歌手宮川美子やアテネフランセの生真面目で清楚な美女が好きだった話など、ここだけのユニークなエピソードが多い	
1969年10月	島田昭男	ふたりの手紙のことなど	月報	定本坂口安吾全集8(冬樹社刊)	「安吾巷談」にある、田中英光が熱海で執筆中の安吾を訪ねて酒を飲みつづけた話の、時期についての疑問を提示。太宰入水直後の6月13～15日という説、15～19日の間の3日間という説を紹介し、その折、安吾と英光が太宰宛に書いた手紙から、安吾の生への強い執着が読みとれるとして、「青春論」や「不良少年とキリスト」を引用。ただ、「安吾巷談」中に、太宰の話が全く出てこないのは不思議だとも記す。安吾のそばで英光が飲みつづけたのは、実は前年のことだった可能性を『坂口安吾大辞典』(勉誠出版 2020)の年譜で七北が初めて指摘するが、島田の疑問提示はここに至る第一歩であった	安吾巷談 青春論 不良少年とキリスト
1969年10月	保昌正夫	「風」の安吾	月報	定本坂口安吾全集8(冬樹社刊)	1969年2月、無頼派三人展(織田・英光・安吾)が新宿伊勢丹と、大阪の阪神百貨店で巡回開催され、「花の下には／風吹くばかり」の色紙(現在、所持者不明)も展示されたらしい。他にも、矢田津世子宛書簡を見ると、活字では伝わらない安吾の「溢れてやまぬうったえ」が実感され、牧野信一による安吾推賞文(当時の新発掘資料)からは改めて牧野文学との類縁が確認されたとする	
1969年10月	磯田光一	解説—人と作品	解説	墮落論(角川文庫)	「FARCEに就て」において、すべてを「全面的に肯定する広大な思想を確立」し、「文学のふるさと」では「人間の“救いのなさ”と“絶対的孤独”から文学が生まれることを安吾が説いたと紹介。両エッセイを統合する視点で「人間は偉大であるとともに卑小な存在であり、彼はそういう人間の姿を永遠の相の下に見つめている」と磯田はまとめる。「日本文化私観」も「墮落論」も、単なるモラルの否定とか進歩主義思想などとは一線を画し、「日本人の現実を、あるがままの姿で受容する態度」、「虚飾を捨てて人間の本然の姿に徹せよ、ということ」に重点があると、わかりやすい言葉で紹介している。磯田の本稿のほか、巻末年譜と檀一雄「作品解説」も初版(1957.5)のまま収録されている。角川文庫版『道鏡・狂人遺書』(1970)の作品解説と共に磯田光一『悪意の文学』(読売新聞社 1972)に再録	FARCEに就て 文学のふるさと 日本文化私観 墮落論
1969年11月	花田清輝	解説	解説	日本の文学63「坂口安吾・織田作之助・檀一雄集」(中央公論社刊)	「青春論」や「安吾史譚」で安吾が相当な共感をもって紹介した勝夢酔の無一文で放浪する姿を詳説し、安吾の姿を重ね合わせている。加えて、大岡昇平が「放浪者坂口安吾」(1951)などで語った批判的な安吾像には、大岡の批評家としての「限界」が逆に透けて見えると全否定してみせる	青春論 安吾史譚
1969年11月	無署名	新戯作派について—現代文学の流れ69	月報	日本の文学63「坂口安吾・織田作之助・檀一雄集」(中央公論社刊)	「新戯作派」の名称は1946年に林房雄が命名したという伝聞事項を記し、このような括りは「これらの作家たちのより本質的な部分を切り捨てなければ」成り立たないと異を唱える。また、彼らは「みずから破滅の道をいそいだ」と、やや否定的にみている	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1969年11月	坂口三千代・織田昭子・檀一雄	夏の夜の打明け話	月報	日本の文学63「坂口安吾・織田作之助・檀一雄集」(中央公論社刊)	檀が安吾の豪快な面を強調し、伊東に訪ねていくと「血まみれになって」「犬と大格闘の最中でね」とか、川中島の取材旅行での酒乱に近いようす、安吾服を考案した笑い話など紹介。織田は無頼派座談会の後、安吾と太宰が「暴風のように」オダサクの泊まる旅館を訪ねて来たことを話す。三千代は安吾が躁鬱気質だったことや「原稿を書き出すと、何日も何日もこもりつきりで、書きあげると、ふっといなくなったり」といった仕事のしかたを紹介。坂口三千代『安吾追想』に収録	
1969年11月	読売新聞社文化部	戦後文壇事件史	単著	(読売新聞社刊)	「坂口安吾の「墮落論」」の項で、安吾は戦前から変わらぬ思想を「墮落論」でも披歴しただけなのに、戦後脚光を浴びたのは「異端者が正統になった」ということだととらえる。「坂口安吾と伊東競輪」の項では、競輪事件の経過を記し、静岡県自転車振興会専務理事・栗田旨平の談話として「坂口さんは第四コーナーの“さしこみ”が見えない場所にいたため、それまでトップだった選手が、そのままゴールインしたと見えたらしい」と記す	墮落論 競輪事件顛末記
1969年11月	浅田晃彦	坂口安吾桐生日記	単著	(上毛新聞社刊)	1966～67年に発表した「童話の眼」「金魚」「安吾と犬」「狂人遺書」「友情無頼(「坂口安吾桐生日記」改題)」を収録。安吾に対する辛辣な見方も随所にある作品集だが、「あとがき」では安吾が自分の小説の添削してくれたことへの感謝の気持ちを述べ、「とにかく振幅の大きい、男性的魅力に富んだ人だった」と回想	
1969年11月	朝日新聞前橋支局	上州の文学紀行	単著	(煥乎堂刊)	「坂口安吾」の項で、桐生転居後の安吾の事跡をたどる。安吾が酔って暴れたとされるカフェー・パリスの中村千代子さんと南川潤夫人の談話もあり、ふだんは「はにかみや」で「とってもいい人」「案外神経の細い人」だったという印象で一致	
1969年12月	野口富士男	暗い夜の私	単著	(講談社刊)	文壇回想録で、安吾については、既発表の「暗い夜の私」(1968)「深い海の底で」(1969)「真暗な朝」(1969)を収録	
1970年1月	吉田恵美子	「白痴」小論—坂口安吾における戦後の出発点	紙誌	近代文学研究(法政大学日本近代文学研究会)	「白痴」は「戦後文学の出発点」であることを強調し、「「白痴の女」という観念」をめぐる、主人公伊沢の心が右に左に揺れ動く、それは安吾自身の心でもあったらうとみる。そうした肯定と否定の「危っかしいバランスの上に独自の美しさを保っている」と、独特な視点で評価する	白痴
1970年1月	磯田光一	無頼派の聖地希求—戦後の異端の文学	紙誌	国文学	「無頼派作家の多くが、その出生において“家”または“母”から何もかを拒まれていた点」を指摘し、彼らが「家庭の破壊者」に見える時でも、それは単なる反逆などではなく「聖地としての家庭」が希求されている、と鋭く分析。その心情は「“正統”の喪失を代償とした、異端者の“正統”希求の心ということもできる」と批評	
1970年1月	奥野健男	文学における無頼とは何か—無頼派を中心に	紙誌	国文学	無頼派の中心作家として安吾・太宰・織田・石川とともに伊藤整を挙げるのが特徴的。北原武夫、花田清輝、三好十郎、武田泰淳ら多数の作家を無頼派「周辺」と位置づけるのも奥野流といえる。中心作家たちが皆、昭和10年代から活躍した中堅であり、前衛的すぎて主流になれず、一部の熱狂的なファンを生んでいたと解説。「私は無頼派(リベルタン)です。束縛に反抗します。時を得顔のものも嘲笑します」(太宰「返事」)という宣言が、彼らの姿勢を端的に表すとする	
1970年1月	磯貝英夫	無頼への意識—昭和十年代の反逆児	紙誌	国文学	葛西善蔵を頂点とする破滅的私小説の系列から、諧謔の要素を入れた宇野浩二、牧野信一が現れ、安吾が続くという文学史の系譜が考えられるとする	
1970年1月	関井光男	ファルススの奔馬・坂口安吾	紙誌	国文学	「てのひら自伝」の中で、円盤投げの円盤や槍で危うく死にかけた体験が語られるが、「幻覚であった」可能性もあり、少年時代から安吾は発狂したことがあったのではないかと推測する。安吾文学を精神病の所産とみる視点は他にもあるが、文芸評論家の立場でこれを語るのは極めて異例	てのひら自伝
1970年1月	坂口三千代	乱歩サンとのおつきあい	月報	江戸川乱歩全集10(講談社刊)	安吾から探偵小説の「手ほどき」として、江戸川乱歩の「二銭銅貨」「一寸法師」などを読むよう薦められたという。「不連続殺人事件」で探偵作家クラブ賞を受けた時、安吾は「大変うれしそうであった」と回想。乱歩とはあまり会わなかったようだが、安吾が「心の近くにいるひと」の一人であったとみている。坂口三千代『安吾追想』、同『追憶 坂口安吾』に収録	不連続殺人事件
1970年1月	奥野健男	解説—求道と破戒の中で	解説	わが人生観11(大和書房刊)	収録作の「我が人生観」について、薬品中毒で錯乱状態にあった期間のエッセイだが「完全に健康的、常識的であり、しかも鋭い論理力、洞察力」で書かれていると批評。「日本文化私観」から「墮落論」、それ以後のエッセイまで、すべてつながっており、「ほとんどパセティックな、八方破れに見える発言の正しさ、予言性に驚く」と述べる	我が人生観 墮落論 日本文化私観 青春論
1970年2月	奥野健男	鑑賞	解説	日本短篇文学全集26「宇野浩二・牧野信一・坂口安吾集」(筑摩書房刊)	安吾については「改めて論じる必要はあるまい」として簡単に収録作品を紹介し、大衆的にはマイナーな宇野浩二と牧野信一を中心に述べている。2人が安吾の初期作品を絶賛したことは、つまりその小説観や発想の点に共通するものがあり、特に牧野は安吾の「爽快なファルスに己れのなし得なかった無限の可能性を見出したのであろう」と述べる	白痴 桜の森の満開の下 鉄砲

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1970年2月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集9(冬樹社刊)	「安吾巷談」は安吾が戦中から披歴してきた「一連の世相小説やファルス」の延長線上に自然に書かれたものであるとする。「何ものをも顧慮せず、遠慮せず、自分の観察を、見解を堂々と発表」できたのは安吾だけだったといい、「通俗をおそれぬ品格と志の高さ、人間の大きさ」によるものとみる。「安吾の新日本地理」は「日本歴史の秘密を探る旅」であり、これほど「野心的なルポルタージュ」は安吾以後書かれていないと評価。奥野健男『坂口安吾』に加筆修正のうえ収録	安吾巷談 安吾の新日本地理
1970年2月	尾崎秀樹	空間と歴史の座標軸	解説	定本坂口安吾全集9(冬樹社刊)	「安吾新日本風土記」では、たとえば宮崎の地で、八紘一宇の塔が戦後は平和の塔と改称されたことの危うさを述べるくだりで「単なる社会批判をこえて歴史批判となっているすどさ」を指摘。「風土記」全篇がこの視点で貫かれ、神話から現代、「未来への見取図さえ暗示され」「おまけに全体がなまぐさいほどの人間臭でいろどられている」と賞讃	安吾新日本風土記
1970年2月	関井光男	解題	解説	定本坂口安吾全集9(冬樹社刊)	「安吾巷談」は「文明批評のパターンを形成」し、また安吾の「ファルス精神の変貌(成熟)として意味深い文学的冒険」であったと評価。「安吾の新日本地理」については、渡辺彰が安吾生前の年譜で「安吾新日本地理」としたので、タイトルはそれにならったとし、しかし同年譜で「ライフワークとしての安吾歴史の序章をなすもの」と記されたのに対して「それほど画一的な構想はこの評論には見られない」と反論。地理より歴史が優位になっている点には同調し、「飛鳥の幻」などで「日本神話の虚構を垣間見せること」には成功したが調査不足だったとし、「彼の夢想が優位性を発揮」しているのは「飛驒・高山の抹殺」や「飛驒の顔」であるとする	安吾巷談 安吾の新日本地理 飛驒の顔
1970年2月	吉行淳之介	田園ハレムのこと	月報	定本坂口安吾全集9(冬樹社刊)	戦後、20代の吉行は無頼派作家に最も惹かれ、「安吾巷談」の中で延々とケロリン礼讃の辞を述べ立てる自在さに「ユーモアと文明批評と、なによりも教祖的風格を感じた」という(ケロリンが出てくるのは「安吾新日本風土記」で、礼讃でなく逆に揶揄している。「巷談」で礼讃しているのは覚醒剤ゼドリン)。同じく「巷談」の「田園ハレム」では、新小岩の娼婦地帯「東京パレス」を教えられ、「半分は安吾の魔術にかかった」感じて通ったそう	安吾巷談
1970年2月	桜井幸男	「坂口安吾」と「松之山」	月報	定本坂口安吾全集9(冬樹社刊)	「教祖の文学」に、1931年頃、小林秀雄と安吾がたまたま上野駅で出逢い、越後川口まで同じ列車内で飲んだ話が出てくる。越後川口には安吾の姉のアキが古田島家に嫁いだが、甥の古田島昭五によると、当地へは安吾は数回しか来ていないらしい。これは松之山の村山家で仏事があったのに向かった時のことだと、安吾の甥村山政光の証言で判明したと記す。松之山を舞台にした安吾作品の数々を思い浮かべながら、ゆかりの地を旅して景観などを記している	教祖の文学
1970年2月	東郷克美	坂口安吾と太宰治	月報	定本坂口安吾全集9(冬樹社刊)	「無頼派」の括りに異を唱え、安吾と太宰はあらゆる面で正反対だったと説く。観念的で「現実的なものを峻拒した」安吾と、現実への求愛を続けた太宰、という見方で、そのテーマ設定にやや無理がある。そのため「安吾は生涯、故郷と家を憎悪しつづけた」と主張するなど、一面的・表層的な批評に終わっている	
1970年2月	伊東一夫	「墮落論」について	紙誌	東洋大学国語国文学会編『近代文学研究』17	「墮落論」は「逆説的な発想に妙味」があり、その発想の根本には「安吾らしい実存の立場がはっきりと示されている」と評価	墮落論
1970年3月	奥野健男	解説—人と作品	解説	白痴・二流の人(角川文庫)	失敗作の多い作家、と安吾を規定した上で、ただしその失敗は、従来の小説の枠に収まらない巨大さを秘めているゆえであり、失敗作も含めて「安吾の文学は未来への文学的可能性の宝庫である」と説く。霊肉相剋など様々な二元対立のテーマを含み、その「全的統一をめざす」ために狂気となるほど苦闘したとする	
1970年3月	三枝康高	作品解説	解説	白痴・二流の人(角川文庫)	収録作について簡単に紹介したあと、安吾の全体像として「壮大な虚構精神」と「強烈な自己否定と一種独特な求道的態度」の二つを見ることができると説く	
1970年4月	坂口三千代	ふるさとと私	紙誌	朝日新聞(3日)	談話筆記の形式で、銚子の海の思い出を語っている。生まれてから3歳までと、関西から戻った小学3年から女学校までを銚子で過ごし、「南国的な荒っぽい海」を安吾に自慢すると、「それなら銚子に住んでみようか、といったこともあった」と回想。坂口三千代『追憶 坂口安吾』に収録	
1970年6月	矢島道弘	「無頼」派の意味再考—織田作之助・太宰治・坂口安吾を中心に	紙誌	無頼派の文学	林房雄による「新戯作派」の命名に始まり、「無頼派」の呼称がいつ頃から使われ始めたかを検証。太宰が自作の中で何度か「無頼派(リベルタン)」と使ったのが始まりだが、広く使われるようになったのは、安吾没後、臼井吉見「無頼派の消滅」が「明確に概括した最初」と考えられ、続く奥野健男の『太宰治論』で広まり、急速に「無頼派」の呼称が優勢になったとする。呼称の研究としては最も早く、網羅的にまとめられた見解といえる	
1970年7月	丸茂正治	同人雑誌	紙誌	文学界	自身を加茂正六の仮名で描いた自伝小説。隠岐和一の誘いで『紀元』同人になり、『桜』の講演会に行った日のことなどを回想。「角三つある鬼になれ」(1967)との重複は多いが、楽屋での安吾や牧野信一らの出で立ちや言動が活写されており、小説ではあるがここだけで知れる貴重な証言が多い。銀座のきゆうべるで『紀元』の誌名についての意見を出し合った折、中かが「白痴」「人間万歳」などの案を出した話など、これまで不明だった点が補える	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1970年7月	小林信彦	深夜の饗宴 坂口安吾	紙誌	エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン	中学生の頃から同時代で活躍する安吾のエッセイのファンで、小説では『不連続殺人事件』を愛読したという。『現代の文学22「坂口安吾集」』(河出書房 1966)で再読したところ、解説者が冒頭で犯人をバラしていたのは重大なルール違反と怒る。江戸川乱歩が不満点とした「サスペンスのなさ」と「こわさのなさ」こそが、実は「ファース」としてのよきであるとする。コミカルで奇妙な人間たちを描くことで「全体の不自然さがさらに柔らげられている」と。エッセイでも「帝銀事件を論ず」や「フシギな女」など、「推理の標準がびたりと合った」論旨展開を高く評価する。小林信彦『東京のロビンソン・クルーソー』(晶文社 1974)に収録	不連続殺人事件 帝銀事件を論ず フシギな女
1970年7月	川嶋至	理論先行型作家の実体—坂口安吾論	紙誌	季刊芸術	「坂口安吾はきわめて理屈の多い、いわば理屈先行型の作家である」といい、理論のために事実をねじまげることが多いとする。作品どうして食い違う「事実」を例証してみせるが、読み方の違いでどうともとれる感情表現を例に出されても説得力はない。むしろ「安吾に虚名をもたらした「墮落論」における安吾イズムの根幹は、「人間は変わるものだ」という思想であった」という偏った断定から理論を展開する川嶋のほうが「理屈先行型」と思われる。安吾のことを女性差別意識の強い、洞察力に欠けた作家とみており、「墮落論」もいづれ忘れ去られると予言する。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	墮落論 二十七歳 青春論
1970年7月	石川弘	安吾の人生	紙誌	この道	安吾の文学は「人間愛や求道精神の顕われ」なので、「愛のゆがみを痛切に感じることによって」「魂のもたえ」が起こるとし、「狂人遺書」「砂をかむ」「真珠」「日本文化私観」などを引用して、そうした安吾の人間らしさを読み解いている	狂人遺書 砂をかむ 真珠 日本文化私観
1970年7月	野村喬	坂口安吾	紙誌	国文学	「性と文学」特集号での安吾評。安吾の性に対する考えは、正常な人間の欲望を愛するヒューマンズムの本道であり、「道鏡」に見られるように「精神の高みを伴っていた」から決して侮蔑の対象にはならず「戦後世相を高く抜きでた気品を発散した」と評価。「桜の森の満開の下」「ジロリの女」「青鬼の禪を洗う女」「火」などには「濃艶であるばかりか、サディスティックな動きを附与した女主人公の造出」が行われて「傑作」となったが、安吾自身がマゾヒストであったわけではなく、「被虐感が意識の怪奇連想を誘った」と分析する	桜の森の満開の下 ジロリの女 青鬼の禪を洗う女 火 道鏡
1970年8月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集6(冬樹社刊)	「信長」は「作品全体が高い調子に引きしめられ、躍動していて読み出したらやめられない迫力がある」と評価。さらに「狂人遺書」については、「優越者の普遍的心理」を描いて「明晰な第一線の文明批評」になっている上に、「こんな文学者の全存在を感じさせる作品はない」と絶讃。晩年の短篇の中では「発掘した美女」や「餅のタタリ」「保久呂天皇」などに「ファルスの底におそろしい宿命」を感じると分析、のちの深沢七郎に通じるものとする。「砂丘の幻」には「清冽なデカダンスとロマンティックな心情が純粹に表現されていて、甘酸っぱい、永遠の幻のように切なかない青春小説」と批評し、自伝的小説の系列に入れたいと述べる。奥野健男『坂口安吾』に加筆修正のうえ収録	信長 狂人遺書 発掘した美女 餅のタタリ 保久呂天皇 砂丘の幻
1970年8月	宇波彰	ファルスの文学	解説	定本坂口安吾全集6(冬樹社刊)	安吾の全作品は、自伝的作品の系列とファルスの系列の二つに分類できると説く。処女作の頃は書くべきものがなかった、と安吾自身が述べた箇所を全作に敷衍し、何もなければこそファルスの創出には向いていたとする。また、安吾の文章の一部を引用して「彼は私小説を文学とは認めない」と断定し、だから「安吾自身の自伝的作品も拒否しなくてはならない」と極論する	
1970年8月	関井光男	解題	解説	定本坂口安吾全集6(冬樹社刊)	安吾の長男出生について「〈子供〉の誕生は、彼の内部を蹂躪し、ひとつの位相を形成する事件を誘発したのである」と大仰な表現で論じ、「安吾の新日本地理」と「狂人遺書」は「このような内的事件の背景をもつことによってはじめて執筆された作品」とする。収録作品個々の解題でも、各所で「〈子供〉という〈他者〉をもった」安吾の内面の相剋が反映されているなどと、かなり強引に自説を展開	安吾の新日本地理 狂人遺書
1970年8月	田辺茂一	安吾と私	月報	定本坂口安吾全集6(冬樹社刊)	安吾が戦後すぐの「文芸時評」で田辺の作品だけ数回にわたって褒めてくれた話、晩年『安吾捕物帖』出版をめぐる問題の仲裁に桐生まで訪問した話など、「安吾の酒」(1961)「わが伯楽」(1967)「プレイボーイ安吾」(1968)などと同内容。『吹雪物語』を刊行当時に読み、「随分、尻切れとんぼで、纏まりがなく、野放図の作品」と思ったが、この「粗放さも、作品には必要なで」と批評。小さく纏まらない「安吾の茫洋を学びたい」と記す	明治開化安吾捕物 吹雪物語
1970年8月	斎藤稔	「キング」のころ	月報	定本坂口安吾全集6(冬樹社刊)	1949年頃から講談社の『キング』編集者として伊東をよく訪ね、安吾から様々な話を聞いたと回想。豊山中学にいた折、護国寺から早稲田までよく走ったことや、「日本人が住んでいるところが日本」、「考えるには映画館が一番いい」と語っていたことなど、他にないエピソードが知れる	
1970年8月	平山信義	流星のように	月報	定本坂口安吾全集6(冬樹社刊)	1947年頃、読売新聞文化部記者として安吾を訪ねた初日に唇だらけの書齋に通されたこと、サルトルについての原稿を頼むと、その場で5枚の原稿を書いたことなど回想。アドルム中毒で入院した折には、見合いに行くと御機嫌で後楽園へ野球見物に連れて行かれ、退院直後の頃には、暴れだした安吾が警官に取り押さえられた現場に出くわしたという。「街はふるさと」の原稿は熱海や伊豆山の旅館で執筆。1954年夏頃、歴史小説の執筆依頼に桐生へ赴くと、「今度は傑作を書くよ」と張り切っていたらしいが、目の前でドライ・ジン1本を空ける酒量で、読売に次作を書く前に逝ってしまう	肉体自体が思考する 街はふるさと
1970年8月	小林博	ドエライ人	月報	定本坂口安吾全集6(冬樹社刊)	「明治開化安吾捕物」の編集担当時代、奥湯河原「加満田」や箱根宮ノ下「対星館」などでカンヅメになって執筆してもらったという。「執筆に当たっては、真摯そのもの」で、阿修羅の形相で書いていたそう。執筆後は、伊東時代はジン、桐生ではサントリー角瓶をガブ飲み。1951年秋頃には「グラビア頁で、地方、地方の美人を載せる」企画の提案を安吾から受け、それが翌年1月号からの「故郷(ふるさと)の美」というグラビア連載に結実したという	明治開化安吾捕物
1970年8月	檀一雄	坂口安吾・「白痴」について	紙誌	毎日新聞(23日)	「名作文庫」紹介欄で「白痴」をとりあげ、「人間という事実を、まったく洗いざらしの、始源の姿に、見立てようと覚悟して」書かれていて、「墮落論」の裏打ちをこころみたとする作品として、あらすじを紹介。檀一雄『来る日 去る日』(皆美社 1972)に収録	白痴

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1970年9月	江口清	若かりし日の坂口安吾	解説	道鏡・狂人遺書 (角川文庫)	1955年2月の「若き日の安吾」、1956年9月の「若いころの安吾のことなど」と重なる部分が多い。ここでは、「木枯の酒倉から」を「藤村が賞めているという話も聞いた」ことになっているなど、多くの点で江口の過去の回想文と矛盾する記述があるが、江口自身に関わる事柄に関してはこれが最も詳しい。『言葉』や『青い馬』の中で鳥海や桂の筆名で訳しているのは「すべて葛巻」だったことを明かしている	
1970年9月	磯田光一	作品解説—聖俗統合の人間観	解説	道鏡・狂人遺書 (角川文庫)	「二合五勺に関する愛国的考察」で、凶悪な拷問にも堪えきつたキリシタンが飢えには勝てなかったことを書いた安吾は、「聖と俗とが表裏一体をなした人間認識」をもっていたと指摘。そのため「道鏡」「狂人遺書」「イノチガケ」「梟雄」など、安吾の歴史小説は「人間臭さにみちた叙事詩であって、単純直截な、というよりぶっきらぼうな文体によって、人間のドラマがとらえられている」と説く。近代的歴史解釈や心理分析などは無縁で、そんなものよりもっと深い「“イノチ”をもった人間」、「愚かさ承知で生きる」ゆえに「たんなる愚を超えてしまう」人間が描けたと評価する。角川文庫版『墮落論』(1969)の作品解説と共に磯田光一『悪意の文学』(1972)に再録	二合五勺に関する愛国的考察 道鏡 狂人遺書 イノチガケ 梟雄
1970年9月	奥野健男	解説	解説	暗い青春・魔の退屈(角川文庫)	「自分の父母や家や生立ちや日常生活をそのまま語ることを自らに禁じ、拒否した嫌悪してきた」安吾にとって、一連の自伝的小説は「タブーを破る」と解釈。「石の思ひ」から作者の生きた年代順に並ぶ作品群について、「つねに自己の内部とたたかい、求道僧のごとく苦行するとともに、たちまち破戒僧のごとく自己破滅のデカダンスに自らを追いやる、まことに純粋でかつ巨大な生き方が読者に迫ってくるに違いない」と述べ、なかでも「三十歳」を「頂点と言える傑作」とする	石の思ひ 暗い青春 魔の退屈 三十歳
1970年10月	庄司肇	安吾狂乱	紙誌	蒼狐	浅田晃彦『坂口安吾桐生日記』(1969)、江口恭平『晩年の坂口安吾』(1964)、坂口三千代『クラクラ日記』(1967)の3冊に、安吾の晩年の狂気がリアルに描けていることを讃える。ただし、南川潤の死が安吾のせいであらうとみる「過度のセンチメンタリズム」などに釘をさす。加えて、かじてつや『現代文学者の病蹟』(1969)の悪意に満ちた病状分析を論難。安吾の狂気には常に正気が宿り、その狂気によって「この世にあたらしいなにかをつけ加えた」と説く。庄司肇『坂口安吾論集成』に収録	
1970年11月	川上富吉	風博士の正体—坂口安吾論	紙誌	批評文学	安吾作品の主題は「孤独でしかない人間存在」にとって「はたして「愛」は可能なのか」と自問することだという。特に「異性は作家にとって自己開示の鍵である」ゆえに、そこを追求するのは文学の必然であると説き、安吾は聖処女にして娼婦という女性像を造型したと批評	
1970年11月	川上富吉	風博士の正体—坂口安吾論	紙誌	批評文学	「をみな」「私は海をだきしめてみたい」「孤独閑談」などを引例しつつ、安吾の娼婦礼讃が処女礼讃とイコールになるという濫澤龍彦の批評(1968)に共感を示す。それは「風博士」の「幼な妻＝聖処女」から続くものであり、また安吾の描く聖娼婦のイメージには長島萃の妹の印象が多く投影されていると述べる	をみな 私は海をだきしめてみたい 孤独閑談 風博士
1970年11月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集10(冬樹社刊)	安吾には完成した長篇が少ないことを述べた上で、「不連続殺人事件」については「謎ときゲームの遊びの世界では、安吾は明晰な心理分析者、長篇の筋立の巧みな構成者、物語作家であるのだ」と評価。「復員殺人事件」は「松本清張、水上勉の社会派推理小説、あるいは私小説的推理小説の先駆的作品」として、完成していれば「不連続」を超えたと思像する。推理短篇各篇についても一言ずつ解説があり、併収の「現代忍術伝」については、「現代諷刺のファルスとしては成功している」が、あまり評価していない。奥野健男『坂口安吾』に加筆修正のうえ収録	不連続殺人事件 復員殺人事件 現代忍術伝
1970年11月	荒正人	非合理主義者の合理主義	解説	定本坂口安吾全集10(冬樹社刊)	戦争中、『現代文学』同人らと遊んだことなどを回想。戦後「墮落論」は民主主義文学の立場からは否定されたが、「民主主義者が救いの手を差し延べることの出来なかった大衆の大部分からは最も歓迎された」と述べる。荒たちは当時、民主主義者と論争しながらも近い立場にいたから、自戒の意もこもる。「不連続殺人事件」をはじめとして、推理短篇の「どの一篇をみても余技に安住しているものはない」と評価し、安吾にとって「読者への奉仕」が大切なものであったと述べる	墮落論 不連続殺人事件
1970年11月	関井光男	解題	解説	定本坂口安吾全集10(冬樹社刊)	「母を殺した少年」や、安吾が少年時代に感心した谷崎の「或る少年の怯れ」に、安吾自身の少年時代の追憶がそのまま現れているとし、「己れのなかに罪深き子供像の認識を発見したときから「墮落論」の発想や推理小説への傾斜も生まれた」とみる。戦争中、仲間たちと推理小説犯人当てゲームに興じたことまで聖化して考えようとする、かなり穿った論。「不連続殺人事件」には「墮落論」の反映があるとして、「正しく墮ちた」人間の「世界」が描かれているとする	母を殺した少年 墮落論 不連続殺人事件
1970年11月	古山高麗雄	足利のうまいそばや	月報	定本坂口安吾全集10(冬樹社刊)	1954年、河出書房の『知性』編集者として桐生を数回訪ねたことを回想。同編集部には安吾の弟子格の入江元彦がおり、入江と共に初訪問、その後は1人で「真書太閤記」の原稿受取に赴く。一度、経理の手違いで原稿料支払い額が下がったことに激怒する安吾は、古山がすぐに駆けつけて詫言びたので一応許したのだが、ずっと机に向かって書けなくなったという。結局ひと月休載となったが、それでも古山をいたわり、古山がそば好きと知ると足利の一茶庵がうまいからと三千代に連れて行かせ、他にも映画館に連れて行かせるなど、安吾の細かな思いやりが伝わる、味わい深い文章	真書太閤記
1970年11月	千谷七郎	安吾の置手紙	月報	定本坂口安吾全集10(冬樹社刊)	東大病院入院時の安吾のようすを担当医の立場で正確に叙述した一級資料。安吾が幻視幻聴と呼ぶ症状は、よく聞くと「気配」程度のもので、アドルム乱用による症状の一つだったらしい。周期的に現れる鬱病期とアドルム乱用が重なって、不安などが昂進したと所見を記し、退院までの経過を詳細に記している	
1970年11月	伊沢幸平	小田原の安吾さん	月報	定本坂口安吾全集10(冬樹社刊)	小田原での安吾はよく三好と碁を打ったが、安吾の方が何目か上であったという。毎日三好家で食事し、三好自慢の烏骨鶏の卵を「喰べていると中風にかからないんだそうだと喜んで食べていたそう。しかし、伊沢と2人で散歩の途中、三好のことを「東京帝国大学の卒業生であるということ意識しすぎる」のが欠点だと、突然話し出したという	
1970年12月	大久保典夫	無頼の思想	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「墮落論」が反響を呼んだのは、その根幹の主題とは別に、「失われゆく醇風美俗への痛切な哀惜を秘めていたから」とみる。そこにはデカダンスとはむしろ反対の、「生命主義的な無頼」が認められるという	墮落論

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1970年12月	関井光男	坂口安吾—制外者の世界について	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「白痴」「木枯の酒倉から」「風博士」などを引例して、安吾文学は「本質的に(グロテスクなものを内に蔵している)と指摘。蛸博士こそは「疎外されてる(グロテスクなもの)」であり、「風博士の正体は(グロテスクなもの)に侵された現実(日常世界)にほかならない」といい、安吾文学はこのような「制外者(にんがいのもの)」の「本質的自由への憧憬」であるとす	白痴 木枯の酒倉から 風博士
1970年12月	千葉宣一	「白痴」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「白痴」の批評史を概説した上で、本多秋五らが「芸術家と世間的生活の対立」に矮小化して論じたのは当たらないとし、「本来的なしかも究極の主題は、坂口安吾の、創造する“魂の状態(エタダム)”それ自体」だと説く	白痴
1970年12月	柘植光彦	「墮落論」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	安吾は一貫して自由の問題を追求し、「観念的な問題提起と、実生活を、徹底して一致させた」という。その流れで「墮落論」も書かれたと。「自由」にいたるための方法論であったわけだが、「ついに方法論のまま終わった」と冷たく突き放して終わる	墮落論
1970年12月	関井光男	坂口安吾論—「明治開化 安吾捕物帖」について	紙誌	無頼派の文学	前年『定本坂口安吾全集』第11巻に執筆した解題と同趣旨。「安吾捕物」と「安吾捕物帖」の違い、「文明開化」と「明治開化」の違いについて、大きな意味を持たせようとしているが、立証できているとは言い難い。『坂口安吾研究』Ⅱに収録	明治開化安吾捕物
1970年12月	細川嘉章	六連覇巨人インサイド・ストーリー「終わりなき勝利」第2回「坂口安吾と川上監督」	紙誌	週刊ベースボール(7日)	著者は元巨人軍人事務部長で、呉清源と安吾との対局を企画したことが縁で、安吾と知り合う。対局の時、安吾は新品のワイシャツと下着を着用してきたと自ら言い、終始名人の顔を見ず「盤面におおいがぶさって、石ばかり睨み続ける。長髪を掻きむしり、あとからあとからタバコに火をつけるので、盤上は、フケとタバコの灰で狼藉をきわめた」らしい。酒を飲めない体質の細川に、安吾は「度ははずれの親切」で遇ってくれたという。電車では、細川が降り降りする時、安吾はドアにしがみついて「ドアにはさまれるなよ」としつこく注意し、家を訪ねると帰りには必ず駅まで送ってくれる。「酒席では私を自分の隣りに坐らせて、私のコップに注がれるウイスキーを一手に引き受けた」。そういうところが巨人の川上哲治監督とよく似ていたそう。安吾は選手時代の川上を評して、「川上を努力の人なんていうやつはバカだな。川上は天才だよ」と語ったという	
1971年1月	上野博正	坂口安吾論—墮落のすすめに見られる歴史観と人間観	紙誌	思想の科学	敗戦後に読んだ「墮落論」の衝撃を語る人は多いが、今日になると常識的なことばかりだと受けとめる傾向があり、そういう人は安吾が理解できていないと述べる。「安吾は常に常識的なことしか言わなかった」ことを同時代で気づけない人は、結局なにかに影響されてしまう人間なのだ。全体に激しい口調で、アジェーションの趣もある文章	墮落論
1971年2月	小野龍太郎	坂口安吾文がたみ 叛逆と愛情	単著	(宝文館出版刊)	当時の代表的な年譜であった渡辺彰の安吾年譜に沿って書かれた伝記。会話を入れ込んだ小説風の文章と、年譜の記述を丸写しした部分とが、無秩序に混じっている。友人らの回想文や安吾の小説からの引用も非常に多く、その引用部分の区別がされていない、不用意な文章。新たな発見や独自の見解は見当たらない	
1971年2月	織田昭子	わたしの織田作之助—その愛と死	単著	(サンケイ新聞社出版局刊)	1967年から『婦人文芸』に連載した織田作之助の伝記。無頼派3人の鼎談を全文引用し、会の後、織田の仕事場の佐々木旅館に安吾と太宰が立ち寄った話を記す。1956年の『マダム』に書かれた内容とほぼ同じ	
1971年2月	葛巻義敏	寂寥(坂口安吾への手紙)	紙誌	ポリタイア	安吾を懐かしみ、諍いから少し縁遠くってしまった過去を悔やむ文章。「坂口安吾への手紙」(1955)「坂口安吾のこと」(1957)などで繰り返し語った同人誌時代の各エピソードはかなり端折って、これまで記されなかった2人の気持ちや、徹夜で翻訳した日の細部のようなすなどを切々と語っている	
1971年2月	伊沢幸平	「黄河」のころの安吾さん	紙誌	ポリタイア	映画「黄河」の脚本執筆資料として鳥山喜一『黄河の水』などを安吾に契めたり、会津八一との会見を手引きしたりした話のほか、空襲下、阿佐ヶ谷の伊沢宅に酒が溜まると、安吾が遊びに来て終電まで過ごしたこと、「枯野 花ニ水漕グ 空襲の頃 四十歳安吾」と揮毫した短尺をもらったことなど、貴重な回想が続く	
1971年2月	谷丹三	安吾先生とファルス	紙誌	ポリタイア	「信一と安吾」(1957)で語られた出逢いの日の再話、取手時代の安吾を訪ねた日のことなど、谷だけが知るエピソードが多く、貴重な資料。ちゃぶ台のような机の上は原稿の山だったが、「ランダムにそのうちひとつの紙切を拾うと日本字でなく、Perdre la tete(気が狂う)が4か5ぐらいタテの列をつくっている。ちょっとあけてその下は Prendre du the(茶をのむ)と同じく4か5の列。しまいには Pendre,pendre(首をしめる)」と書かれていたという	
1971年2月	千谷七郎	東大病院入院時のことなど	紙誌	ポリタイア	安吾がアドルム中毒で入院・治療した経緯や病状の経過を報告した資料。おおむね「安吾の置手紙」(1970)のほうの詳細な描写が多いが、当時の一般的な治療法についてなど、本稿独自の記述もある	
1971年2月	谷崎昭男	安吾小観	紙誌	ポリタイア	おもに「わが戦争に対処せる工夫の数々」を軸にして、安吾の身体的な健康さ、戦争をもスポーツとみる精神の明るさを語る。それゆえ、死ぬ運命なら死ぬだけだと突き放していた感覚についても述べている	わが戦争に対処せる工夫の数々
1971年2月	黒田征	無頼の「遊び」—坂口安吾の文学	紙誌	ポリタイア	「遊びをせんとや生れけむ…」という梁塵秘抄の歌を好んだ安吾にとって、「生きること」全部が「遊び」であり、それは「一切を賭け没入する」真剣なものであったと説く。つまり、普通の意味の「遊び」とは程遠い「必死の攻取精神、瀬戸際の無頼精神である」と評する。ここから安吾文学を覆う「虚無」や「絶対の孤独」も生まれるという	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1971年2月	石川弘	安吾の詩魂	紙誌	ポリタイア	前半は「日本文化私観」の解説をしながら、安吾の筆法をまねて自分の体験談を織り込みつつ語る。スタイルはユニークだが、安吾の感慨を追認するために同じ場所を辿るので、本家の筆には及びようもない。後半は「墮落論」「白痴」「桜の森の満開の下」「夜長姫と耳男」などを、自分の体験を重ねる同種の趣向で、いくらか「小説」的に、あらずじ紹介している	日本文化私観 墮落論 白痴 桜の森の満開の下 夜長姫と耳男
1971年2月	浅井円道・宇田敏彦	安吾文学と仏教	紙誌	ポリタイア	宇田が解説役となり、日蓮宗研究の浅井に話を聞く形で進む対談。浅井は「白痴」や「いつこへ」を初めて読み、虚無や絶望が延々続くまで終わるのに驚いたという。「桜の森の満開の下」は一種の「白骨観」がみられ、孤独が救いになっているが、仏教的ではないと語る。安吾の全体像については、浅井は宇田の説明から受けたイメージしか知らないで、誤解が誤解を生むような話になってしまう。「墮落」を手段として「孤独」を得るのでは虚しいとか、墮落した自分を高しとする姿勢が許せないなどと話している	墮落論 白痴 いつこへ 桜の森の満開の下
1971年2月	紅野敏郎	中村地平・その初期—「四人」の時代	紙誌	ポリタイア	中村地平、津村信夫らの同人誌『四人』創刊号(1932.1)の文芸時評で、地平が「竹藪の家」評を載せていたことを紹介。「氏は豊かなる感覚をもつてゐる。自然は空気中のエーテルや氣泡迄嗅き出されて、一つの深奥な態に歪められ、音楽的なリズムを伴つてゐる」と評価し、ただ「感性を主観のまゝ投げ込まれた」点を欠点に挙げている	竹藪の家
1971年3月	巖谷大四	坂口安吾	解説	林忠彦写真集 日本の作家(主婦と生活社)	「坂口安吾氏のこと」(1969)の前半部を抜粋したもの	
1971年3月	多湖輝	坂口安吾先生	紙誌	日本経済新聞(2日)	東工大で心理学を教えていた時、安吾が競輪事件の写真を拡大するための協力を求めていると聞き、橋渡しをしてあげたという。会う前は「パノイアの患者」を想定していたが、初めて会った安吾の「ひたむきな人間の情熱」にすっかり魅了され、一緒に競輪場まで行き、車券まで買ってしまつたと語る	
1971年6月	奥野健男	安吾文学の原風景を訪ねて—坂口安吾文学紀行	解説	現代日本の文学26「尾崎士郎・坂口安吾集」(学習研究社)	安吾作品を引用しながら、新潟のゆかりの土地土地を旅してまわつた紀行文。まるでふるさとを懐かしむような筆致で書かれている	
1971年6月	尾崎秀樹	評伝的解説	解説	現代日本の文学26「尾崎士郎・坂口安吾集」(学習研究社)	終戦後、台湾から引き揚げてきてしばらく闇屋をやっていた尾崎にとって「墮落論」は「バイブル」となり、以来、安吾文学を読みあさつたという。そのあと、安吾年譜に沿って、人と文学を概説	
1971年6月	関井光男	年譜	解説	現代日本の文学26「尾崎士郎・坂口安吾集」(学習研究社)	同年12月の「伝記的年譜」に先立つ関井年譜だが、大部分は発表作品の列挙にとどまる。坂口家先祖の話に比較的スペースを割いているが、この時点ですでに、噂や類推を事実と断定した箇所が目立つ	
1971年6月	大井広介・坂口三千代	対談「家庭を愛した晩年」	月報	現代日本の文学26「尾崎士郎・坂口安吾集」(学習研究社)	大井は戦争中の安吾のようすを回想し、「原稿書くのは非常に好きで」「締切前には、きちんと原稿書いて」持ってきたこと、手の込んだいたづらをして大井の家族を慌てさせた話など紹介。三千代は安吾の思いこみの激しさや、気に入ると鳥かごや望遠鏡など何個も買いあさってくる話、長男のため自分でお守り袋を作ってやった話など紹介。坂口三千代『安吾追想』に収録	
1971年6月	磯田光一	“無頼派”の逆説	紙誌	東京新聞(16～17日)	前半は大宰論が中心となるが、後半で安吾の「いつこへ」に触れ、「女の低俗さが気にかかるということは、裏からいえば、ほとんど過度といつてよいほど安吾が人間の美德を求めていたということである」と述べる。また、「日本文化私観」で文化や伝統の「観念」だけを重視することの虚妄をあばいた点を賞讃する	いつこへ 日本文化私観
1971年8月	佐橋文寿(さし・ぶんじゅ)	孤立者の系譜—アウトサイダー的生とニヒリズムの諸相	単著	(春秋社刊)	スタンダー、ニーチェ、ヘッセ、良寛、安吾からアウトサイダーの本質を探つた本。第5章「ふるさととしての虚無—安吾」で、安吾の虚無の諸相を順を追って語る。初期作品は虚無の詩であり、「原因が何であれ、青年の中には、同じような絶望から人生を始める者が」少なくないと述べる。戦後の「いつこへ」などの虚無はキルケゴールに近いもので、より宗教的、求道者的だとみる。さらに「桜の森の満開の下」や「青鬼の禪を洗う女」には「ふるさととしての虚無」が現れ、思想でなく人間性にくつついた虚無をみる。エッセイなどには「道なき道を行くディオニュソス精神」が激しく現れ、「虚無を力としてとらえるような強さ」が安吾の「スケールの大きさである」と論じる。「安吾巷談」や「安吾史譚」では、道をたのしむ「東洋的な虚無」に至り、「最後に大地へ戻って「人間讃歌」となった」と締めくくる	ふるさとに寄する讃歌 いつこへ 桜の森の満開の下 青鬼の禪を洗う女 墮落論 安吾巷談 安吾史譚
1971年9月	伊狩章	坂口安吾の家系	紙誌	日本近代文学館	五峰や献吉ら坂口家の人々を簡単に述べ、『五峰余影』(1929)や『治右衛門とその末裔』(1966)『坂口献吉追悼録』(1966)など、先祖関係の参考資料を紹介している	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1971年9月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集12(冬樹社刊)	「対談や座談会だけで一冊の本になるほど、多くの対談を行い、しかも独立した読物としておもしろいのは坂口安吾ぐらいのものではないか」と評し、「二十七歳」に書かれた話の典拠となる座談会が読めることなど、各座談会の背景も簡単に述べてある。奥野健男『坂口安吾』に加筆修正のうえ収録	対談 鼎談 座談会
1971年9月	杉森久英	名家の次男	解説	定本坂口安吾全集12(冬樹社刊)	のちの杉森『小説坂口安吾』(1978)のスケッチのようなエッセイ。安吾の奔放な生涯を「名家の次男」ゆえの超俗であったとし、そこには甘えもあり、基本的に生活の苦勞が要らなかった境遇にもよると指摘。全体に強引な論理展開が目立ち、戦後の安吾が「ヒロポンとアドルムを愛用」したのは「芸術家は奔放に生きる必要がある」と考えたためと誤認している	
1971年9月	鵜殿新	去年の雪	月報	定本坂口安吾全集12(冬樹社刊)	1933年暮れ頃、菊富士ホテルに止宿する安吾と毎日のように会ったことを回想。鵜殿の親友で東大美学から経済に転部した待鳥喜久大や、東大哲学科の学生松下喜平らとも安吾は交遊。鵜殿自身は同じ本郷の元町公園脇にあった兄の雄風館書房の手伝いをしており、安吾はそこへ毎日やって来たそう。碁を打つと、当時初段クラスの安吾の方が強かったが、その氣迫をこめた演技力にも圧倒されて、鵜殿は実力以上に負けたという。このほか、碁を介してのさまざまな出逢いを語り、1938年秋には文人囲碁会の第1回に参加。その頃、『棋道』が『囲碁春秋』の企画で、呉清源対文人囲碁会の対局があり、安吾も勝負して負けたという。鵜殿のみ知るエピソードが多く、貴重な資料	
1971年9月	野原一夫	「花妖」中絶のこと	月報	定本坂口安吾全集12(冬樹社刊)	新聞連載小説「花妖」を新潮社で出版する係となった野原だが、連載は突然中止となる。「安吾文学の一つの頂点と言っている名作」であり、安吾自身、中絶後も必ず完成させ「おれの最高の傑作にしてみせる」と意気込んでいたと回想	花妖
1971年9月	矢島道弘	戦後文学史論の一点—坂口安吾を中心に	紙誌	批評文学	「墮落論」が洪川驍や十返肇、本多秋五、平野謙、岩上順一、滝崎安之助ら「民主主義文学者のなかから厳しい批判を受けた」ことを紹介し、彼らの論点がいわゆる主義主張のためのプロパガンダでしかなく、安吾の文学と思想を全く理解できていなかった点を改めて糾弾する	墮落論
1971年10月	黒田征	坂口安吾の戯作考	紙誌	近代文学論叢(北海道大学近代文学研究会)	ファルス作家としての出発から安吾は「文学を否定する文学者、というラジカルな問題を背負って生きた」とし、彼の「戦後の戯作文学こそは、敗戦の徹底的な価値の崩壊を経験することによって、より意識的に、真のファルス文学を実現したもの」と語る	
1971年10月	川嶋至	解説	解説	ふるさとに寄する讃歌(角川文庫)	「その生涯のほとんどを、きわめて観念的な作風の小説を書き続けることでついやした、めずらしい作家」と安吾を規定し、「小説を書くことは、彼にとつて生理的な浄化作用」だったと説く。この規定を批評の出発点としたので、収録短篇についてのコメントもかなり偏向し、あらずじとは呼べないあらずじが綴られている	ふるさとに寄する讃歌
1971年11月	奥山壽子	坂口安吾初期作品について—認識の把握を中心に	紙誌	富士見坂文学(法政大学文学研究会)	安吾文学は「人間とは本来孤独であるとする認識」から出発するので、奇抜なファルス「木枯の酒倉から」でも「自然に体が酒を求めるように、魂が文学を求めて動き出してしまふ」様が描かれていると批評。「風博士」には暗さはないが「笑いを純化したエキスのような面がある」とし、逆に「ふるさとに寄する讃歌」や「黒谷村」は「暗く重たくもつう気な」「観念小説」の方向に純化されたものとみる。以下、戦後作品にまで説き及ぶが、上記の初期作品についての考察がすぐれている	木枯の酒倉から 風博士 ふるさとに寄する讃歌 黒谷村
1971年11月	川嶋至	解説	解説	外套と青空(角川文庫)	流行作家となった時期の安吾作品も、戦前からのそれと実質は変わらないとみる。「長い不遇の作家生活のうちに、すでに地獄を見きわめていた」安吾だから、戦争中「焼夷弾に豪華な美を感じ、肉体だけの女を受け入れた」のも当然だったといい、自閉的な作品群に「文学のふるさと」の絶対の孤独を見いだす。「桜の森の満開の下」や「花火」などに「当時安吾に結婚を決意させた女性への、彼自身の傾情が影をおとしているとみてよい」と三千代のイメージを強引に寄せすぎているところなどは、読者の誤解を生む	外套と青空 続戦争と一人の女 桜の森の満開の下 花火
1971年12月	川嶋至	解説	解説	ジロリの女(角川文庫)	安吾の闘病記の諸短篇について、「切迫した創作への衝動」は感じられるが、もはや「白痴」の頃とは比較にならない「衰弱」をみせていると述べる。「総じて戦中戦後の風俗描写が表面に出て」「人間が生きていないうらみ」があると批評	ジロリの女
1971年12月	奥野健男	解説	解説	定本坂口安吾全集13(冬樹社刊)	全集補遺として収録された「山の貴婦人」「楽しい夢の中にて」「流浪の追憶」「探偵の巻」「市井閑談」などを「小説的」と評し、「税金対策ノート」は「奇書」にして「傑作」であり、「こんなおもしろい前衛戯曲はない」と賞讃する。山口修三宛書簡については、かつて紹介された「内容の一部」を含め「書簡の殆んどはその後焼失紛失し、現在ではこの二通しか遺っていない」という残念な事実を記し、青春期ならではの「不遜なまで自我中心的のぎりぎりの真実の自己主張であり自己告白である」とし、「この書簡を坂口安吾文学の原点と定めたい」とまで述べている。奥野健男『坂口安吾』に加筆修正のうえ収録	山の貴婦人 楽しい夢の中にて 流浪の追憶 探偵の巻 市井閑談 税務署対策ノート 山口修三宛書簡
1971年12月	関井光男	解題	解説	定本坂口安吾全集13(冬樹社刊)	加藤秀俊「座談の文体」(1968)に賛意を示しつつ、安吾に『時代』に容れられない「絶望感」があったとする部分だけ全否定する。安吾は『談ずる』ことをみずから楽しんでいるように見える」と。また、「組立殺人事件」についての解題で「坂口安吾の翻訳とは思われないといわれるが(坂口三千代談)、参考のために掲げた」とある。筑摩版全集(1999)の解題ではこの但し書きが抜け落ちている	組立殺人事件
1971年12月	関井光男	伝記的年譜	解説	定本坂口安吾全集13(冬樹社刊)	この時点では最も詳細な年譜で、こののち長く安吾の事跡の典拠とされた。安吾の自伝的小説や関係者の回想文などを多数引用しているが、事実の検証はあまりされない。年月不明の資料を各年へ適当にはめこんで、さも事実らしく組み立ててあるため、この年譜から発生した誤伝は非常に多い。大量の誤植や引用ミスも全ページにあり、功罪あい半ばする年譜といえる	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1971年12月	関井光男	坂口安吾の世界—ひとつの手引き	月報	定本坂口安吾全集13(冬樹社刊)	安吾のファルス文学は「グロテスクなもの」を内に蔵しているとし、それは反日常の「疎外された世界」であり、同時に、根源的で、虚像の現実よりも優位だとみる。「木枯の酒倉から」で「茨」の道を「愉快」と感じ、「白痴」の女について「醜怪きわるもの」が「無限の誇りをもつ」と感じる所以だと。また、「風博士」における風博士の正体を「現実」、蝸博士を「グロテスクなもの」として対置するが、関井の論法では蝸博士が優位になってしまう。安吾自身の定義では、ファルスは単純に「乱痴気騒ぎに終始する」文学だが、関井は自らの立論を敷衍して、ファルスには「日常的世界の表現はない」と断定する。つまり、「風博士」などの数作以外、安吾作品にファルスはないという結論になる	木枯の酒倉から 白痴 風博士
1971年12月	関井光男	戦後批判としての「安吾巷談」	月報	坂口安吾評論全集6「巷談随想篇」(冬樹社刊)	「安吾巷談」の成立は、佐々木基一のいう「爽快な雑文家」としての安吾の資質に加え、「戦後の日本の現実が要請したもの」とみる。江藤淳が『作家は行動する』(1959)の中で、安吾の文体を「生活者」のそれと規定し、「民衆の巨大なエネルギーをすいあげ、そのエネルギーに共鳴しあうことによって、この簡潔さ、この美しさをえている」と分析するのに全面的に賛同している	安吾巷談
1971年12月	関井光男	乱世の旅	月報	坂口安吾評論全集4「歴史紀行篇」(冬樹社刊)	「安吾の新日本地理」について、安吾の興味は「現実の地理」ではなく、歴史を探る意図が強いと指摘。もともと、その文章は「安吾巷談」を引き継いだ、遊び心に富む「ヤジウマ根性」の所産と評する。関井は「飛鳥の幻」を評価せず、「飛驒の顔」と「飛驒・高山の抹殺」を最も評価している	安吾の新日本地理
1972年1月	川嶋至	解説	解説	夜長姫と耳男(角川文庫)	安吾作品集の解説にしては異例の辛口批評。晩年の諸作は「衰頹ぶり」ばかり目立ち、「狂気に近い夢想的幻影のなか」に生きていたので、この先も生きたとしても、もう良作は書けなかっただろうと断定する。個々の作品については、安吾の実生活と無理やり結びつけた解釈が多く、「自殺した姪のイメージ」を各作のモデルと断定しすぎて、作品理解をかえって妨げている。子供ができて喜ぶ安吾に対して「これが変節でなくてなんであろうか」と非難するの一面的で、解説には不穏当	夜長姫と耳男 保久呂天皇 中庸 牛幽霊それから 犯人都会の中の孤島
1972年2月	関井光男	モラリストの肖像画	月報	坂口安吾評論全集5「人物観戦篇」(冬樹社刊)	安吾の書く人物論には「健全なモラリストの常識」があるが、その根底には「病者の眼光」(ニーチェ)があると述べる。なお、この全集の月報には、大半に「風博士」と篆刻した印が捺されており、この回から「安吾愛蔵印」とキャプションが付けられた。しかし、この印判は坂口家に現存せず、安吾が生前どこかに捺した形跡も見当たらないので、本物かどうか疑わしい	
1972年2月	関井光男	ファルスの奔馬	月報	坂口安吾評論全集1「文学思想篇Ⅰ」(冬樹社刊)	佐藤春夫が安吾を「健康な知性を持った狂人」と評したことを掘り下げ、鬱病になる以前から「夢想的性格者の暗部」があったのではないかとみる。安吾のファルス精神もその夢想的性格から生まれ、「ファルスは人間における夢想の真実性を追尋するから、人間のもっとも深奥に潜んでいる狂気の爆発をも容易にする」と説く	
1972年3月	清水信	短歌の周辺42「坂口安吾」	紙誌	短歌	中学時代の安吾が三堀謙二宛書簡に書いた「啄木式」の短歌を紹介。出来ばえは「平凡」だが「青春の独自の憂愁が感得できめではない」と批評	三堀謙二宛書簡
1972年3月	関井光男	「民衆」の思想	月報	坂口安吾評論全集2「文学思想篇Ⅱ」(冬樹社刊)	「安吾は終生知識人としてのおごりをもたず、知識人の存在を否定し続けたが、その根本には人間の生きている裸の姿を直視しない表面的な知識人への不満がある」として、「ぐうたら」であり「偉大」でもある、聖と俗の統合された「民衆」のイメージをもってたと述べる	
1972年3月	関井光男	昭和二十八年以後の問題	月報	坂口安吾評論全集3「社会風俗篇」(冬樹社刊)	桐生転居後を安吾の「晩年」と呼ぶことに強く反発、安吾に「晩年」意識はないというが、語の定義の問題ともいえる。この時期では子供の誕生が最大の「内的事件」で、これにより、「夢想」の中に生きていた「かれと現実(あるいは他者)」との出会いの位相を形成したであろうと述べる	
1972年3月	関井光男	坂口安吾年譜	月報	坂口安吾評論全集7「回想自伝篇」(冬樹社刊)	月報の紙数8頁に収めた簡略年譜。デビュー後の記述はほとんどが作品名の羅列になっている	
1972年4月	磯田光一	悪意の文学(読売選書19)	単著	(読売新聞社刊)	「聖俗統合の人間学—坂口安吾について」を収録。これは角川文庫版『墜落論』(1969)の解説と、同『道鏡・狂人遺書』(1970)の解説を一つにまとめたもの	
1972年8月	江口清	坂口安吾と外国文学	紙誌	海	アテネ・フランセ時代に山田吉彦のギリシャ語科で安吾と出逢ったことや、当時安吾が熱心に読んだ外国文学の数々を紹介。江口のみが知る内容も多く、貴重な資料となっている。江口は安吾作品には外国文学の影響はないとみており、初期の翻訳は全集に載せるべきでなかったという。1936年頃、安吾が竹村書房から『スタンダー選集』や『フランス心理小説叢書』を出す企画を立てた時も、もはや自ら翻訳しようとは考えなかったことも指摘している。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	
1972年8月	兵藤正之助	坂口安吾論	紙誌	朱羅	「石の思ひ」では母を憎みながら「見えない母」「ふるさとの母」を呼び求め、「三十歳」では現実の矢田津世子に幻滅しながら心の中で神聖な聖母をつくりだしたように、「私は海をだきしめてみたい」「吹雪物語」など、みなそいう「メタフィジックの世界」の聖化が巧まれていることを読み解く。また、兵藤はマルキシズムに肩入れしつつも、戦後の民主主義文学者たちが安吾を故意に誤読し、的外れな批判を繰り返していたことを糾弾している。発表後、篇末に3頁分の加筆をして単行本『坂口安吾論』(1972)第1章に編入	石の思ひ 三十歳 吹雪物語 私は海をだきしめてみたい

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1972年8月	島田昭男	作品論の新視角／坂口安吾・1「真珠」論	紙誌	日本文学(未来社)	九軍神を讀えた当時の文学者たちの詩や短歌、散文を紹介し、同じ「時局性の強いもの」でも安吾の「真珠」は断断にはできないとする。「ジャーナリストティックなところで構想されるのではなく、人間にとっての真実と美を改めて問おうとするところ」に本意があるので、しぜん私小説スタイルをとったと批評。ただし、体制批判の眼が届いていないことが弱点と指摘。島田昭男『昭和作家論』(審美社 1977)に収録	真珠
1972年8月	無署名	未完成の天才！ 坂口安吾	紙誌	別冊新評	1955年2月17日付『読売新聞』夕刊の安吾訃報記事と、翌日の尾崎士郎「人間坂口安吾」および獅子文六「最後の文士」、同年4月の檀一雄「坂口安吾の死」を再録	
1972年9月	森安理文	偉大なる落伍者 坂口安吾	単著	(現代教養文庫刊)	安吾の自伝的小説や友人らの回想などを再構成する形で書かれた伝記。関井光男「伝記的年譜」(1971)と基本的なコンセプトは同じだが、そこからさらに事実との照合部分を省いているぶん誤解も多く、「年譜」的な価値は総じて低い。本文の半分以上は引用だが、小説家でもあった森安の文章は、情緒的に心理を分析する傾向が強く、文学的な表現の功罪も見え隠れする。安吾が自伝を書いた理由について「父母を憎悪することによって、自己の血や魂を憎悪し、そこから作家としての自己の再組織化をはかろうとした」とみている	
1972年9月	奥野健男	坂口安吾	単著	(文藝春秋刊)	『現代文学の基軸』(1966)や『定本坂口安吾全集』(1967～71)全巻解説を年代に沿って再構成し、大幅な加筆訂正を加えたもの。評伝のスタイルをとっているが、初出形が全集解説であったため、作品個々の解説が多すぎて、まとまりに欠ける印象もある。それでも最も早い時期の評伝として、参照されることも多い重要な著作。1996年、文春文庫にて再刊	
1972年9月	兵藤正之助	坂口安吾論—「墮落論」を中心に	紙誌	関東学院大学文学部紀要	戦争中の安吾は「黒田如水」などの歴史小説、「真珠」「青春論」などで「絶対の孤独をみつめ命を賭けた断崖」に立つ者だけが歌う「純粋な魂」を謳い上げたが、同じ魂が戦後の「墮落論」や「白痴」「いつこへ」にも流れていると論じる。発表後、加筆訂正のうえ『坂口安吾論』(1972)第4章に編入	黒田如水 真珠 青春論 墮落論 白痴
1972年10月	矢島道弘	「吹雪物語」の問題点—文学位相の転換	紙誌	日本近代文学(三省堂)	安吾作品には、精神と肉体の「相反する二相」が交互に現れるとし、作品史の上での転換点が矢田津世子との出逢いであり、「吹雪物語」であったとみる。「(夢と知性)で出発したこの物語も、結局は矢田という現実の姿の出現により、想念と現実との板ばさみとなり」当初の構想が破綻したのが「大きな失敗の原因」と批評。矢島道弘「相反する情念—坂口安吾の世界」(近代文藝社 1983)に収録	吹雪物語
1972年11月	細夏美	坂口安吾小論	紙誌	京都精華学園研究紀要	「墮落論」について「彼の墮落は出発を前提とした墮落である」とし、「迷える人間を“人間”として肯定する「居直りの姿勢」があったとみる	墮落論
1972年11月	黒田征	坂口安吾のファルスと戯作	紙誌	日本文学	戦前の安吾作品の特徴であるファルスの文学は、黒田の定義によると、時間や空間などの現実性を排し、アモラルでグロテスクな非日常の次元で展開されるものだった。しかし、戦後は「日常的な風俗を題材にして極めて常識的なモラリッシュな」戯作文学を指向したと述べる。「ファルス」や「戯作」の定義が幅広すぎて意味不明であり、例証として挙げる安吾作品は、小説の短い一節を恣意的に引用しているため、安吾自身の考えとは懸け離れている。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	木枯の酒倉から 墮落論 白痴 ビエロ 伝道者 FARCEに就て 教祖の文学
1972年12月	久保芳太郎	坂口安吾の文学—ふるさとは語ることなし	共著	『文学の旅 8「北陸・能登」』(千趣会刊)	安吾にとっての心のふるさとは、空と海と吹く風であり「明るい陽光への指向こそかれ本来の資質」だったが、故郷から離反し「傷心の漂泊者」となったため、心象のふるさとは「いっそう幻想化され美化されて」いったとみる。「魂のふるさとたる新潟」は『吹雪物語』に色濃く投影され、「終始一貫してすぎとあったかなしみながれている」と批評	吹雪物語 ふるさに寄る讃歌
1972年12月	兵藤正之助	坂口安吾論	単著	(冬樹社刊)	同年に雑誌発表された「坂口安吾論」2篇を第1章と第4章に組み入れ、書き下ろしを加えて刊行された安吾論集。第2章以降は中心となる作品を年代順に論じていくので、半ば評伝の色合いももつ。戦後の安吾作品には「鬼」「鬼の目」という言葉がよく出てくることを指摘し、「オモチャ箱」で描いた牧野信一の冷徹に世界を見つめる「鬼の目」から「桜の森の満開の下」のような鬼の幻想が生まれ出る過程を読み解いている。東大病院入院時の「生命的不安」の時をのりこえて「夜長姫と耳男」では「宇宙の真諦に達する」ものがあると読む。「信長」や「明治開化安吾捕物」「安吾巷談」などすべて新機軸の傑作と評価し、小品だが「都会の中の孤島」など「現代把握の並々ならぬ冴えを内包する作品」として賞讃している。1976年の講談社現代新書版とは別内容	吹雪物語 日本文化私観 墮落論 白痴 桜の森の満開の下 不連続殺人事件 夜長姫と耳男 安吾巷談 明治開化安吾捕物 信長 都会の中
1972年12月	(関井光男編)	坂口安吾研究 I	共著	(冬樹社刊)	牧野信一「『風博士』」「真夏の夜の夢」に始まる主要な同時代評と、没後から1971年までに発表された追悼文・回想文等を96篇収録したアンソロジー。これほどの収録数の集成は他になく、今でも利用価値が高い。ただし、巻末の書誌情報に関しては誤りが多いため、適宜、当研究文献目録にて情報を確認するのが最善。収録作品は当目録の各備考欄に「『坂口安吾研究』I」に収録」などの形で記してある。	
1973年1月	埴谷雄高	遠い記憶から—『不連続殺人事件』	月報	『昭和国民文学全集』20	戦争末期、埼玉県加須に疎開した埴谷は、久喜に疎開していた荒正人の家で探偵小説の犯人当て遊びを初めてやったとある。その折の埴谷の名探偵ぶりが、大井広介から安吾にまで伝わったという。それで『不連続殺人事件』の「カンگری警部」の名前に「雄高」が使われることとなる。犯人当て懸賞には大井とともに答案を書き、安吾のもとを初訪問したが、答えが違っていたため安吾は安堵していたようだったと回想する。『埴谷雄高全集』9(講談社 1999)、中公文庫版『不連続殺人事件』(2024)に収録	不連続殺人事件
1973年1月	島田昭男	現代作家における狂気と創造性—坂口安吾	紙誌	国文学 解釈と鑑賞臨時増刊	特集「作家と狂気」のうち「中毒の創造性への変身」という括りに入れ込まれたが、安吾は「幻覚から創造性を得ようとした作家」ではないと反発する。多量の注文をこなすため薬で睡眠を削り、執筆後は逆に強制的に眠るため睡眠薬を使ったことなど丁寧に記し、いわゆる「狂気」と無縁な安吾の人と作品を誠実に書いている。安吾幼少期の「両親に対する侮蔑と憎悪」や中学での怠学は、「海と空と風」に突き抜けていくことの自由を手に入れることでもあったとみる。島田昭男『昭和作家論』(審美社 1977)に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1973年1月	川嶋至	解説	解説	散る日本(角川文庫)	「散る日本」について、安吾の合理主義的な面と精神主義的な面とが共存しているのは「矛盾」ではなく「安吾のどうしようもない生き方のクセであった」とみる。「ラムネ氏のこと」については、「ラムネとか苺取りとかいった、日常生活のなかでなに気なく見過ごしているありふれた事象をふまえて、じつに卓抜な論理を引き出していくところに安吾のエッセイの「顕著な特徴」があると説く	散る日本 ラムネ氏のこと
1973年2月	久保田芳太郎	坂口安吾「風博士」(風狂)	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	一休宗純や平賀源内から続く風狂の精神には「時代に耐える、厳しい否定と深い虚無があった」、つまり「風狂と化することは時代に対する唯一の抵抗であった」と説明し、安吾の「風博士」や「FARCEに就て」などもまさしくそれであったと述べる	風博士 FARCEに就て
1973年3月	檀一雄・高木常雄・高橋旦	知られざる坂口安吾―“合理”に憧れた狂気の人	紙誌	噂	戦後の蒲田の家で書生役のようなことをしていた高木と高橋に、晩年まで安吾の世話をよくした檀による鼎談。会話の中だと話の内容が下世話なところから精神論まで幅広く展開されるため、たとえば檀のエッセイに出てくる以上の挿話が引きだされている。高木と高橋の話も、ここでしか語られない逸話が隅々にある貴重な資料	
1973年3月	福田蘭童	競輪事件の頃	紙誌	噂	競輪不正事件の折、安吾、三千代と共に観戦して不正を確信したこと、その後、蘭童が暴力団とつながっているのではないかと安吾に怖がられた話など、「続うわばみ行脚」(1956)「坂口安吾の裏ばなし」(1968)と同種の内容	
1973年3月	千谷七郎	安吾の置手紙―病状拾遺	紙誌	噂	『定本坂口安吾全集』10(冬樹社 1970)月報所収エッセイの抄録	
1973年4月	金達寿	古代史家坂口安吾の復活	紙誌	中央公論	古代日本と朝鮮の関係を調査し続けている作家の立場からみて、「安吾の新日本地理」や「柿本人麿[安吾史譚3]」などの歴史観は最も早い時期の卓見であったと賞讃。特にコクリ、クダラ、シラギなどの各種族が、日本民族の中で天皇家や各名家の祖となっていくという大胆な史観など、金達寿が調査の結果得た結論とすべて一致するという	安吾の新日本地理 柿本人麿[安吾史譚3]
1973年4月	無署名	坂口安吾が教えた“堕ち切る勇氣”とはなんだ?!	紙誌	週刊プレイボーイ(3日)	『定本坂口安吾全集』や作品集の文庫化など多数の刊行に伴って、安吾文学がブームになっていることを紹介。関井光男の談話として「ブラックユーモア的なところは安部公房、小島信夫、倉橋由美子に受けつがれている」とあり、唐十郎は「安吾の中にあるブラック・ユーモアは、彼の健康な肉体感覚をもとにして、病弱な処を鋭く衝くことで生まれたものだ。ボクも彼のこの発想を芝居に生かしている」と語っている	
1973年4月	江口清	レイモン・ラディゲと日本の作家たち	単著	(清水弘文堂刊)	「若かりし日の坂口安吾」(1970)、「坂口安吾と外国文学」(1972)を収録	
1973年4月	無署名	泡言録	紙誌	週刊読書人(23日)	「京都にいた文学仲間の〇氏」未亡人が安吾の未発表書簡20～30通を保管しているという情報が掲載されている。『坂口安吾全集』第16巻(筑摩書房2000)初収録の隠岐和一宛書簡および隠岐富美子宛書簡(全28通)は、この記事をもとに探索、発見されたものである。「泡言録」はコラムタイトル	吹雪物語 隠岐和一宛書簡 隠岐富美子宛書簡
1973年4月	川嶋至	閉塞状況を打ち破る活路―無頼派作家の現代に生きる意味	紙誌	週刊読書人(30日)	現代小説の衰退が叫ばれる中、安吾・太宰・織田ら無頼派の文学が新たに脚光を浴び始めたのは、「既成の価値観に依存した思考が有効性を失い、ことばのまったく無力化した情況こそが、彼らの息づく格好の舞台」ゆえの現象と述べる。川嶋は「彼らの作品は二流」にとどまり「芸術至上主義者でなかったことだけは確か」とみるが、「作品の総和が示す作家の人生総体がとりまなおさず唯一の傑作であるといった捨身の姿勢に、閉塞した現状を打ち破るひとつの活路が見出せるのではないだろうか」と締めくくっている	
1973年5月	(関井光男編)	坂口安吾研究Ⅱ	共著	(冬樹社刊)	荒正人「無頼派の文学」、石川淳「安吾のいる風景」、河上徹太郎「墜落論」その他などの作家論・作品論25篇と、田村泰次郎の小説「青春坂口安吾」、檀一雄「小説坂口安吾」、尾崎士郎の小説「睡眠薬と覚醒剤」、関井光男による研究文献目録一覧を収録。『坂口安吾研究Ⅰ』と同様、収録数が多くて利用価値は高いが、書誌情報に関しては誤りが多いため、適宜、当研究文献目録にて情報を確認するのが最善。収録作品は当目録の各備考欄に『坂口安吾研究Ⅱ』に収録」などの形で記してある。	
1973年6月	高木進	坂口安吾の新潟の住居とその周辺	紙誌	新潟大学国文学会誌	安吾の生家とその周辺の建物や風物を、土地台帳や戸籍など各種資料をもとに精密に跡づけたもの。関係者らの回想のたぐいは数が集まれば集まるほど食い違つて混乱するものだが、不動のものは何か、私情を交えず公平な立場で記しているのが信頼できる。安吾の叔母貞が新潟女学校で学んだ話(「母を殺した少年」のエピソードの元)など、ここで初めて知ることができる貴重な情報が多い。冊子『安吾の新潟―生誕碑建立にむけて』(2005八吾の会)に再掲された	母を殺した少年
1973年6月	川嶋至	「戦後」と無頼派の作家たち	紙誌	国文学臨時増刊	太宰が「無頼派(リベルタン)宣言」をしたエッセイ「返事」、安吾の「墜落論」、織田作之助の「宗教への手掛り」に共通するのは、権威や時代からの完全な自由ということと指摘。彼らには戦前からその志向があったことを、安吾のファルス作品などを引き合いに論じている。しかし、戦後数年を過ぎて以降の安吾作品は「濫作」により質が落ちたとして認めていない	墜落論
1973年6月	(森安理文・高野良知編)	坂口安吾研究〈叢書「二十世紀論究・近代文芸」〉	共著	(南窓社刊)	書き下ろし論考を中心に、26篇の安吾論を収録した研究書。巻末には「文献解題」として当時次々に刊行された坂口三千代『クラクラ日記』、庄司肇『坂口安吾』、檀一雄『小説坂口安吾』、浅田晃彦『坂口安吾桐生日記』、小野竜太郎『坂口安吾文がたみ 反逆と愛情』、奥野健男『坂口安吾』、森安理文『偉大なる落伍者 坂口安吾』、兵藤正之助『坂口安吾論』、以上8冊が詳細に紹介されている。年譜と参考文献付き。月報付き	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1973年6月	長谷川泉	無頼文学と坂口安吾	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	当時の安吾年譜のうち「幼稚園にはほとんど登園せず」などの誇張による誤伝ばかりをクローズアップさせたような伝記。「暗い生いたちが、人間形成上決定的な要素をもった」と捉え、親友長島萃の自殺未遂をくりかえした果ての死が「墮落への衝撃的触発」となり、そこから「墮落論」の「居直りともいえる思想」が生まれたとする解釈など、よくも悪くも独自のものである	
1973年6月	三枝康高	ファルス論について	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	安吾のファルス論を長々と引用し、「風博士」から「勉強記」「風人録」「朴水の婚礼」「金銭無情」「安吾巷談」へと安吾のファルス作品が発展していった経過を記す。安吾のファルス論を体現するように、主人公たちは散々な目にあうが、それは「文学のふるさと」で語った「むごたらしく救いがない」ことに繋がると説く。さらに「墮落論」にみられる「居直り(長谷川の前提論文と同じ否定的な表現を三枝も使用)」までも同じ線上に繋げていく、やや強引な立論	FARCEに就て 文学のふるさと 風博士 勉強記 風人録 朴水の婚礼 金銭無情
1973年6月	薬師寺章明	牧野信一と坂口安吾—その邂逅の経過をめぐって	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	安吾が牧野家を初めて訪ねた1931年8月から9月にかけての時期、大森山王に家があったと安吾は記し、牧野夫人や木村正治の回想でも同様に大森山王の時代とあるが、牧野年譜ではその時期、牧野は三田に転居していたはずなので、安吾や牧野夫人や木村の記憶違いと断定する。1931年2月に三田の住所から出した牧野書簡が残っており、これが決定的な証拠だと薬師寺は主張するが、日付スタンプが根拠ならその鮮明さがまず問われる。牧野が差出年まで記載していた場合でも、2月頃であれば前年と間違えた可能性がある。牧野自身、三田への転居報告のようなエッセイ「三田に来て」を『時事新報』1932年3月に発表している。最新の安吾全集第16巻に、牧野家初訪問後と思われる1931年9月3日付の山口修三宛書簡があり、「二人で真夜中に大森を彷徨ふてあるいた」とある。書簡資料としてはこちらのほうが信憑性が高い	牧野さんの死
1973年6月	馬渡憲三郎	評論と小説との間—無形の説話体について	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「文章の一形式」によって安吾自身の「文学の到達すべき地点はほぼ決定されていた」とする。この評論以前の安吾は「FARCEに就て」に「自縄自縛」されて行き詰まっていたとし、「表現への新しい方法をどうしても考えねばならない必然性」から「四人称」や「無形の説話者」を考え出したとみる。「雑文家」の道もそこから生まれたと。このように、安吾は自身の評論でまず文学理論を形成し、これに則って小説表現に置き換えていったという見方は独特だが、説得力があるかどうかは別問題。安吾のカタカナについても考察があり、「漢字の持つ「ヨソユキ」的な表情」が庶民生活とかけ離れている場合にカタカナを使用したという指摘は卓見といえる	文章の一形式 FARCEに就て 娯楽奉仕の心構へ
1973年6月	高野良知	坂口安吾論—「巷談」的発想について	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「安吾巷談」などのルポルターージュ作品は、傍系的に扱われやすかったが、「生活即文学という意志的な実践」が「新たな表現様式」を切り開いたと高く評価する。とくに過去の経験や肉体的な実感をもとにした感想を記すとき、「水を得た魚のように生き活きとして鮮かである」と述べ、「安吾の新しい日本地理」などでも歴史に傾いたものより「道頓堀罷り通る」などの「独特の庶民や生活を捉える」ものを「巷談的発想」として評価	安吾巷談 安吾の新しい日本地理
1973年6月	森安理文	坂口安吾論—「八方破れ」の正当な位置づけについて	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	安吾にあっては、芸術と実生活は密接につながっていると、その生活の基本姿勢は「八方破れ」であったとする。それは「生涯自己を偽ることを最も恥じた作家」ゆえであり、安吾の生き方をアウトサイダーと位置づけるのは間違っていると説く。たとえば、小川徹が「坂口安吾」(1967)で、結婚して子供をもった安吾の生活を「反俗」失格であり「通俗な家庭愛の肯定」に終わったと罵倒するなどの、浅はかな見方を痛烈に批判する	安吾巷談 私は誰?
1973年6月	磯田光一	坂口安吾—無頼昇天	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	『定本坂口安吾全集』1の解説として書かれた「作家論 無頼昇天—坂口安吾私観」(1968)の再録	
1973年6月	清水葉子	「風博士」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「風博士」は頭では理解不能で「感じる」ことしかできない、と安吾のファルス論をかりて語る。「特色はテーマよりもその文体にある」というが、文体の特色を深く掘り下げた論ではなく、内容紹介にとどまっている	風博士 FARCEに就て
1973年6月	荒川法勝	「黒谷村」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「黒谷村」は時に「風博士」と対照的な作品と捉えられるが、実は表裏一体のもので、これもリアリズム小説ではなく「放浪者の観念的イメージ」を描いたものと説く。世界の無意味さ、人間たちの無関係さなどの描き方に「戦後的な小説の意味を感じさせる」と指摘。作中に現れる「無」への志向は「ある意味では滅亡愛ともいえる本能」であり、これが「安吾の生涯のテーマなのではないか」とみる	黒谷村 風博士
1973年6月	庄司肇	「小さな部屋」をめぐって	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	初期の安吾は一作ごとに実験を凝らした。大きくは「ファルスの流れ」と「ふるさとの流れ」があり、特に後者の作品群を「方法化できなかったところに、安吾のくるしさがあったのではないかとみる。「小さな部屋」は、ファルスとみる人もあり、心理小説とみる人もあるが、数々の実験の初期集大成の感があり、安吾研究の上でも意義深い作品と説く。庄司肇『坂口安吾論集成』(沖積舎 1992)に再録	小さな部屋
1973年6月	佐野和子	「おみな」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「おみな」は私小説として捉えないほうが良いとし、「昭和六年頃からの不遇な時代において、安吾のいう「かなしみ」と「せつなさ」がテーマ的というよりも、作品構成の上で、定着した最初の作品として、けだし極めて有意義なもの」と批評	をみな
1973年6月	有山大五	「吹雪物語」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「吹雪物語」は失敗作などという「通説」に惑わされず、まずは虚心に読むべきと正論を衝く。この小説の奇妙さは、登場人物すべてが、行動を起こしかけるたびに退屈していく点にあると指摘。「すなわち現実を全面否定しようという目論見で構成された」小説だと。そもそも悪評の元になった安吾自身の「再版に際して」という文にいても、この小説こそ「作家安吾の脱け殻として本物である」と箱書きさえ残しておいたようなものだとして、小説の前進性を説いている	吹雪物語 再版に際して
1973年6月	松本鶴雄	「紫大納言」論とその宿命的位置—ファルス・あるいは坂口安吾の詩と真実	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「墮落論」にも感銘を受けなかったと松本は述べ、戦後の安吾は世間に受けることだけを目指してダメになったとする。戦前の「紫大納言」にはファルスのよさがあり、歴史小説でもあると論じ、作品の背後には「人生の落伍者であり、いつも敗け犬であった安吾」が見え隠れすると、一応は褒めているようである	紫大納言
1973年6月	小川和佑	「木々の精、谷の精」—坂口安吾のイデオロギ	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「木々の精、谷の精」は、安吾が「純粋に美学的な意図」をもって「最も美しい想念を一編の小説に定着させた」重要な作品であると批評。初期の「ふるさと」に寄る讃歌につながる作品で、初期作は三好達治ら主知主義文学の修辞を自然にとりこんだものだったが、「木々の精—」はその三好の編集する「文体」に発表されたのも偶然ではないとし、「吹雪物語」の「失敗から西欧式のフォルムに立ち戻ったもの」とみる	木々の精、谷の精 吹雪物語 ふるさとに寄る讃歌
1973年6月	土屋慶子	「勉強記」—風俗化されない魂について	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	安吾の自伝的小説は、執筆時の「現在を証明するための粉飾的な資料である」(1972 森安理文)という評言を是とし、その意味で「二十一」よりも「勉強記」のほうが「はるかに文学的香気が高い」と批評。過去の体験をもとにしているのでも、とすればセンチメンタルな要素がにじむところを、ファルスの力で「厳粛化」することに成功したとする	勉強記 二十一

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1973年6月	竹内清己	「文学のふるさと」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「文学のふるさと」は安吾文学の本質論だとい、その本旨を実存哲学と仏教の「空」論の両面から解明せんと試みたもの。結論は「人間をぎりぎりの生の実存において見、その存在が「空」となるまで透徹させて見たところに生まれる、孤独の覚醒であり、その象徴、形象である」となる。この世界観を最も見事に体現した作品は「紫大納言」だとみる。研究テーマは壮大で面白いが、短い紙数でもあり、うまく説明できたとは言えない	文学のふるさと 紫大納言
1973年6月	高橋春雄	「日本文化私観」と「墮落論」の間	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	戦後派の左翼系文学者たちは、戦前から戦後にかけて明暗の相当な屈折を経て思想を形成したが、安吾には戦前戦中戦後と屈折や変節がなく、それゆえ当時の20代の若者たちの圧倒的な支持を得たとみる。安吾思想が確立された「日本文化私観」の「実質」主義は、「合理と背理でなくて、超理といふべき」ダイナミックな理論で組み立てられており、その底には禅にも通じる「自己放下」というような精神が纏綿しているように思える」と批評	日本文化私観 墮落論
1973年6月	森磐根	「白痴」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「白痴」の主人公は、「自己崩壊の意識に苛まれ」「最初から負けることを約束されていて、その悲哀から逃れることはできなかった」「いわば、猿楽狂言に出てくるもどきの役のようなものである」と読み解く。もどき役者の虚構には、「自らの微力の嘆きを含む私小説的な発想」もあるため、その底に「弱者のまこと」や「物のあわれにふれてゆくもの」があった、それゆえ人気を博し、敵対する文壇の仲間にも喝采されたとみる	白痴
1973年6月	石田一男	「風と光と二十の私と」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「私小説を正面きって糾弾した」安吾がなぜ自伝的小説を数多く書いたのか、と問うことから始めるこの論文は、最初の設問がまず間違っている。檀一雄や森安理文の著書を参考に「安吾にはまず文学の「仮構」があって、次いでそれを実証する人生の設定があった」と述べる	風と光と二十の私と
1973年6月	矢島道弘	「私は海をだきしめていたい—肉体の精神化」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	安吾が自伝的小説と語った作品群と「私は海をだきしめていたい」などの現代小説について、なんら変わりないものと主張、「いずれも安吾のある時期の表白である」とする。安吾の「いつこへ」の付記を拡大解釈して、自伝的小説群は全部、矢田津世子を書くためのものだと誤読する。その視点から演繹的に解釈していくため、「白痴」の女は「いつこへ」の女と重なり、「私は海を—」の女は矢田津世子と重なるなど、テーマへの強引な引きつけがみられる	私は海をだきしめていたい いつこへ 白痴
1973年6月	桂英澄	「大阪の反逆」—織田作之助の死	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「大阪の反逆」の内容を正確に読み解いたもの。織田作之助は「勝負を度外視してまで、その可能性に賭けた坂田(三吉)の生き方と芸風に渾身の喝采を送った」のに対して、安吾は織田が東京と大阪の「対立を存在理由とする限り、亜流の低さからまぬがれることはできない」と厳しく論難した。そこから「彼の魂の高貴さと、生に対する堂々とした姿勢」をみる事ができるという	大阪の反逆
1973年6月	吉田熙生	「教祖の文学」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	安吾が小林秀雄と自分を比べ「似て、似きれない」と言った、その類似点や相違点を細かく検証してみせた論文。プロレタリアと違う場所から出発した出自が似ており、「強靱な生活者」らしい無類な文章を書く点も似ている。「日本文化私観」や小林の「無常といふ事」を対照的に論じながら、似ていないのは「小林が現代から、現実から、生活から、そして俗悪から早く身を引き過ぎた、という点」で、安吾はそこを厳しく衝いたと説く	教祖の文学 [対談] 伝統と反逆 日本文化私観
1973年6月	松田悠美	「桜の森の満開の下」の鬼	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「桜の森の満開の下」の「女が鬼に変ずる魔術は、あたかも能において前シテが後ジテで鬼に変ずるがごとき構造をもっている」として、能に現れる鬼の類型を七つほど挙げる。安吾のは「鬼ひと口」タイプで、「山姥の系譜にあるかもしれず」「女に与えられた巫女的役割」もそこから出てきたのかもしれないと考察。首遊びの場面には「サロメ」の影響もみられることを指摘し、「文学のふるさと」を、極めて絵画的にまたファルスの構造そのままにデフォルメした、秀れた「現代説話」と賞讃	桜の森の満開の下
1973年6月	伴悦	「青鬼の禪を洗う女」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「生きることは難事業」、「生きることが、ただ、全部」という「青春論」の安吾の言葉を援用して、戦後の安吾作品に描かれた女性像を順に概観し、「青鬼の禪を洗う女」のサチ子は「坂口安吾宿願の霊肉一致を、一挙にみだり得た理想の女であった」とみる。この作品によって安吾は「おそらく生涯における最後のぬくもりを凝視し遺した」と賞讃。当時の左翼評論家たちによる批判は当たらないと説く	青鬼の禪を洗う女
1973年6月	川崎浩繁	「推理小説について」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「不連続殺人事件」は、安吾が「私の探偵小説」で謎解きのルールとして主張した項目のうち、殺人の動機の面と、その動機が読者にあらかじめ与えられているか、という2点でやや不十分だとしつつも、「みずから庶民生活の発想を身につけることにおいて庶民文学を意図した」ものとして、安吾文学の中でも重要な作品とみる。すべての殺人の凶器やトリックを全部ネタバレしているので、未読の場合は要注意	不連続殺人事件 私の探偵小説
1973年6月	吉田勉	「信長」と「梟雄」	共著	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「信長」とその派生作品「梟雄」とは、史書を綿密に読みこんで人間をつくりあげており、その後の戦国小説の「原典たる地位を失わない作品」だとい、人間を見ぬく力、片々たる古記録から人間を推理する目の確かさは驚歎に値すると絶賛。その文学世界は「この世とは、マゴコロをつくして生きることが全てだ」という一節に集約されると説く	信長 梟雄
1973年6月	坂口三千代	未完の小説	月報	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	「信長」の連載が中止になった理由として、当時、印税はすべて税務署に差し押さえられてしまうため、単行本は出さず原稿料のみで生活していたが、新大阪新聞社からの稿料支払いは遅延しがちで困り果てたためだという。また、安吾は足利尊氏の小説化も考えていたようです。桐生近辺の古墳めぐり、鶏足寺や足利学校跡を訪ねたのも取材のためだったろうと推測している。坂口三千代『追憶 坂口安吾』(1995)に収録	信長
1973年6月	巖谷大四	坂口氏のこと	月報	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	1969年1月、『定本坂口安吾全集』月報に発表した「坂口安吾氏のこと」の再録	
1973年6月	福田蘭童	競輪事件と安吾の身辺	月報	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	安吾、三千代と共に競輪観戦して不正を確信した話、後には蘭童が暴力団とつながっているのではないかと安吾に怖がられた話、安吾に釣りを勧めた話など、「続うわばみ行脚」(1956)「競輪事件の頃」(1973)と同じ内容で、空手の道場や甲賀流忍術の藤田東湖の家を訪ねた話は「坂口安吾の裏ばなし」(1968)にも書かれている。『坂口安吾全集』別巻に収録	
1973年6月	田村泰次郎	含羞の人 坂口安吾	月報	『坂口安吾研究』(南窓社刊)	1956年7月の「含羞の人」、1967年1月の「含羞のひと—若い日の坂口安吾」と重なるタイトルで、ほぼ同じ内容の新稿	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1973年7月	奥野健男	坂口安吾・風化と石化—この矛盾した純粋な巨大な存在	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	娯楽読物も多く書いた安吾は「失敗作の多い二流の文学者」としつつも、その魂は「型破りの巨大さをもっている」と非常な愛着を語る。「安吾の青春は、時代を超越した、しかし人間が人間であるかぎり、通らなければいけないままの青春の闘争をほとんど極限まで行なったと言える」、だからこそ、時代を経て何度も甦ってくるのだろうと	
1973年7月	野島秀勝	坂口安吾論	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「いづこへ」「青春論」「風と光と二十の私と」などで安吾はくりかえし「魂はなにものによっても満ち足りてはならぬ」といい続けた。矢田津世子との恋が成就しないのも『吹雪物語』が完成しないのも、安吾自ら「満ち足りる危険からのがれ」るためであり、「安吾の傑作に登場する女が不感症の娼婦型の女か白痴かにきまっているゆえんもそこにある」と説く。ユニークな視点で安吾の本質に迫り、説得力がある。『文芸読本 坂口安吾』に収録	いづこへ 青春論 風と光と二十の私と 吹雪物語
1973年7月	磯田光一	文化主義への反逆	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「日本文化私観」で「京都の寺」よりも「電車」の必要性を重んじた安吾には、文化主義への嫌悪があったとみる。伝統やあらゆる主義主張の否定ともいえるその精神は「愚劣の絶対性」「生の絶対性」だという。磯田が「最高傑作の一つ」という「夜長姫と耳男」でいえば、ヒメを崇拜して彫ったミロクが「文化主義」を象徴するダメなもので、バケモノが「文学」つまり「生の絶対性」を象徴するものとなる	日本文化私観 夜長姫と耳男
1973年7月	渡辺広士	虚構への意志	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	戦後の代表作群よりも「木枯の酒倉から」「風博士」などのほうが独自性が高く、現代においてもなお「これほど類似品をもたない作品も日本文学史上に珍しい」と評価。ダダやシュールレアリスム、ロートレアモンの詩句などのめじりも見られるし、聖と俗の混淆のなかにはインド哲学やアジア的な観念も混じっているとみる。「FARCEに就て」には「観念のアナーキスト」志願の思想もあるとする	木枯の酒倉から 風博士 FARCEに就て
1973年7月	笠原伸夫	説話的発想	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「説話とは常ならざる、奇想天外な挿話に耳を傾けるところから出発するのだが、奇想天外をつきぬけることによって、人間存在の基本的なありようをつかみとろうとするものでもある」と説く。その伝でいけば「日本文化私観」なども「説話的発想」で書かれていると指摘。奇想天外な挿話と、特にその「語りくち」の自在さにおいて、そうだという。安吾の文体とテーマを包含するユニークな視点といえる。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	桜の森の満開の下 夜長姫と耳男 紫大納言 日本文化私観
1973年7月	桶谷秀昭	戯作精神	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	戯作精神とは本来、儒学者たちの強固な規範を嘲笑しながら、規範をもたぬ自分をいっそう嘲笑する、いわば消極的な態度だったとし、安吾の態度はそれとかなり違うとみる。「日本文化私観」の伝統否定にしても、「デカダン文学論」や「教祖の文学」などで漱石や小林秀雄をこきおろしても、批判が浅薄で、納得できない部分が多いと批判	日本文化私観 デカダン文学論 教祖の文学
1973年7月	利沢行夫	「安吾巷談」の様式と感情	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「安吾巷談」で最も面白いのは政治問題を扱ったものだという。右翼も左翼も、組織は権力をうみだす「全体主義的な性格をもっている」、そこを安吾は攻撃するのだが、当時の高見順・平野謙・宇野浩二による「創作合評」では全く本質が論じられなかった。安吾の共産党理解の正しさとか、党を批判するならまず姿勢を正せとか、文学とは別の方面で語られたのみ。巷談は「庶民的な感情からの戦後批判」なので、いわゆる知識人層には理解できない文章だったと説く	安吾巷談
1973年7月	諸田和治	文体の特質	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「デカダン文学論」で島崎藤村や横光利一の小説を「不誠実」と呼んだことについて、それは安吾が彼らの型にはまった文体を嫌悪したのだと規定する。この規定によって、安吾が本来いいたかったはずの肉欲や本能による苦悩の問題が消え去り、すべてが記号論の解説にすりかわってしまっている。要旨をつかみにくい論文	デカダン文学論
1973年7月	森本和夫	笑いと風狂	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	安吾をダダイストとして捉え、「文学」に「意味を認めていない安吾」には「薄手」な文学論しかないとし断じる。漱石を認めない安吾には「認識不足ないしは偏見」しかなく、「日本的なるもの」も徹底して嫌ったと説くが、前提自体が「認識不足」のひどい文章。ただし「風博士」だけは好きなようである	風博士 デカダン文学論 FARCEに就て
1973年7月	大久保典夫	俗と反俗	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	戦後派の文学、とくに梅崎春生の「桜島」などには、戦争のさなかに特攻兵を嫌悪し、自分一人を尊い被害者だったとする意識がみられると指摘。反して安吾の「真珠」などでは、「九勇士との連帯感」が感じられ、「日本の運命を自己の運命として生きていた」姿が浮かぶという。「墮落論」にみられる一種哀切なトーンは、大日本帝国とともに滅びた醇風美俗へのノスタルジアといったおもむきがつよいとの指摘も独特で、誤解を生みやすい表現だが、「墮落することによって聖性希求はいっそう熾烈になる」ことを中原中也の「汚れつちまつた悲しみ」を引用して補強するあたり、示唆に富む論考といえる	真珠 墮落論 日本文化私観
1973年7月	饗庭孝男	自然と超越	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「日本文化私観」で賞揚される「まっとう」という言葉には「本質主義者」による「深い精神性の要求」があるとみる。寺よりも坊主が必要とは、「精神的なことが第一でそれを入れる器は結果的なものだ」ということで「換言すればそれはストイズムの問題」だとみる。「墮落論」でも、「自然的存在」としての人間を見ており、「私は海をだきしめてゐたい」など「彼の「自然」観にはそこに合体感を覚えるような本質的に内的な交感がある」と批評。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	日本文化私観 墮落論 私は海をだきしめてゐたい
1973年7月	松原新一	夢と美意識	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「をみな」などにある母を憎悪した部分を安吾の性格の根幹とみる。現実を嫌悪しつつげた安吾は牧野信一と同じように夢の中だけに生きたとし、「墮落論」は、そのように、現実の汚れや濁りからは、目をそむけていたいタイプの人、「無の清潔」をこそ本当は憧れているようなタイプの人、現実の妖婆のような母をではなく、虚構のふるさと長崎の非在の母をこそむしる夢みずにはいられぬようなタイプの人によって書かれた文章なのだ」と記すあたり	をみな 墮落論 白痴 牧野さんの死

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1973年7月	庄司肇	安吾文学における女人像	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	安吾の周りにいた女性たちは断片的には作品内に現れても、たとえば『吹雪物語』に登場する女性全部が矢田津世子のどこかしらを投影しているだろうとみる。女性蔑視ともみえる女性観は説話形式の作品で変貌を遂げが、その女性像として「自画像であり、あるいは女というものの観念化による人間像でもあり、安吾文学の秘密と永遠性」はそこにあると述べる。庄司肇『坂口安吾論集成』に収録	吹雪物語 いづこへをみな 紫大納言 桜の森の満開の下 母の上京
1973年7月	兵藤正之助	坂口安吾の家系と風土	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	『五峰余影』(1929)『坂口献吉追悼録』(1966)をよく読みこみ、コンパクトにうまく紹介している。安吾の父は若き日に無謀な出奔を試み、「最も嫌った事は誇大と矯飾と虚偽とであった」、つくる漢詩は「大伽藍の如き」だが「荒作り」だったなど、まるで安吾自身のことのように指摘。兄献吉についても、生前の安吾との交流をいかに大事にしたかが伝わり、やはり安吾と通じる気質を感じると記す	
1973年7月	森安理文	昭和十年代文学と坂口安吾	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	編集部に提示されたタイトルが不審だったらしく、戦争の色濃い昭和十年代の文学界にあって、安吾作品で「特筆すべきものは、「真珠」と「日本文化私観」ぐらいのもの」と断じる。現実には説話小説、歴史小説、自伝、新傾向のファルスなど、新しい方向で多くの傑作が生まれた時期だったので、どうしてこれを無為の時代とみたのか、不可解の極み	真珠 日本文化私観
1973年7月	高野斗志美	文明批評家としての坂口安吾—日本的な反日本の異端	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「日本文化私観」などで、あらゆる文化に潜む「虚偽の行動様式と保守性、その呪縛力の全体を、安吾は徹底的に告発」したと述べる。そのために「文学」を用い、死なねばならぬ人間の「闇」の部分の根底にしたとする。「一貫して、日本の知識人の思考体系にとっては死角にあたる場所を生きぬいた」ために、花田清輝ら戦後派が挑発的に安吾批判をしたように、知識人層には理解できない思想であったことも記す	日本文化私観 文学のふるさと 新しき性格感情 FARCEIに就て
1973年7月	小久保実	戦後文学史のなかの坂口安吾	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	戦後派作家たちは「いずれも方法論をもっている」が、無頼派作家たちは感情にまかせて書くだけで「自己追究が可能な文学世界を構築できなかった」、文学として低いものだったとみる。「戦後文学史」というテーマでありながら、戦後派の賞揚に偏し、安吾を否定した言辞ばかりが採り上げられた、ひどい論文	
1973年7月	柘植光彦	坂口安吾と同時代作家	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	安吾と太宰、織田作はそれぞれ全く似ていないので、同じ「無頼派」でくくるのは間違っていると、安吾には太宰文学は理解できなかったらと根拠なく語る。田中英光は「わが水滸伝にみられる天衣無縫の明るい豪傑像が、安吾の「信長」とよく似ていると指摘。石川淳や花田清輝も「文学的感性の根源的な部分で」似通っていると筆者は感じるらしいが、最も安吾に似ているのは野坂昭如だとする。主観に頼った感想で説得力は弱い	信長
1973年7月	東郷克美	「風博士」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	ファルスは「絶望自体を救済に逆転する」文学形式であり、「風博士」も自意識の錯乱と狂気そのものを文学化しようとするものであったとする。つまり「風博士と蝸博士の対立は安吾自身の内部の混乱と分裂の形象化」であり、「絶望と虚無の象徴である(風)の名が作品に冠せられねばならなかった所以である」と説く	風博士
1973年7月	山田博光	「黒谷村」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	初期安吾作品にはファルスと散文詩的な青春小説の2系列があり、「黒谷村」は後者の代表で、「求道とデカダンスのはざまに悩む若き坂口安吾の青春小説である」と説く。村の名は法然がらみの命名と推測し、「安吾の求める桃源郷であり浄土であるといってもよいのではなからうか」と分析	黒谷村
1973年7月	薬師寺章明	「吹雪物語」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「吹雪物語」のあらすじや成り立ちを解題的に記し、読者に感情移入させない点で「失敗作」の通説は当たっていると。ただし、森安理文、庄司肇らによる再評価の言辞も紹介。近代小説の概念からは構成や文体が欠点とみえる部分も、安吾固有の「性格の一つ」であり、「たぐいまれな強靭な観念力を駆使した、長編エッセイであり、唄である」と批評	吹雪物語
1973年7月	大河内昭爾	「日本文化私観」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「日本文化私観」は、安吾自身が「生き方を思想的に定着させた作品」と称する重要なエッセイで、「既成概念の打破」という一点において、きわめて鮮烈な主張をもち、倫理的志向をきびしく息をつめて要求する性格のもの」と批評。「合理主義と精神主義の相反する主張の八方破れの構えながら一点動かせぬところが今もって光る」と読む	日本文化私観
1973年7月	栗坪良樹	「白痴」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「白痴」のあらすじを追って、「インテリ伊沢」が世間に疎外感をもち、「白痴の女に自分の存在のすべてを鏡に写すごとくに写して」ただ「歩きだすことにしよう」と決意しただけの話とする。「戦争はかく一人のインテリを彷徨させ、苦しめるものだ」と結論づける	白痴
1973年7月	荻久保泰幸	「墮落論」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	戦争中の倫理に対する戦後のアンチテーゼに、安易な便乗やサロン思想のおいを感じて攻撃した太宰と同様に、安吾は「墮落論」でアンチに対するアンチ・アンチテーゼを展開したと説く。「自主的思考」を持って、「人間個人にかえれ」という「卓越した文明批評」だったが、ジャーナリズムからも世間からも誤解されることが多かったと記す	墮落論
1973年7月	鳥居邦朗	「桜の森の満開の下」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「桜の森の満開の下」の山賊は「安吾の自画像であろう」とし、「紫大納言」や「恋をしに行く」なども引用しつつ、「安吾の主人公たちは、精神的には女の美に対して、じつに純情であり、可憐である」と読む。そして「真の美は、いやおうなしに人間を絶対の孤独に追い込むもの」であり、「人間を狂気に追い込むもの」であるとする	桜の森の満開の下
1973年7月	磯貝英夫	「不連続殺人事件」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	安吾の純文学長篇が多く未完であるのは「形而上の問題を追求しようとして、けっきょく、まとまらなくなってしまう」ためとし、「不連続殺人事件」が長篇としてまとまったのは、「目的を低く限定したこと」が功を奏したとみる。乱歩ら本職が傑作と呼ぶのなら推理小説としての出来はよいはずだとしつつも、安吾にとって「暑氣払い」の遊びでしかなかったので文学としては評価できないとする	不連続殺人事件

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1973年7月	神谷忠孝	「風と光と二十の私と」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「風と光と二十の私と」に描かれた代用教員時代に、「世を捨てる」ためには野心とか名誉欲などの現世的なものを満たす以外にないという結論に達して東洋大学に入学したと説明するが、納得しにくい。他の文学者たちがそうだから、と書くが、それも理由にはならない。さらに安吾は私小説を否定したとみており、本作についても「フィクションとして読むべき」と主張する	風と光と二十の私と
1973年7月	中石孝	「夜長姫と耳男」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「夜長姫と耳男」の主題について、「文学のふるさと」を引用しながら、「無飾の語り口には、民話を読む素朴なおもむきがあり、宝石の冷たさに輝きながら、むごたらしいことが語られる。そして、美しさは生存の孤独とからまり、いよいよ光り輝いてくる」と説く	夜長姫と耳男 文学のふるさと
1973年7月	久保田芳太郎	「信長」	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	「鉄砲」「織田信長」の2作品で描かれた「近代精神と実証主義の体現者」、「全的な遊び」に死生を賭した理想主義者にしてニヒリストなどの信長像が、長篇「信長」に「そのまま継承され、集大成されている」と批評。ただし、安吾自身は「いつも二流の人を自負していた」という。安吾がどこでどう発言したことを言っているのか、根拠は不明。信長が陽の自画像で、如水が陰の自画像であったとみる	信長 鉄砲 織田信長
1973年8月	芳野昇	安吾を読む—生活者の思想	紙誌	北方文学	「安吾の暗さには戦争の持つ瞬時の暗さとか、目先の見えた暗さには染まらない明るさがある」とし、それは「生活への愛着を基盤として」いるからとみる。小林秀雄とよく似た個性ゆえに「強烈な自我」をぶつけ合った2人の対談の面白さを読み解き、2人とも「逆説」や「詭弁」を嫌うので、彼らの作品を読む際は「愚直なほどの素直さが必要となる」とあるのは至言	教祖の文学〔対談〕 伝統と反逆
1973年9月	野毛修介	坂口安吾も一目置いた小田原の奇人	紙誌	噂	「真珠」に登場する小田原の看板屋「ガランドウ工芸社」の山内直孝について、インタビューを交えて活写した逸話集。山内宅には辻潤もよく居候していたといい、安吾、三好達治、辻、山内と集まって飲んだりしようすなどが描かれている。出来事の年代など不明な点は多いが、人間関係や地理など詳細な情報が多く、貴重な資料といえる	真珠
1973年9月	奥野健男	解説	解説	吹雪物語〈潮文庫〉	「吹雪物語」が読みにくいのは、時間や空間が錯綜しているためであると指摘。「自分の半生を、家の歴史を、多くの時代も場所も違う人々も事件もすべて現代の吹雪の新潟に集めて」「すべてを表現しようとする全体小説を企てている」とし、その試みは「ヌーボー・ロマンあるいはアンチ・ロマンの先駆」ともみる。暗い青春を描く「詩として」は成功したが、長篇としては失敗だったと結んでいる	吹雪物語
1973年9月	川嶋至	解説	解説	安吾巷談〈角川文庫〉	「安吾巷談」は、時事的な話題をとりあげているので、早い時期に古びてしまうことを難点としながら、話題の現物が忘れ去られてもなお本作が面白いのは、「安吾のものの見方感じ方が、総体として今日のわれわれに強く働きかけてくる」からだと高く評価する	安吾巷談
1973年10月	川嶋至	解説	解説	安吾史譚〈角川文庫〉	「安吾史観は人間洞察に源を発しており」「史料上の的確な事実」よりも「文学的真實」を優先するため、史料の乏しい時代や人物を描くほうが「生彩を放っている」とする。したがって川嶋が最も推すのは「柿本人麿」であり、続いて「道鏡童子」「天草四郎」となる	安吾史譚
1973年12月	尾崎秀樹	解説	解説	明治開化 安吾捕物帖〈角川文庫〉	「推理的な部分よりは凡俗や世相にウェイトがおかれており」勝海舟の目をとおして「開化期ならぬ戦後社会を批判していた」とみる	明治開化安吾捕物
1973年12月	大久保典夫	坂口安吾—風狂と無垢	紙誌	国文学	「石の思ひ」「青春論」などを引用しつつ、安吾は「あまりにも無垢であり純潔でありすぎた」「古風な人情家で、あるいはふるさと(母)の家で自分が迎えられることを心の底でははげしく希求していたのかも知れない」と記す。その願いが容れられなかったから「すべてを捨てる放浪の半生を生きた」のであろうと	石の思ひ 青春論
1973年12月	助川徳是	坂口安吾	紙誌	国文学臨時増刊	それまでの安吾研究史や伝記本などを紹介、今後の展望を述べたもの	
1974年1月	川嶋至	解説	解説	安吾新日本地理〈角川文庫〉	ヒダのタクミがその名を必要としなかったように、「安吾の新日本地理」や「安吾巷談」も芸術らしさを求めない一種の雑文で、「安吾はただ無心に文章を書き続けた」と説く。「どこの誰にも、なんの気かねもしていない。読者にすら媚びるけはいはなく、爽快なまでに無心なのだ」と手放して絶讃している	安吾の新日本地理 安吾巷談
1974年2月	周東隆一	坂口安吾が見出した平穩の地	紙誌	噂	桐生の在野の考古学者で、安吾と一緒に古墳めぐりなどした人による回想文。安吾が桐生に住むキッカケとして周東との縁も大きかったことがよくわかる。考古学のことに関しては絶対に安吾に譲らない周東の気骨が安吾に気に入られたこと、南川潤や境野武夫と毎水曜日に安吾宅へよばれた当時のようすなどが描かれている。又聞きの話については事実でないことも散見されるが、ここでしか語られない事実も多い、貴重な資料	
1974年2月	金達寿	古代史家坂口安吾	紙誌	東京新聞(14日夕)	「古代史家坂口安吾の復活」(1973)とほぼ同じ内容。ここでは「道鏡童子[安吾史譚2]」を多く引用しているのが新しい点	安吾の新日本地理 道鏡童子[安吾史譚2]
1974年2月	渡辺恒美	安吾再読1「人間の本質問い直す—「墮落論」の現代的意義」	紙誌	新潟日報	「墮落論」の内容とその価値をわかりやすく読解。「絶望的な暗さをぎりぎりのところまで追いつめてゆくと、逆にその暗さが光を生ずる」といった安吾の人生観は強靱なものだと説く	墮落論
1974年2月	田中栄一	安吾再読2「根源的な倫理を問う—「白痴」ほかの戦後文学」	紙誌	新潟日報	「白痴」について平野謙(1946)や本多秋五(1949)がその虚無的な結末を批判したのはのははずれで、それは「墮落論」で説かれた「人間の原点へ回帰するもつともたしかな証し」といえると評価。「外套と青空」「女体」「恋をしに行く」「いつこへ」なども同様で、性をテーマとするのもそれが「まさに生の証し、人間存在の基盤」だからこそと説く	白痴 墮落論 外套と青空 女体 恋をしに行く いつこへ

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1974年2月	高木進	安吾再読3「自己えぐる絶望の書—苦洪の総決算「吹雪物語」	紙誌	新潟日報	「吹雪物語」には新潟の地名や場所名が多く出てくるが、「作品は風景を見ず、いつも安吾の心の中ばかりを見続けている。だから気も狂わんばかりにどんよりしたくもり空の下で“厭世港市”新潟は、実は安吾の心なのである」と読み解く。4人の主要人物も、区別のつかない安吾の分身なので「絶望的な安吾の心の中に迷って行くばかりで」それゆえ「この“絶望の書”は、あやしい魅力を放ち続けている」と深い読みを提示	吹雪物語
1974年2月	芳野昇	安吾再読4「個人主義の実践説く—「日本文化私観」今こそ必要」	紙誌	新潟日報	「自由自在な個人の確立を優先」させてこそ「日本文化が成立するのだ」と説く「日本文化私観」を賞讃。現代社会には安吾のいう「個人」はほとんど見られない、という。「日本的」とされる文化の虚妄をあばく徹底した「合理主義」も、今こそ必要な時ではないかと説く	日本文化私観
1974年2月	前川嘉男	安吾再読5「グローバルな“巨人”—日本芸術の小ささ知る」	紙誌	新潟日報	文学青年だった頃、安吾「外套と青空」とサルトル「嘔吐」に衝撃を受けたと回想。「腕つぶしの強い悲壮な巨人が、遠くの方からやってきた」感じがし、「インドの思索者や北ヨーロッパの作家」に似たものを感じたという。日本文学の枠に収まらない「たいした巨人だ」と讃える	外套と青空
1974年2月	伊狩章	安吾再読6「突き放し、愛した風土—雪国の無気力さ知る故に」	紙誌	新潟日報	安吾は父五峰の巨大な資性を遺伝的にもっており、新潟の町のリアルで頹廢的な雰囲気の中で、その性格を形づくっていったとみる	
1974年3月	船知慧(ふなち・さとし)	続墮落論—安吾への接近と離脱	単著	三一書房	少年時代に敗戦を迎えた著者の自伝的小説。高校の時に安吾の「不良少年とキリスト」に衝撃をうけて安吾の本をむさぼり読み、作家を志すようになったという。『探偵クラブ』という「三流雑誌」の記者になり、伊東の安吾邸をゲリラ訪問、トイレで出くわした安吾にインタビューを頼むと気軽に快諾してくれる。出まかせて「文学は何かの役に立つ」か否か問うと、「愚問だなあ」と一笑に付され、そんなことは「読者の方で考えればいいことだ」といわれる。その後、銀座の「ルパン」で偶然会って話しかけたこともあり、1951年6月、瓶山事件の現場に安吾が向くと聞いた折には『探偵クラブ』でも取材に行き、8月号に安吾の写真をトップで載せたという	
1974年4月	兵藤正之助	坂口安吾・人と文学について	解説	信長(旺文社文庫)	安吾に特有の孤独の相は、幼少期に育まれ、仏教研究の時期に深められたとする。矢田津世子との恋愛においても、会わないでいた3年間に孤独の精神が理想の女体を創出し、現実からは痛みを得るばかりであったことを指摘。終生一貫した孤独の相を探ることにより、晩年の諸作も再評価が望まれるとした。巻末に代表作品の解説も執筆	
1974年4月	大久保典夫	放浪と淪落と—作品解説	解説	信長(旺文社文庫)	安吾の生涯と全作品を通観しようとした概説だが、内容のバランスが悪い。代表作として初期ファルス小説のあらすじを長々と書くが意味はつかみにくいし、「墮落論」などの論旨説明も誤解を招きやすい書き方をしている	
1974年4月	佐橋文寿	坂口安吾 その生と死	単著	(春秋社刊)	安吾の全体像を、文学者・思想者・実存的な生を生きる知識人という三つの側面からみるべきと説く。生い立ちを概括する章では、「故郷喪失の漂泊者安吾が探し続けた“ふるさと”の世界」は「精神分析的に言い換えれば“死の衝動”というもの」と説き、翌年の柄谷行人「日本文化私観」論を先駆ける。そのほか、安吾の「良識人の素顔」、「時流に超然たる性格」、「人間好き」などの側面から人と文学を読み解く。「吹雪物語」を「散文家安吾の出発点」とし、ここで「壮大にして徹底的な自己解体」が試みられたという。安吾の著作は「人を実存的な自己燃焼に誘う」と説く。1980年に再刊	吹雪物語
1974年5月	伊狩章	坂口安吾と自由都市新潟—安吾の背景・その1	紙誌	新潟大学国文学会誌	安吾と会津八一とは「その自由奔放なところ、個我の強靱、激越など共通する点が多い」とし、これを「下越型越後人の一性格」と考察。そのほかは、同年2月発表の「安吾再読6」とほぼ同じ内容	
1974年6月	高木彬光	解説	解説	不連続殺人事件(角川文庫)	乱歩の指名により、生前未完に終わった「復員殺人事件」の続篇を高木が書き継ぐにあたって、メイン・トリックを安吾から聞いていた三千代夫人にそれを聞いたところ、全くひどい内容で、そのまま書けば失敗作になると思ったと回想。その思い出があるため、安吾がもし「復員殺人事件」を完成させていたとしても「不連続殺人事件」には及ばなかったろうと述べる	不連続殺人事件 復員殺人事件
1974年7月	奥野健男	解説	解説	昭和国民文学全集25「坂口安吾集」(筑摩書房刊)	奥野健男「坂口安吾」(1972)などで繰り返し語ってきた内容と同主旨。安吾作品には失敗作のほうが多いが、日本で最も「巨大な文学者」だったとする。「安吾の精神の振幅は人間の極限を超えていた。見てはならないものを見、感じてはならないものを感じてしまった」と説くあたり、「評論」よりも「詩」に近い。1978年に増補新版第30巻として再刊	
1974年8月	十返千鶴子・田辺茂一・坂口三千代	鼎談「故人のこと」	紙誌	風景	3人が互いに近況報告する中で、三千代は井上ひさしと安吾に似た印象を受けていること、司馬遼太郎の「国盗り物語」には安吾の影響がありそうだという読書感想を述べる。また、毎朝安吾と一緒に散歩して「おしどり夫婦だなんて近所の人にいわれて」いた話を紹介。坂口三千代「安吾追想」に収録	
1974年8月	久保田芳太郎	戦後における無頼派文学—いかにして悪は可能か	共著	『無頼派の文学—研究と事典』(教育出版センター刊)	「無頼派文学の特性ないし本質は反と負である」とし、そこから現実に対して「自己の全てを賭けた、それこそ捨て身の」反逆をおこなったと説く。彼らの文学の基底にエロスの命題があるのもそれゆえであり、エロスを介して「人間の存在自体」を提示してみせてくれたと述べる	
1974年8月	谷沢永一	無頼派の批評精神—正論家・坂口安吾	共著	『無頼派の文学—研究と事典』(教育出版センター刊)	「思考者としての坂口安吾は、その表現活動の最も早い時期(『言葉』編輯後記)から全生涯を通じて「まったく変わることなく徹底的に一貫して脇目も振らず我が信条を固執し」続けた「熱塊」であったと論じる。常に文壇の権威に牙をむいたのも、文豪たちが真の人間の姿を誠実に追求していないからだ、強烈な正論を突きつけただけの話であったことを確認。著者の谷沢自身が熱を噴くような文章で、安吾が生涯いかに変わらなかったかを代表的な作品をとって確認していく	編輯後記『言葉』創刊号

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1974年8月	長谷川泉	坂口安吾論	共著	『無頼派の文学—研究と事典』(教育出版センター刊)	無頼には「反逆」と「脱出」の二つの契機があるとし、それは「実存するものの認識と確認から出発する」ものなので、高度な知性が必要になるという。安吾の「墮落論」が「向上論」とも捉えられる理由もそこにあると指摘し、そうした「対比の二重構造の虚実皮膜の妙」をこそ見るべきと説く。全体に哲学的な言辞が多く、読解が難しいわりに内容はうすい	墮落論
1974年8月	神田重幸	「青鬼の禪を洗う女」論	共著	『無頼派の文学—研究と事典』(教育出版センター刊)	「青鬼の禪を洗う女」のサチ子は、安吾にとって「宿願でもあった霊肉一致の世界を十分にみたした理想の女」とであると、反逆精神を自らの文学の基調に据えた安吾の「モチーフをもっともよく描出し得た作品」と評価	青鬼の禪を洗う女
1974年11月	神谷忠孝	坂口安吾	紙誌	国文学 解釈と鑑賞・臨時増刊	「をみな」などの記述をもとに、安吾には「ほとんど殺意に近い」母への憎悪があったとする。「風博士」に登場する蛸博士は「男根の比喻」であると、父仁一郎が性欲旺盛だった(?)ことに強い嫌悪があった、それが文学に出ているとする。「吹雪物語」や「私は海をだきしめてみたい」「恋をしに行く」「桜の森の満開の下」などが例証になるという。精神分析的な解釈をしようとした穿ちすぎの論理展開	をみな 風博士 吹雪物語 私は海をだきしめてみたい 恋をしに行く 桜の森の
1974年11月	畑下一男	作家論からの臨床診断■坂口安吾	紙誌	国文学 解釈と鑑賞・臨時増刊	同誌掲載の神谷忠孝「坂口安吾」をもとに、医師の立場から臨床診断したもの。憎悪のみ感じて「あの女」と呼ぶようになった、その母親に、別の安吾作品の引用箇所では結婚の相談をしているなど、安吾の心理には分裂がみられることを指摘。これはつまり、安吾に対するというより、神谷に対する矛盾の指摘であろう	
1975年2月	矢島道弘	坂口安吾・戦後作品の流れ	紙誌	解釈	戦後の民主主義文学陣営は、安吾に「反動文学」のレッテルを貼って攻撃のマトとしたが、それは彼らの組織内における思想徹底のための方便にすぎず、「狹隘」な態度であったことを鋭く突く。安吾の文学は「夢の中で構築された」「絶対の孤独」をふるさととして、戦前も戦後も一貫していたことを念頭に置きながら、安吾の代表作を概括する	墮落論
1975年2月	田近洵一	「墮落論」の発想	紙誌	解釈	1946年当時の朝日新聞への投書や記事などを引用して、「新日本建設」のために、性欲や娯楽より徳徳を、という機運があったことを指摘。安吾の「墮落論」が当時のそうした風潮への批判として書かれたとみる。だからこそ「一般庶民のホンネ」に合致して喝采を受けたが、逆に田近はそこに「墮落論」の甘さ、弱点をみており、「日本文化私観」ほどの衝撃は感じないと述べる	墮落論 日本文化私観
1975年2月	黒田征	「白痴」論—坂口安吾の素顔	紙誌	解釈	「白痴」について、「伊沢が白痴女を他者として十分に対象化することがないように、安吾は、白痴女によって象徴される歴史や社会を他者として客観的に認識することが足りなかった」と否定的に批評。戦後の民主主義文学者たちによる見当違いな批判を多く引用し、同じ観点から批判を蒸し返そうとしている	白痴
1975年2月	神田重幸	「暗い青春」小論—自伝的作品の成立事情に触れて	紙誌	解釈	安吾の自伝的小説の中で最も「暗い谷間」にある「暗い青春」を高く評価。ここに描かれた「彷徨の体験を経て、安吾はその特異な仮構の人生をそしてファルスの文学を確立する」ことができたともみる	暗い青春
1975年2月	森安理文	「桜の森の満開の下」論—伝統との逢瀬	紙誌	解釈	松田悠美が「『桜の森の満開の下』の鬼」(1973)で「日本文学史上、繰り返し追求されてきた『鬼』と『鬼』のモチーフを止揚すること」により、「『文学のふるさと』を、極めて絵画的にまたファルスの構造そのままにデフォルメした、秀れた『現代説話』と賞讃したことに森安は全面的に賛同し、日本の『伝統との逢瀬』と感じるという	桜の森の満開の下
1975年2月	青柳達雄	「安吾巷談」の位相	紙誌	解釈	「安吾巷談」を文学として論じた批評は少なく、例外的に優れた批評として檀一雄「巷談師坂口安吾」と河上徹太郎「『安吾巷談』のスタイル」(共に1951)を引用。これらの評言を指標として、「安吾巷談」が安吾にとって「第二の脱皮」になったとみる	安吾巷談
1975年2月	伴悦	「明治開化安吾捕物帖」—「舞踏会殺人事件」論	紙誌	解釈	「明治開化 安吾捕物」に勝海舟が登場する意味を追求。「戦後の混乱と飢餓の状況」にあって「独り局外に超然として、しかも大局を指示する(生命の火)への希求」として、海舟が描かれたとみる	明治開化安吾捕物
1975年2月	塚田六郎	坂口安吾「ラムネ氏のこと」(国語教室の窓)	紙誌	解釈	国語教師としての立場から、教材である「ラムネ氏のこと」を論じたもの。安吾が同作で、「愛」という語の語釈が和洋で違ったことを、文化の問題に広げてしまったのは「全くおかしい混交」であり、論理の「穴」であると述べる。語釈そのものについても、仏教語や古来からの「愛」の用法を詳説したうえで、キリシタン自身の邪心ゆえ、つまり「ためにする」意図的な論理で書かれたものを、安吾がそのまま信じて使っているの、教材としては扱いにくいという	ラムネ氏のこと
1975年2月	佐々木基一	坂口安吾二十周年忌に思う	紙誌	中国新聞(17日)	天才と狂気、巨人的性格と幼児性、求道精神とデカダンス志向など、二つの極が激しく内部葛藤していた安吾には「底知れぬ寂しさ、もの悲しさ」があり、長年愛読する「古都」にそれがよく感じられるという。京都で無一物の放浪生活を送った1年間が安吾の以後を決定づけ、「墮落論」も同じ精神から生まれていると説く。戦後は「緊張の連続で、緊張を維持し、持続することが彼の生の目的と化していたのではないか」とみる。『佐々木基一全集』V(2013)に収録	古都 墮落論
1975年3月	伊沢幸平	坂口安吾さんのこと	紙誌	特集 信濃路(3月&4月)	伊沢のコラム「信州を訪れた文人たち」全18回のうち第13&14回。小田原で三好達治の紹介で安吾と知り合った伊沢は「小田原の安吾さん」(1970)『『黄河』のころの安吾さん』(1971)などでも安吾との交流を語っており、重複する箇所が多い。本稿では安吾を知らない人にも魅力を伝える意図があり、安吾作品の引用が多く、回想の記述は少なくなっている。『坂口安吾全集』別巻(筑摩書房 2012)に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1975年3月	八木隆	坂口安吾論―「ふるさとに寄する讃歌」をめぐって	紙誌	国文学踏査(大正大学国文学会)	「ふるさとに寄する讃歌」内に、太陽の黒点のニュースや「港に六千噸の貨物船が入った」新聞記事の話が出てくる。これらは1929年8月の『新潟新聞』の記事であることを突きとめている。また、姉ヌイの黒色肉腫がわかったのが1929年春であり、同年8月頃、入院先の病院で余命数カ月と宣告されたと、姉セキから聞き取りしており、安吾が見舞いに帰省した時期を特定できたとする。ヌイはその後退院して、翌年11月まで生きた。また、同作と後年のエッセイ「文学のふるさと」とが意外に近似した世界観をふくむと論じる	ふるさとに寄する讃歌 文学のふるさと
1975年3月	兵藤正之助	解説	解説	近代日本キリスト教文学全集9「芹沢光治良・太宰治・小山清・坂口安吾・北条民雄」(教文館刊)	安吾とキリスト教との関係は「殆んど無い」とする。キリスト教の殉教を描いた「イノチガケ」などでも、キリスト教のものへの興味は薄く、「信念の為に敢えて死に立ち向って行こうとする人の姿を、好んで作品化している」と説く。「真珠」や「死と鼻唄」「青春論」など同時代で書かれた作品に共通するテーマだと指摘。また、ドストエフスキーが自分にとってのキリストとしてアリオーシャを創造したように、安吾も「街はふるさと」で放二を「無私の人、奉仕の人」として描き、自分のアリオーシャを造ろうとしたとみる	イノチガケ 真珠 死と鼻唄 青春論
1975年3月	奥野健男	解説	解説	日本教養全集6「もの思う葦・墮落論・片目の哲学・家出のすすめ」(角川書店刊)	奥野が「現代文学の基軸」(1966)で述べた「虚無的合理主義」と「現世的な精神主義」をキーワードにして、「墮落論」と「日本文化私観」の内容を紹介したもの	墮落論 日本文化私観
1975年5月	柄谷行人	「日本文化私観」論	紙誌	文藝(5月&7月)	「現実について」を5月号に、2「自然について」を7月号に分載。「墮落論」とよく似た「日本文化私観」を「戦後のものとはばかり思つて読んだ」と言った河上徹太郎『墮落論』その他(1955)と同じ感想で始まる。「日本文化私観」で安吾が美しいと感じるものは、安吾のその時々的心情と密接にからまり合った実感なので、当然普遍性はないとし、単調で広漠とした風景や無機質な構造物を「懐かしい」と思い「郷愁」を感じるの、そこに「文学のふるさと」とつまり「絶対の孤独」があるからだ説く。しかし、安吾がドライアイス工場に「文学のふるさと」を感じたと結論するのはやや強引。「石の思ひ」で「単調な砂浜が好きだ」と書いた安吾が「それ自体を本当に好んでいたとは思えない」という柄谷自身の好悪の問題が起点にあり、柄谷の自然観・美観に沿うように論を展開している。『坂口安吾の世界(異装叢書1)』(冬樹社 1976)、『文芸読本 坂口安吾』、『坂口安吾全集』別巻、柄谷行人「坂口安吾論」(インスクリプト 2017)等に収録	日本文化私観 石の思ひ 文学のふるさと 墮落論 白痴 帝銀事件を論ず
1975年5月	伊狩章	坂口安吾と新潟	紙誌	国文学 解釈と鑑賞	1974年2月および4月の論考内容を再々説し、「吹雪物語」などを引用して、雪国の住人のもつ「無気力や諦念に安吾は強く、必要以上に反発した」とする。安吾の性格には「北方的な憂うつや内向性も見られるが」「南国的な奔放な生活態度をとうろうとした」とみる	吹雪物語
1975年5月	大久保典夫	坂口安吾論―小説とエッセイの間	紙誌	古典と近代文学	安吾の小説には描写が少なくナレーションが多いという点で、エッセイ的な文章だとする。つまり、安吾が小説とエッセイを厳密に区別しなかったのは、その文体によるところが大きいとみる。関井光男の編んだ『坂口安吾評論全集』には自伝的小説も多数収録されたが、関井自身はその方針について何も語っていないのはおかしいと指摘	
1975年5月	石川淳・丸谷才一	対談「文学的雑談―石川淳と坂口安吾をめぐって」	紙誌	国文学	石川・丸谷ともに、安吾は代表作が挙げられないタイプの作家だという。石川は「まとまってよく書けているということでは、「白痴」が一番」としつつも、どの作品も「みんないい」と褒める。丸谷が安吾には「風情が乏しい」と述べたのにも石川は反対し、安吾の文章は雑文でも小説家ならではの「きらきらしたところ」があったと言ひ、「何ものとも、生活でも、なにか折り合いのつかないやつで、「折り合いがつきそうになると自分でぶちこわす」奔放な破壊力に言及している	白痴
1975年5月	澁澤龍彦	石川淳と坂口安吾―あるいは道化の宿命について	紙誌	国文学	安吾は「あらゆる形式をぶちこわす」ダダに似て、石川淳は「ひたすら方法を摸索する」シュルレアリスムにたとえられると指摘。花田清輝が「戯作の系譜」(1954)の中で荷風・淳・安吾を「辛辣な道化、悪賢い道化、愚鈍な道化」にたとえた手際を褒め、安吾は「火遊びの好きなコドモ」であり、「永遠の秩序」を必死に求め続けたところに大きな魅力があると説く。澁澤龍彦『偏愛的作家論』増補版(青土社 1976)、『坂口安吾全集』別巻に収録	風博士 木枯の酒倉から 日本文化私観
1975年5月	加藤郁平	雑談リベルタン	紙誌	国文学	これも花田清輝「戯作の系譜」(1954)を援用して、「リベルタン＝自由人」たる安吾と石川についての思いを詩のような文章で語る。とくに安吾の「二流の人」などの歴史小説を、彼のファルス論や文学論などと「全く同一な線上」にあるおのとして高く評価	二流の人
1975年5月	磯田光一	貴族精神と韜晦の構図―その文明史的考察	紙誌	国文学	ボードレールが「真正の文学者」に必要な女は「娼婦」か「愚妻」しかない」と述べたのと同じ「貴族主義」が石川淳と安吾にもあるとし、それは「市民性」には反するものだが、「民主主義」の虚偽性をあばくものでもある。「すべての連帯がなれあいという虚偽を含むことを察知し、苛烈な単独者として敗亡を賭して生きたのが、これら無頼派の作家であった」と奥深いところで共感を示す	いつこへ 青鬼の禪を洗う女 私は海をだきしめてみたい
1975年5月	紅野敏郎	石川・坂口と昭和十年代	紙誌	国文学	『桜』の座談会「文学の新精神を語る」において、安吾が「言葉」より「内容」、「部分」より「全体」を志向したことに触れ、当時の新進作家の中では文学観も作品も異質なものであったとみる。ただし同誌に連載された「麓」は失敗作と断じる	座談会「文学の新精神を語る」麓
1975年5月	磯貝英夫	坂口・石川における「私」のかたち	紙誌	国文学	安吾は「牧野さんの死」で、牧野信一は普通の私小説作家と逆に「文学に人生を近づけた」と指摘したが、安吾自身も全く同じ道を生きたとみる。自ら「ガランドウ」のように形容した空虚な自我であったればこそ、人生すべてが仮構され、生活の破壊へつながったのだと、やや情緒的・類型的に断定する	牧野さんの死

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1975年5月	種村季弘	ピュグマリオンの走法—坂口安吾のふるさと	紙誌	国文学	「坂口安吾は一種のピュグマリオンストであった」と規定して、「をみな」には「母に似た冷い大理石の女のなかに愛を見出すという戦略」を読み、「逃げたい心」では男を殺すアマゾネス的な山女のイメージが強迫観念としてつきまとうとする。「外套と青空」に、同じ人形愛の作家としてつながる牧野信一の影を読みとり、「夜長姫と耳男」の「耳男が夜長姫を殺した瞬間、ミロク像が生きている」と説く。全体が詩の論理で結ばれた空想的エッセイ。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』(有精堂出版 1978)に収録	をみな 逃げたい心 外套と青空 夜長姫と耳男
1975年5月	井上光晴	黒谷村幻想	紙誌	国文学	「黒谷村」に触発されたイメージを自らの阿蘇付近への旅になぞらえて綴った掌篇小说。「最早引返すことのできぬ抒情こそ、果つべき歌である」という結びの一文が、そのまま「黒谷村」への感懐にもなっている	黒谷村
1975年5月	海野厚志	生の意識と墮落の論理	紙誌	国文学	安吾は「吹雪物語」執筆のための京都住まいから、取手、小田原へと至るほぼ4年の間に、「再生」の「転機」を迎えたとする。すなわち、理想主義的な境地から脱落し、虚妄な「愚者」の自覚に至って「無我」を得た安吾は、自己を自己として「全的に肯定」するオプティミストになりえたのだと説く	吹雪物語
1975年5月	由良君美	「桜の森の満開の下」論—坂口安吾の文学の原郷	紙誌	国文学	ホフマンやノヴァーリスらに代表されるドイツ・ロマン派の「世界に比類ない、美しいメルヒェン」群が、同派を淵源とする日本浪漫派によっては作られず、無頼派の安吾が初めて造型しえたと指摘。それもロマン派の名作群に「優に伍す」とし、今昔物語集や雨月物語の仲間入りを果たしたと絶讃する。返す刀で、魔性のヒロインに安吾の姪のイメージを結びつけすぎるとの批評家がいることを痛烈に批判。川嶋至『夜長姫と耳男』解説(1972)などを指しての言と思われる。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	桜の森の満開の下 夜長姫と耳男 文学のふるさと 木々の精、谷の精
1975年5月	川嶋至	ファルスとしての方法	紙誌	国文学	同じ雑誌に載っている磯貝英夫「坂口・石川における「私」のかたち」への反指定の形に偶然なっている。すなわち、人生を設計した牧野信一と反対に、安吾は「設計を排除した人生、つまりは混沌にいとみ続ける天賦の熱情」を絶対の原理として生きたとみる。それが安吾の「ファルス精神」であったとし、晩年の安吾諸作はあまり認めていない川嶋も「安吾史譚」の「自在の人間造型」を「ファルス精神がおのずと躍動」したものとして絶讃している	FARCEに就て 牧野さんの死 安吾史譚
1975年5月	柄谷行人	精神の風景—坂口安吾における批評の源泉	紙誌	国文学	安吾には「傑作意識」が皆無だったとし、安吾作品のほとんどは「駄作」と断じるが、駄作を量産することに「意志」の持続を感じると述べる。少し前に発表した『日本文化私観』論と大筋は同じ内容。ここでは新たに、安吾が単調な風景や無機的な構造物に愛着をもつのは「母から拒まれ母を拒んだ少年」の「無機的な寂寥」から来たものと分析している。追加論考にも強引な飛躍がみられ、「文学のふるさと」に描かれた「絶対の孤独」と、新潟の「海と空と風」を同一の「ふるさと」とする論旨展開には無理がある	日本文化私観 石の思ひ 文学のふるさと
1975年5月	栗坪良樹	坂口安吾作品案内	紙誌	国文学	「風博士」「吹雪物語」「墮落論」「白痴」「道鏡」「不連続殺人事件」「青鬼の禪を洗う女」「ジロリの女」「安吾巷談」「夜長姫と耳男」「狂人遺書」の11作品について、原稿用紙1枚ぐらいつづの分量で紹介したもの。安吾作品の特色として、「哀切さ」「ストイック」「真面目さ」「自立の精神」「勉強好き」など、きわめて健全な部分を強調して述べている。「夜長姫と耳男」について「西洋にある怪異譚とほぼ共通した手法」で「土俗的というより、もっと国際的と思える」と説くあたりに独自性がある	風博士 吹雪物語 墮落論 白痴 道鏡 不連続殺人事件 青鬼の禪を洗う女 ジロリの女 安吾巷談
1975年7月	瀬沼茂樹	人と文学	解説	筑摩現代文学大系58「坂口安吾集」	1967年刊『現代文学大系』53の解説再録	
1975年7月	田辺茂一	わが伯楽	月報	筑摩現代文学大系58「坂口安吾集」	『現代文学大系』53の月報から再録	
1975年7月	花田清輝	一宿一飯	月報	筑摩現代文学大系58「坂口安吾集」	『現代文学大系』53の月報から再録	
1975年7月	後藤明生	安吾精神	月報	筑摩現代文学大系58「坂口安吾集」	戦後、引き揚げてきて読んだ「墮落論」の主旨は「いまや常識」だが、「無私の精神」で書かれたその文章に自由さを感じるという。「しかし、その常識通りに生きるのはまことに困難を極める」とも。『現代文学大系』53の月報にない新規追加分	
1975年7月	谷丹三	安吾と女たち	月報	筑摩現代文学大系58「坂口安吾集」	『桜』の講演会での安吾や矢田津世子のようすを、おもに丸茂正治の小説「同人雑誌」(1970)を引用して紹介。そのほかお安のいたバーでの安吾の態度や、牧野自殺の折には、安吾と小田原に向かい、夜は町の女郎屋へ上がったことなど回想。『現代文学大系』53の月報にない新規追加分	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1975年8月	佐々木基一・野坂昭如・奥野健男	座談会《昭和の文学》坂口安吾―その希有な個性の全体像	紙誌	群像	各人が安吾や安吾文学との出逢いを語り、その後は雑談のように進む鼎談。若い野坂はおもに聞き役に、奥野が伝記的な事柄を説明する。安吾の友人であった佐々木の意見が最もユニークで、特に「花妖」を「ポップアート」にたとえて絶賛しつつ、ただし常に「のっぴきならぬ緊張状態」で結末を決めずに書いていくので、長篇は未完が多かったのだらうと推測している。野坂は「不連続殺人事件」を推し、奥野が「落語教祖列伝」を何度も褒めている。『文芸読本 坂口安吾』に収録	花妖 落語教祖列伝 不連続殺人事件 火
1975年12月	大井広介	安吾純情録	紙誌	ユリイカ	安吾は早合点で間違った思い込みをすることが多かった話を紹介するが、以前の大井の回想に既出のエピソードばかり。『吹雪物語』のモデルは安吾の親戚筋の娘だと安吾自身が語った話も既出で、これをもとに大井は、モデル矢田説は間違いと主張するが、安吾の語った娘とは矢田がモデルの澄江でなく文子のほうである(大井広介「矢田津世子伝説」1968参照)	
1975年12月	佐々木基一	豪快と稚気	紙誌	ユリイカ	佐々木の「思いこみの大家」(1967)は、安吾が佐々木に軽蔑されていると思いこんでいた話の回想だったが、安吾がそう思った理由を大井広介から改めて聞いた後日談。やはりイエス・ノーの人物名当てゲームで、隠された答えが「坂口安吾」だった時、佐々木が「それは辻潤のような人物ではないでしょうね？」と質問したのが気に入らなかったということらしい。安吾が辻潤のことを評価していなかったことがわかるエピソード。『佐々木基一全集』V(2013)に収録	
1975年12月	阿部昭	安吾再読	紙誌	ユリイカ	「白痴」「墮落論」「日本文化私観」「文学のふるさと」などで安吾が言っていることは「あくまで安吾一個がつかんだ真実というにどとまり」そこから何かを学ぼうとしても意味がないと説く。「いつこへ」で安吾が生活の品を排除したがったことについては、本当はそれらへの執着をもつのが小説家ではないのかと安吾を糾弾する	白痴 墮落論 日本文化私観 文学のふるさと いつこへ
1975年12月	奥野健男	坂口安吾と暗鬱な青春のたたかい	紙誌	ユリイカ	時代思潮から超然としていた安吾は、周囲の友人らには「英雄」と見えたとする。そして、「安吾は先輩を模倣し、喰い、追い越した。しかし自分の周囲によってくる友人や後輩に模倣され、喰われることを許さなかった」と奇妙な断定をする。青春時代には「誰でも」が先輩を模倣するものだと奥野はみており、しかし安吾の「アビリティ」は高すぎて、慕い寄ってきた友人たちは「次々に自殺したり、発狂したり」したと述べる	
1975年12月	佐藤忠男	坂口安吾論	紙誌	ユリイカ	「黒谷村」をはじめとする初期安吾作品は「一途に自分自身を見つめ、煩惱を語る」もので、その文章には「魔術的な力」とあると絶賛する。これらの作品で安吾は「文学によって仏教を求めた」とする。戦後の安吾作品は概して好みに合わないらしく、「肉体文学なるものは、生奥坊主の説教」みたくて評価できないという	黒谷村
1975年12月	野島秀勝	風と答えて消えなましものを―安吾「孤独」ビュリタンの歌	紙誌	ユリイカ	「子供であること、これは安吾が一生賭けて守ろうとした観念であり、彼が自らに課した戒律であった」とし、その観念は一切の所有や関係性を拒絶して「絶対の孤独」を指向すると説く。孤独なのは安吾個人の問題でなく、「人間そのものが孤独なのだ」といい、さらに安吾の場合、その孤独を認識する場が風景や女性にも見出されると指摘	
1975年12月	田中美代子	「青春」の死について	紙誌	ユリイカ	安吾にみられる「男性的精神とは、本質的に非常時のものであり、非日常的次元における悲劇的昂揚」であるため、そうした「憑かれた魂」は平和な時代にはそぐわないと、特に「青春論」を多く引用して語る。それゆえ現代の若者には不人気なのだと	青春論
1975年12月	川本三郎	坂口安吾の「饒舌」	紙誌	ユリイカ	安吾作品は初期の「FARCEに就て」などからすでに、饒舌な文体であったと指摘。勢いあまって言いすぎたり、文芸時評で飼犬の病気の話を延々と書いたりするなど、「実生活と言葉との間にほとんど距離を置こうとしなかった」作家だと説く。戦時中に時勢に反することを平気で書くのもそのため、やることなすこと八方破れであったことには感嘆するが、その時々で述べる安吾の主張はつじつまが合わず支離滅裂になっているとする	
1975年12月	秋山駿・磯田光一	坂口安吾の精神	紙誌	ユリイカ	安吾の本質的な面を掘り下げた、刺激的な対談。花田清輝が安吾を「愚鈍なフル」と呼び逆説的に賞讃したのは、安吾が生まれながらにオリジナルな人間だったことを表すとし、その意味で武者小路実篤的な側面があるという。「日本文化私観」で法隆寺が焼けてもかまわないと言ったのを反戦ととらえるのは間違いで、金属供出を善とした戦中の時流に即した意見だったと磯田が指摘。秋山は、安吾の「合理精神」と称されるものの根本についても、一般の理解と異なる意見を提示する。たとえば、家庭の存在意義など普通は考える対象としないが、安吾は家庭の利点を数え上げて考察し、自分に不要と判断すれば切り捨てることができた人だ、とみる。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	
1975年12月	津島佑子	花のなかの影	紙誌	ユリイカ	石川淳の「荒魂」のラストシーンが「桜の森の満開の下」をほうふつさせ、「花も鳥もいくら追い払われても“まっくらなもの”に慕い寄ってくる」イメージに安吾その人を感じるという。「風と光と二十の私と」で描かれる先生だった二十歳の安吾は、女の子の将来の不幸を汲み取る、その目に「異様なものを感じずにいられない」と説き、こうした目は「子供の眼であり、末期の眼」とあるという	桜の森の満開の下 風と光と二十の私と
1975年12月	石堂淑郎	安吾のせつなさ	紙誌	ユリイカ	同年公開の映画「桜の森の満開の下」が失敗作となった理由を分析してみせる。いわく、ただ桜を美しく撮っても不気味にはならないこと、山賊と女との肉体関係の有無に無頓着に話を進めたことの2点を挙げる。また、自分が脚色した「夜の王様」の原作「金銭無情」連作などを熟読するうち、「安吾文学における描写の欠如にあらためて感じ入った」と記す。「会話の洪水に一種の迫力がある」から小説が生きてきているのだと指摘	桜の森の満開の下 金銭無情
1975年12月	内村剛介	反語―血は要るがいのちは必要でない	紙誌	ユリイカ	ロシア文学者である内村にとって、「生きているのが精いっぱい」の安吾が説く「必要」の論理は、魯迅や小山俊一の発言と響き合うという。おもに「日本文化私観」「墮落論」「青春論」と魯迅らの文章を引用して類似を語る	日本文化私観 墮落論 青春論
1975年12月	出口裕弘	ふりかえる魔物	紙誌	ユリイカ	安吾作品では「白痴」と「日本文化私観」の中の「家に就て」を絶賛、「十代の私は、甘美な毒を吸いこむように」読んだと回想する。「夜長姫と耳男」など晩年の作品はカタカナを多用した悪文で、好きになれなかったという	白痴 日本文化私観

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1975年12月	鈴木志郎康	坂口安吾の三つの小説を辿ってみる	紙誌	ユリイカ	「墮落論」と小説を3作だけ読んだが、あとは読みたくないという鈴木が、「二流の人」「青鬼の禪を洗う女」「桜の森の満開の下」について、作者には同じ思想があるはずと無理やり結びつけて論じたもの。安吾には運命に甘んじる思想があるとし、「桜の森—」の山賊のように力によって殺人を正当化していく論理なので危ういとみる	墮落論 二流の人 青鬼の禪を洗う女 桜の森の満開の下
1975年12月	中上健次	安吾—空翔けるアホウドリ	紙誌	ユリイカ	安吾に自身が同化するほどの生理的な安吾愛を綴る。「ふるさとに寄する讃歌」「教祖の文学」「白痴」の各文を引用して「安吾ほど、天、蒼空を、想っていた人はいないということだ。背中に天が張りついている気がする」とシンボリックに批評。『文芸誌本 坂口安吾』に収録	ふるさとに寄する讃歌 教祖の文学 白痴
1975年12月	八木敏雄	消えなましものを—坂口安吾とエドガー・ポー	紙誌	ユリイカ	安吾のファルス作品群とポーの作品との類似点を列挙。特に「風博士」とポーの「息の紛失」の一致点の発見が秀逸。ほかに「ベスト王」の結びで「水夫の一人がビールの大樽のなかに投げこまれて」消えてしまうところなどは「木枯の酒倉から」に活かされている。消滅や消失願望を描いたファルスが多いことも共通するという。これらの解析から、ポーのファルスが内包する「冷たさ」と安吾が「文学のふるさと」と安吾が「文学のふるさと」とが同質のものであることを解き明かす	木枯の酒倉から 風博士 文学のふるさと
1975年12月	久保田芳太郎	坂口安吾における道化について	紙誌	ユリイカ	ファルスの定義から説き起こし、「黒谷村」や「竹藪の家」なども「何の脈絡なしに反対概念を衝突させる」ところにファルスの発想があるという。「村のひと騒ぎ」には「グロテスクな対照からおこる笑い」があり、「教祖の文学」でさえファルスの精神から観察された小林秀雄であると指摘。「文学のふるさと」も「存在の矛盾を全て肯定する」ファルス精神と「無縁ではない」として、「桜の森の満開の下」「夜長姫と耳男」「白痴」なども同じ基盤でできているという	木枯の酒倉から 風博士 黒谷村 竹藪の家 村のひと騒ぎ 教祖の文学 文学の
1975年12月	松田修	母胎への旅—狂気と酩酊	紙誌	ユリイカ	安吾文学は初期のファルスから「狂気を内包し、狂気を表現するものであった」とし、それは当時の芸術思潮でもあったと説く。失踪願望は「逃げたい心」や「紫大納言」「古都」などにもつながり、「白痴」や「私は海をだきしめてあたい」などでは「不倶の女にこそ、愛の安住を」見ている点、母胎回帰願望がその根底にあったとみる。「文学のふるさと」で伊勢物語の歌句冒頭「白玉」を「ぬばたま」に「無意識に」置換して引用したところにも、漆黒の中で母胎への旅をめざす志向が読み取れるとする。『日本文学研究資料叢書「石川淳・坂口安吾」』に収録	木枯の酒倉から 風博士 逃げたい心 紫大納言 古都 白痴 私は海をだきしめてあたい 文学の
1975年12月	村上護	聖なる無頼—坂口安吾ノート	紙誌	新潟日報(2日)	村上が安吾評伝を翌年まとめるまでの前段階のエッセイ。1946年8月25日に「流行作家として自認した」と安吾が若園清太郎に語った話を紹介。また、安吾には1945年4月15日に召集令状が来たが大空襲が蒲田にあったのですっぽかしたと、完全に事実のように紹介しているが、事実届いたのは点呼令状であり、もしも召集令状が来れば出征するしかないかと安吾自身は書いている	
1976年1月	兵藤正之助	坂口安吾〈講談社現代新書〉	単著	(講談社刊)	兵藤の前作『坂口安吾論』(冬樹社 1972)とは独立して新たに稿を起こした評伝。安吾自身の文章を丁寧に読み込んでいるので、それまでの伝記や年譜より安吾の心の真実に近づいた印象を受ける。たとえば父や母との関係など、気持ちの底の悲しみに深く思いを馳せているため、一面的に「父に無関心」「母を憎んだ」とはなっていない。矢田津世子との関係についても、事実と虚構の問題のいくつかを取り上げて、大岡の回想などは事実と反するのではないかと確かな疑念を表明している点など、好感がもてる。何より、自らも作家志望だった兵藤が「日本文化私観」しながら、自分自身の半生と二重写しにして安吾の気持ちに迫る、その試みが功を奏した。安吾伝を書く最適な方法の一つが提示されたといってもよい	
1976年1月	磯部佐吉	若き安吾の思い出	紙誌	青山同窓会会報	新潟中学2年からの友人磯部による回想。軍事教練の時間にジャモという縛名の体操の斎藤先生が、イタズラな安吾に「お前は炳吾でなくて暗吾だ!!」と叱ったのがペンネームの由来ではないかと、同じく友達の斎藤君からの又聞きとして紹介。これは鞆殿新の回想(1957)にある話と同種だが命名した先生の名が異なっている。仲間たち行きつけのパン屋の話や、当時から文才のあった安吾の企画で回覧冊子を作った話、安吾が砲丸投げにすぐれていた話など詳細に語られている	
1976年4月	宮内豊	淪落の人間讃歌—坂口安吾をめぐる	紙誌	三田文学	「墮落論」や「日本文化私観」などに安吾の「悲愴な楽天性」が見てとれるのは、「調和という状態」ではなく「調和から分裂へ、そしてまた分裂から調和へという過程」に、「生命の証しを求めたからである」と説く。そこから「あるがままの人間を肯定」する指向も生まれるとする	墮落論 日本文化私観
1976年4月	(日本近代文学会新潟支部編)	新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」	共著	(野島出版刊)	日本近代文学会新潟支部の会員による書き下ろし論考を中心に、17篇の安吾論を収録した研究書。郷土的角度からの安吾研究を意図したと伊狩章の「まえがき」にある。年譜(渡辺憲)と参考文献(太田喜一郎)付き	
1976年4月	伊狩章	文学風土としての新潟	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	伊狩の先行論文「坂口安吾の家系」(1971)「坂口安吾と自由都市新潟」(1974)「坂口安吾と新潟」(1975)等とほぼ同じ内容。安吾は父五峰の巨大な資性を遺伝的にもっており、新潟の町のリベラルで頹廢的な雰囲気の中で、その性格を形づくっていったとみる。安吾が活躍していた頃、著者はある会で安吾の長兄献吉と同席し、安吾の話が出ると献吉は「含羞の表情を浮かべられ、話題を転じた」ので、弟のことを「不名誉」に感じていたかと推測している。しかしこれは伊狩の勘違いで、実際の献吉は安吾を名誉に思っていた	
1976年4月	坂口守二	家系と生い立ち	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	坂口守二『治右衛門とその末裔』(1966)の内容をコンパクトにまとめたエッセイ。安吾は没落していく「家」の象徴のような母を憎悪したと論じる。『五峰余影』(1929)や「石の思ひ」の記述を組み合わせ、伝説や推測の物語を事実のようにはめ込んでおり、ところどころ関井光男「伝記的年譜」(1971)を模したような文章になっている。かつて安吾が献吉の家を訪れた際「いずれ祖先の出自を取材して、その劇的な消長を遂げた自家の歴史をまとめるつもりだ」と語ったという。献吉がここでだけ話した貴重なエピソード	石の思ひ
1976年4月	若月忠信	幼少年期—聞き書きを中心に	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	安吾の幼稚園時代の友人だった金井五郎の談話から、明るく元氣いっぱい幼年期が偲ばれ、新潟中学時代の同級生たちからの聞き書きからも、安吾のそれまで知られていなかった数多くのエピソードが明らかになった。第一級の伝記資料。若月忠信『資料坂口安吾』(武蔵野書房 1988)に「友人の語る幼少年期」と改題して再録	
1976年4月	佐々木美智子	暗い青春時代—矢田津世子とのこと	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	安吾の青春時代に影響があった人間として長島萃、牧野信一との関係を概説したあと、矢田津世子について詳細な考察を述べる。津世子の生涯や代表作の解題を記し、回想資料も多種引用しているので、人物像が多角的に眺められる。各種調査の結果、大谷藤子が「津世子の本質を最もよく見抜いていた」とする。瀬戸内晴美『鬼の栖』に大谷からの聞き書きがあり、津世子は「はっきり、もし結婚するならば坂口さんとするだろう」と語った部分と語った部分を引用している。ともすれば安吾の片思いと処理されがちな二人の関係に、事実の重みを加えた論考といえる	二十七歳 三十歳

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1976年4月	高木進	「吹雪物語」—安吾の新潟をめぐる	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	『吹雪物語』の初版での設定が「一九三×年」であったのを、戦後の再版で安吾自ら「一九三三年」としたが、作中の多くの事柄から1935年以降でないことと矛盾することを指摘。ただし、「卓一と由子が白山様から信濃川の堤に歩いて出る」記述があるため、1934年に埋め立て工事で地形が変わったことなど考えると1934年以前でないとも矛盾する。つまり、1933年に安吾が帰省して見た新潟と、1936年執筆時の新潟とが混ざってしまったという。以下、作中の場所を詳しく調べ、どれがモデルの建物であるか、どれが架空かなど厳密に对照して示している	吹雪物語
1976年4月	渡辺恒美	「吹雪物語」の構成——時相について	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	時間が錯綜する『吹雪物語』の時系列を詳しく提示する。あらずじとともに時間軸を提示し、その作業後、図表形式で時系列の順番を数字で表している。労作ではあるが、あまりに細かすぎて、より難しい作品イメージになってしまった感もある。『吹雪物語』の作中、野々宮は小説「悲しみの村の歴史」を構想し、「いくつかの挿話がつづき、時は流れて、現代におよび、現実の悲哀につながる」という腹案を述べる。この腹案こそが『吹雪物語』の構想でもあったのかもしれないと考察する	吹雪物語
1976年4月	高木進	松之山作品群	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	安吾が松之山を舞台に描いた作品群を解説し、イメージの源泉を辿る。「山の貴婦人」は、松之山温泉に混浴の湯はないので、随筆でなく創作であるという。戦前は頻繁に訪れたことを、安吾の甥村山政光から聞きとっており、安吾は無名の頃から来ていて、有名になってからも二、三回来たらしい。政光は安吾が松之山に来る途次、小林秀雄と列車で一緒になった話も聞いたし、「法事で親の代理で来たこともあったし、貞観園に寄って来た時は兄上枝氏と一緒に、安田駅から歩いて来たらしい。戦後は訪ねていない」という	山の貴婦人 黒谷村木々の精、谷の精 逃げたい心 麓
1976年4月	田中栄一	「日本文化私観」の前後—「心のふるさと」から「文学のふるさと」へ	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	「日本文化私観」を書くに至る安吾の思想の変遷を辿った論考。全体に観念的すぎるうえ、小説の文章とエッセイの文章を、区別なく安吾の思想としている点が問題。「逃げたい心」や「黒谷村」など「心の影」を追った初期作品から、「吹雪物語」の失敗を経て「文学のふるさと」を発見したと説く。最初期の安吾は、「形式」ありきの文学を否定していたが、1935年の「文章の一形式」から考えを変えて形式偏重になったと田中はいうが、安吾が「形式」と書いたときに指すものが違うので、強引な推論とみえる	日本文化私観 逃げたい心 黒谷村 文学のふるさと 文章の一形式
1976年4月	太田喜一郎	「墮落論」「白痴」	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	「墮落論」は「曠野のまんなかになた一人裸で投げ出された」人間や国家の「絶対の孤独」を見つめている点、安吾が当時まだ読んでいなかったサルトルの実存主義と思想の根幹が同じであると説き、「白痴」に登場する場末の住民たちの姿は「墮落論」の形象化とみる。主人公の伊沢だけが「墮落」しきれておらず、白痴の女が墮落の極致であると読解するなど、太田の「墮落論」解釈への疑問も生じる内容	墮落論 白痴
1976年4月	清田文武	「桜の森の満開の下」の世界	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	「文学のふるさと」と「桜の森の満開の下」をつなぐ短篇として「露の答」があり、「明日は天気になれ」の中の「桜の花ざかり」に作品の原風景となる戦争体験が書かれていることを早くに指摘。首遊びのシーンに谷崎潤一郎『武州公秘話』の影響を見いだしたのも他に先駆けている。また、冒頭で紹介されている能の演目は、有朋堂文庫『謡曲集』の中で、安吾の好きだった「檜垣」の次に記されている「桜川」ではないかとみる	文学のふるさと 桜の森の満開の下 露の答 桜の花ざかり
1976年4月	中村昌司	歴史小説「信長」をめぐる	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	先行の「信長」評をコラージュして、それらをそのまま自分の考えと合致させていくスタイルなので、新しい見解は少ない。「信長」と「信長公記」の記述を对照させて、安吾がいかに史料を重んじ、しかも独自の表現で内面の虚無や死生観を描きえたかを論じた点に功がある	信長 織田信長
1976年4月	渡辺憲	「安吾もの」の世界—「安吾巷談」「安吾史譚」について	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	「安吾巷談」には巷間いわれた「生活破壊者」のイメージはなく、「真摯な姿」で「目くぼりのきいた批評」をしており、共産党批判も独自の「一見識を示すもの」とする。「安吾の批評にはその対象に対する愛着と密着度が並みはずれて強かった」からだろうと考察。「安吾史譚」についても、飛躍と感じられた部分が後々正しい筋道だったと証明される例が多いと説く	安吾巷談 安吾史譚
1976年4月	吉田行雄	安吾歴史観の志向するもの—「安吾新日本地理」「安吾新日本風土記」	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	日本古代から続く「とてつもなく大きな歴史の流れを咀嚼した上から、ものを見、考えているのが安吾の歴史観である」とし、「安吾の新日本地理」から「安吾新日本風土記」に至る「安吾日本歴史」の過程を概説する	安吾の新日本地理 安吾新日本風土記
1976年4月	木村和夫	「夜長姫と耳男」の一考察—死の契機を視点として	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	「夜長姫と耳男」の「ヒメの見つめていたものは、確かに「死」であった」とし、しかもヒメの見るそれは「人間世界における「死」とは一線を画するものようである」と読み解く。安吾には初期作品から「死」への関心が深く根ざしており、生命を賭ける姿に「美」を見いだしていた。この二つは一体であり、「夜長姫と耳男」において安吾のおもう芸術家像に結びついたとする	夜長姫と耳男
1976年4月	黒田征	「白痴」論—坂口安吾の素顔	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	1975年2月『解釈』に発表したエッセイ。改訂した部分があるか否かは不明だが、既発表作であることを明記しないのは編集部の手落ち	
1976年4月	関井光男	「やつし」の美学—「明治開化安吾捕物帖」について	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	1970年12月『無頼派の文学』に発表した「坂口安吾論」を改題したもの。ところどころ文章に手を入れてはいるが、ほぼ引き写しで、新稿とはいえない	明治開化安吾捕物帖

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1976年4月	渡辺恒美	安吾と走り高跳び	共著	『新潟県郷土作家叢書1「坂口安吾」』(野島出版刊)	大阪朝日新聞社編『運動年鑑大正十四年度』に記載されたインターミドル記録の調査結果が記されている。1924年9月20、21日の両日、駒場トラックにて全国中等学校競技会が行われ、第一部「フィールド」の部門に「走高跳一等(一米五七)坂口(豊山)」とあり、安吾自身が何度も語った優勝の記録が嘘ではなかったことを初めて証明したもの	
1976年4月	(関井光男編)	坂口安吾の世界(異装叢書1)	共著	(冬樹社刊)	堤玲子「孤独の尻」、中上健次「安吾—ファルスの光線」、関井光男「道化の意匠」、大河内昭爾「地獄は一定(いちじょう)—『墮落論』と『歎異抄』」の4作が書き下ろしで、これに柄谷行人「日本文化私観論」(1975)、種村季弘「ピュグマリオンの走法」(1975)、秋山駿「無邪気な戦士」(1968)、加藤秀俊「座談の文体」(1968)、尾崎秀樹「戦後批判としての捕物帖」(1969)、加藤郁平「雑談リベルタン」(1975)、磯田光一「無頼昇天」(1968)を再録	
1976年4月	堤玲子	孤独の尻	共著	『坂口安吾の世界(異装叢書1)』(冬樹社刊)	安吾を讃える長い詩のようなエッセイ。破天荒なセックス極道のように安吾を描き、「男根岩石文学」と名づける。けれども、障害のある女の子を守って戦う「大親分」の優しさもあった、という感じで謳われる	
1976年4月	中上健次	安吾—ファルスの光線	共著	『坂口安吾の世界(異装叢書1)』(冬樹社刊)	安吾の小説からは「世の中から疎外されたもの、抑圧されたものの、復権」を感じるという、「抑圧され疎外された者が、それゆえに、抑圧からも疎外からも自由に現存する」その「逆説は、無頼を生む」と説く。「白痴」「桜の森の満開の下」「夜長姫と耳男」などに登場する男女が「最底辺にいる人間であることによって、一定の宗教性を帯びるはずなのに、奇妙に愛らしくあるのは「肯定の肯定たるファルスの光線にさらされているからだ」と指摘。『坂口安吾全集』別巻に再録	白痴 桜の森の満開の下 夜長姫と耳男
1976年4月	関井光男	道化の意匠	共著	『坂口安吾の世界(異装叢書1)』(冬樹社刊)	『風博士』に登場する蛸博士のように、異形で疎外された道化を「グロテスクなもの」と呼び、これをキーワードに安吾文学のすべてを語ろうと試みる。風博士は最後、消失することによって「蛸博士と団体となった」とするなど、やや強引な飛躍が目立つ。「白痴」「木枯の酒倉から」「ふるさとに寄る讃歌」「桜の森の満開の下」「夜長姫と耳男」などについても、「非人間的なものがもっている根源的なグロテスクさに人間の原初の世界を見ていた」と大雑把にまとめている	木枯の酒倉から ふるさとに寄る讃歌 風博士 白痴 桜の森の満開の下 夜長姫と耳男
1976年4月	大河内昭爾	地獄は一定(いちじょう)—『墮落論』と『歎異抄』	共著	『坂口安吾の世界(異装叢書1)』(冬樹社刊)	『歎異抄』と『墮落論』には通底する基調があるとして、各文を引用、比較している。「墮落論[続墮落論]」「蟹の泡」「現代の詐術[詐欺の性格]」などで、安吾が親鸞の悪人正機説をくりかえし解説している点など指摘	墮落論 墮落論[続墮落論] 蟹の泡 現代の詐術
1976年5月	奥野健男	坂口安吾の古代史観	共著	『ヤポネシア古代学の魅力(市民講座・日本古代文化入門1)』(読売新聞社刊)	『坂口安吾の古代史観と縄文文化論』の項で、安吾が早い時代に天皇家は朝鮮からの渡来民だったと述べていたことに驚いたと述べる。『安吾史譚』の「道鏡童子」や『安吾の新日本地理』の「飛鳥の幻」など、「革命的な史観」だと賞讃。奥野健男「深層日本帰行」(毎日新聞社 1978)に「坂口安吾の古代史観と縄文文化論」と改題して再録	安吾史譚 安吾の新日本地理
1976年6月	海谷寛	安吾の恋—矢田津世子とのこと	紙誌	全作家	安吾と矢田津世子の恋は、矢田が病弱であったことと「文学的意見の相違」によってうまく行かなかったとみる。海谷は全体に、安吾の心に占める矢田の大きさを過大に見ており、「古都」で東京駅まで見送りに来た女(お安さん)をも、実は矢田だったのではないかと深読みしている	古都 二十七歳 三十歳 いづこへ
1976年6月	若園清太郎	わが坂口安吾	単著	(昭和出版刊)	アテネ・フランスで安吾と同人誌をつくり、最晩年まで友情を保った親友による安吾伝。若園が実際に見聞した安吾の言動がふんだんに盛り込まれ、生き生きした姿を感じることができる。本書でしか得られない事実も数多い、超一級の回想資料。ただし、出来事の年月などは曖昧な部分や記憶違いも散見されるので、多種の資料との突き合わせが必要。巻末の村上護との対談にも、本文にない貴重な証言が多々ある。安吾の伝記資料として、村上護『聖なる無頼』と並んで、この時期までの最上の成果といえる	
1976年7月	村上護	聖なる無頼—坂口安吾の生涯	単著	(講談社刊)	安吾の家族や友人ら多数の関係者にインタビューをおこない、それまで知られていなかった安吾の実像を掘り起こした記念碑的な一冊。取材対象も多岐にわたり、本書でしか知ることのできない事実もまだ数多い。取材から得た情報を重んじすぎて推測が偏向する部分も散見されるが、安吾の伝記資料としては、若園清太郎『わが坂口安吾』と並んで、この時期までの最上の成果といえる。1986年に増補改訂のうえ『安吾風来記』として再刊された	
1976年9月	鈴木武樹	安吾の主題による七つの変奏曲	解説	『安吾の古代史探偵』(講談社刊)	『安吾の新日本地理』や「道鏡」などに書かれた安吾史観を、『日本書紀』などの史書や歴史学者の説などと照合しながら一つ一つ検証したもの。多数派の学者たちが現代天皇家に忖度して史書の見方をねじ曲げてきたと強く指弾し、「飛鳥の幻」などでの安吾の読みの深さを讃える。半面、安吾の事実誤認による推論については冷静に反証を挙げて批判、特に「飛驒・高山の抹殺」の飛驒王朝などの大胆な仮説は成り立たないと説く	安吾の新日本地理 道鏡 道鏡童子
1976年11月	佐藤忠男	「不連続殺人事件」とエンタテイメントの精神について	紙誌	シナリオ	三島由紀夫のニヒリズムは「自他を害してやまないもの」であったが、安吾には「健康なニヒリズム」があり、「現実を無意味と見ながらも、これを面白くすることによって「無意味さを活気づけ」「現実を生きるに価するものにしてゆく」と説く。「不連続殺人事件」も精神においては「もっとも成功したファルス」であるとし、「傍若無人であればあるほど、この登場人物たちはナンセンスな存在になっていく仕掛けだという	不連続殺人事件
1976年11月	権田萬治	解説	解説	『能面の秘密』(角川文庫刊)	安吾の推理短篇の中では最初期の「投手殺人事件」が最も謎解きゲームの要素が強かったが、以降さまざまなタイプの作品を書いたと指摘。「選挙殺人事件」のように「死の衝動と殺人をからめた推理小説の例はきわめて珍しい」といい、推理よりも「社会の危機的な状況を描く「影のない犯人」、「軽快なサスペンス小説」としての「南京虫殺人事件」「山の神殺人」、死の直前に書かれた傑作「能面の秘密」など、多彩な面白さを手際よく解説している	投手殺人事件 南京虫殺人事件 選挙殺人事件 山の神殺人 正午の殺人 影のない犯人 心霊殺人事件 能面の秘密
1977年3月	頼尊清隆	坂口安吾さんと私	紙誌	アートシアター	戦前、本郷の基会所で知り合った最初から、安吾は自分の衣服を質に入れても奢ってくれる温かい人間だったと回想。一緒に豊島と志雄の家へ基を打ちに行った話、岡田東魚や野上彰らと取手に住む安吾を訪問した話など、貴重なエピソードが満載。「妖怪」連載途絶の経緯も詳しく語っている。『坂口安吾全集』別巻に収録	

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1977年3月	小川徹	作品研究「不連続殺人事件」	紙誌	アートシアター	「不連続殺人事件」の人物造型が、安吾や矢田津世子、お安さんなど実在のモデルからイメージを借りているとする。特に「男の憎悪」がクローズアップされており、「男たちの戦争、ゲームに火をつけたのが「非処女」のエロスであり、テクニクで」あったと説く。エッセイの序盤から犯人名などネタバレしているので、未読の場合は注意が必要	不連続殺人事件
1977年4月	小島良隆	坂口安吾—茨の道を歩んだ裸の男	紙誌	ドストエフスキー狂想曲	「俺の行く道はいつも茨だ。茨だけれど愉快なんだ」と処女作「木枯の酒倉にて」で書いた安吾は、そのとおり、茨の道を歩きつづけたのだと、代表作を遍覧してまとめる	木枯の酒倉から
1977年4月	清水正	坂口安吾とドストエフスキー—『吹雪物語』と『悪霊』を中心に	紙誌	ドストエフスキー狂想曲	アリオージャを書きたいと言っていた安吾だが『吹雪物語』は「退屈」「死」「自殺」などの語が頻出する「できの悪い典型的なモノログ小説」になったと述べる。ドストエフスキーに照らせば、陰と陽のキャラクターのうちの陰ばかりが集まり、アリオージャはいないと。サチ子の酒場のようななどには『悪霊』を模倣した描写がみられ、全体の構成も含めて、むしろ『悪霊』のスタヴローギンの日本版ヴァリエーションとも読めるという	吹雪物語
1977年5月	中島健蔵	疾風怒濤の巻—回想の文学1 昭和初年—8年	単著	(平凡社刊)	中島自身が1932年当時につけていた日記の抜粋があり、1月14日に『文科』の会で安吾や牧野信一、河上徹太郎、本多信、三好達治らと「よしの屋」で飲み、安吾と三好、本多が中島の家に泊まった話など、貴重なナマの資料が見られる。4月4日、8月30日にも安吾らと飲んだ話が書かれている	
1977年6月	村上護	偉大なる落伍者—エリック・サティと坂口安吾	紙誌	アール・ヴィヴァン 西部美術館 ニュース	日本で最初にサティの正しい紹介をしたのが安吾であったとし、安吾はサティに傾倒するあまり「道化(ファルス)あるいは祝祭的な世界を求めてカペーの支配人、サーカス団員をめざした」とする。サティが自作曲のタイトルの皮肉をつけたように、安吾の「風博士」も滑稽なのは見せかけで「風博士」が消失した後には、むなしさだけしか残らない、このむなしさだけを、安吾は書きたかったのだろうと読解。村上護『安吾風来記』(新書館 1986)に「エリック・サティと坂口安吾」と改題して収録	エリック・サティ 風博士
1977年6月	羽根田武夫	鬼の宿帖	単著	(文化出版局刊)	著者は菊富士ホテル経営者の三男。多くの文人や有名人が宿泊した、ホテル形式の下宿屋で、建物や部屋のようなすが詳しく描かれている。安吾は「友人と二人でリヤカーを引っぱって、飄然と菊富士ホテルにやって来られた」といい、荷物は「せんべい蒲団、綿のはみだした丹前、大きな黄色い風呂敷、原稿の下書ばかりがつまった柳行李——これが全部だった」とある。全部置き残して取手へ行ってしまったので、次兄の羽根田孝夫がしばらく保管していたが、最後は屑屋に出してしまったという	
1977年6月	中島健蔵	物情騒然の巻—回想の文学2 昭和9年—11年	単著	(平凡社刊)	中島自身が1935年当時につけていた日記の抜粋があり、安吾の動向が窺える貴重な資料。安吾が竹村書房の顧問として『スタンダル選集』を企画した折、4月25日に東京帝大仏文科講師で研究室助手を務めていた中島のもとへ安吾と大江勲が訪れ、その夜、中島と深更まで飲み、やっと小説が書けるようになったと中島に話したという。5月2日にも中島の研究室にて安吾、大江、大岡昇平、小林正と『スタンダル選集』の相談をしている	
1977年8月	(毎日新聞社編)	昭和文学作家史—別冊1億人の昭和史	共著	(毎日新聞社刊)	代表作家50人のフォトアルバムで、安吾の項には他で見られない貴重な写真が掲載されている。1932年の『三田文学』新進作家号記念撮影で丹羽文雄や水上瀧太郎らとの集合写真に白のスリーピース姿で写るなど。安吾文学の簡単な紹介文は森安理文が担当	
1977年9月	進藤純孝	作品展望 昭和文学(下)	単著	(時事通信社刊)	「墮落論」についての簡単な紹介文。「墮落論」を説く安吾の姿は、石川淳の小説「焼跡のイエス」に出てくる「闇市に降り立ち、こわいもの知らずの連中をふるえ上らせたボロとデキモノとウミとシラミの少年に似ている」とし、「白痴」はそこに辿り着けない男が「墮落論」に鞭打たれながら歯をくいしばっている小説だと論じる	墮落論 白痴
1977年10月	島田昭男	昭和作家論	単著	(審美社刊)	「何処へ—女性追求の意味するもの」(書き下ろし)の章で、安吾作品における精神と肉体の問題を評論。戦前から安吾が取り組んだ問題だが、「吹雪物語」では「物語展開の不統一と主題の拡散化により不成功に終わっている」とみる。戦後の「外套と青空」でも不十分で、「白痴」以降の短篇群も多くの同じ問題を追求している。「とくに「いづこへ」のアキは、男を生殖器としてしか捉えられない女として徹底している」とするが、それでも追求の結果として「再び孤独の世界に舞い戻らざるをえなかったという点で、一応の深化を見せたとしても、充分納得しうるものでなかったように思われる」と論評。ほかに「流氓の眼—狂気と創造」(原題「現代作家における狂気と創造性—坂口安吾」1973.1)、「死者への問い—『真珠』論」(原題「真珠」論」1972.8)を収録	吹雪物語 外套と青空 白痴 いづこへ
1977年10月	安田武	ある時代	単著	(エディタースクール出版部刊)	「戦後のオピニオンリーダーたち—坂口安吾」の項で、「墮落論」は戦中の「日本文化私観」や「青春論」と趣旨のものとして紹介。「二十七歳」には「至純なピューリタン」としての安吾の自意識をみ取り、「思考そのもの、生それ自体が、いってみれば「偉大なる逆説」だったと説く	墮落論 日本文化私観 青春論 二十七歳
1977年10月	権田萬治	解説	解説	『復員殺人事件』(角川文庫刊)	雑誌廃刊により未完に終わった「復員殺人事件」を、安吾の推理小説中の「最高傑作となり得た作品」と高く評価。推理小説＝謎解きゲーム、と主張していた安吾だが、「一定水準の文学性をいわば自明の前提として」の宣言だったとして、本作の謎めいた雰囲気づくりや文章表現のうまさ指摘している。高木彬光執筆の続篇も巧みな出来で「大変な苦勞のあとがうかがえる」と評価	復員殺人事件
1977年11月	花田俊典	「ふるさと」への回帰—坂口安吾「紫大納言」の世界	紙誌	近代文学論集	これまでの「紫大納言」批評を検証し、大納言の最期を「救いのない死」と読むことに疑問を呈する。「水」と「孤独」に還元される大納言の最期は「ふるさと」へ回帰することであり、「水は聖なる浄化の具でもある」と説く。花田俊典『坂口安吾生成』(白地社 2005)収録	紫大納言
1977年11月	井上友一郎	泥絵の自画像	単著	(エポナ出版刊)	1933年、『桜』創刊の頃の貴重なエピソードが盛り沢山。たまたま窓外に桜が見えたので田村が誌名を提案した話、大島敬司が経費を顧慮しなかったため版元に逃げられた話、以後は井上が編集長になり、井上、田村、坂口、真杉、北原の5人で新橋駅近くの印刷屋へ支払いの交渉に出かけたが、坂口は「こんな交渉はほくはいやだ、失敬するよ」と帰ってしまった話など。当時の安吾は、飲んで暴れる井上や田村によく諭して「きみたちは文学をするために東京に出てきたのか、それとも無頼の徒になるためにきたのか」と言ったという。これらの記述は七北数人『評伝坂口安吾』(2002)で要約して紹介された	
1977年12月	永瀬浩美	坂口安吾試論(一)	紙誌	常総文学	安吾は戦前あまり評価されなかったとし、戦後も批判的な意見に多くさらされたとして、丹羽文雄や平野謙の批評の一部を引用、「近年」においても倉橋由美子の批判などを引用し、つまり「誤解され」つづけている作家と述べる。しかし「誤解」でないほうの批評が引用されないで、評者の永瀬自身が「誤解」しているとした受けとれない	
1977年12月	小島良隆	『吹雪物語』について	紙誌	ドストエフスキー狂想曲	『吹雪物語』の登場人物を紹介したあと、「安吾は彼等を見詰めているうちに、自分がこの鏡の部屋の住人であることに気が付き始めた。彼等の顔がすべて自分の顔だったのだ」と書く。「絶対の諦らめ」の中でなお「一つの夢を求めて生きる」人間の姿を描こうとした長篇であると述べる	吹雪物語
1977年12月	山本祥一郎	作家と父	単著	(大陸書房刊)	おもに「石の思ひ」に描かれたエピソードの抜粋でできたエッセイ。安吾の両親への思いを「石の思ひ」だけでまとめた、やや乱暴な紹介文	石の思ひ

発表年月	執筆者名	論文タイトル	発表媒体	発表紙誌・刊本名	内容・備考	主な言及作品
1978年1月	八橋一郎	五十人の作家(19)「坂口安吾」	紙誌	関西文学	安吾の生涯を短くまとめたものだが、「風博士」を「フザケた書き出しで」「世評は悪かった」と書くなど、主観的な独断が続く。列挙されるエピソードも下世話なものを中心に選んでいる	風博士
1978年1月	岡本卓治	戦後の坂口安吾—石川淳を補助線として	紙誌	日本文学(日本文学協会編)	安吾と「盟友」だと思っていた石川淳は「人間の真のありよう」を自然との「断絶」において追求したのに対し、安吾は自然の中へ「ずかずかと踏み込んで行けた人間」とする。世間というものに対しても同様で、それゆえ安吾は「いかなる読者をもみな俗物にしてしまふ魔法を心得てゐる」と石川は述べたのだという	
1978年2月	丸山一	雪の象嵌した文字	紙誌	互尊文芸	新潟寄居浜の安吾碑「ふるさとは／語ることなし」の元の色紙は、丸山が新潟放送制作部に勤務していた関係でもらったものであるが、色紙は3枚続きで、他の2枚には「雪も新潟の／雪は変に親切／すぎる」「コタツはガサツで／親切すぎてイヤ／なものだが あた／らぬわけにもいかぬ／悲しい新潟」とあった。そこから丸山は安吾には新潟憎悪があるという考えに取り憑かれてしまう。安吾碑建立の進行次第や、安吾が晩年新潟を3度訪れた経緯、ラジオ出演した話、安吾と飲みに行った話などは貴重だが、安吾への反感がそこかしこににじむ。後年、大幅な改稿と増補を経て『安吾よふるさとの雪はいかに』(考古堂 2005)にまとめられる	
1978年3月	浅子逸男	坂口安吾ペンネーム考	紙誌	都大論究	鶴殿新「わが師友」(1957)で、安吾自身から聞いたというペンネーム由来が定説になっているが、それを語ったあと「僕は荒行で悟りを開いたから、安吾にしたんだ」と照れ隠しに笑った部分の解明を試みる。東洋大学で神経衰弱になった頃、芥川自殺の衝撃を乗り越えるための精神遍歴から「安居」に至った自分を顧み、「安吾」としたと説く。もっとも後年、豊山中学卒業時すでに「安吾」と記していたことがわかっている。浅子逸男『坂口安吾私論』(有精堂出版 1985)に「坂口安吾の出発」と改題して収録	
1978年3月	青山光二	青春の賭け(中公文庫)	単著	(中央公論社刊)	1955年刊行本の文庫版	

〈発表媒体の略称〉
 単著→一人の著者による単行本
 共著→複数の著者による単行本に収録
 紙誌→雑誌・新聞・大学紀要・機関紙等に掲載
 解説→作品集・全集・選集の解説や解題
 月報→作品集・全集・選集の付録

関井光男編「研究文献目録一覧」(1973.5.31 冬樹社『坂口安吾研究』Ⅱ所収)、浅子逸男編「主要参考文献目録」(1987.12.15 三弥井書店『坂口安吾研究講座Ⅲ』所収)、野村幸一郎編「坂口安吾主要参考文献一覧」(1993.2 『国文学 解釈と鑑賞』58-2所収)、小林真二「研究動向 坂口安吾」(2001.3 『昭和文学研究』第42集所収)、大原祐治「坂口安吾・研究動向—2000年～2004年—」&大原祐治・鬼頭七美編「坂口安吾研究文献目録—2000年1月～2004年9月—」(2004.11.30 ゆまに書房『坂口安吾論集Ⅱ 安吾からの挑戦状』所収)および大原祐治編「坂口安吾研究文献目録(2004～)」(同氏ホームページ掲載)を参照した。